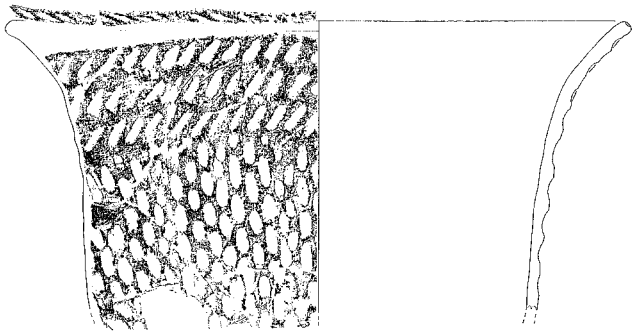
野添大辻遺跡（第１次）発掘調査報告

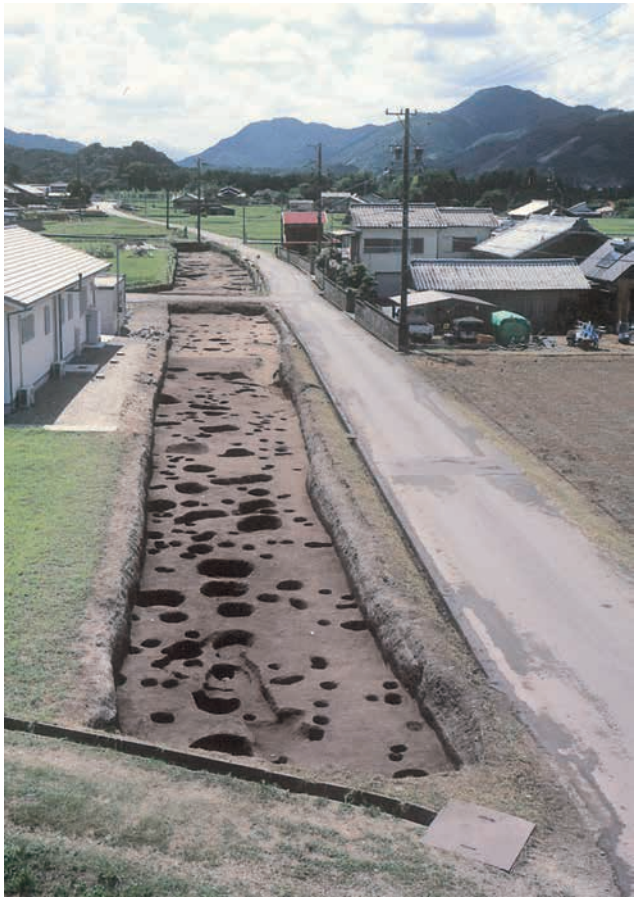
～度会郡大紀町野添～



SF60 出土押型文土器

2014（平成 26）年 3 月

三重県埋蔵文化財センター



中垣戸・中道 A 地区全景
（東から）

中垣戸地区（縄文遺構面）全景（東から）

竪穴住居 SH22 と調査区土層（北から）

竪穴住居 SH42（北から）

SF61 全景（北から）

SF36（南から）

SF60（南東から）

SF37 長軸断ち割り土層（西から）

SF57 長軸断ち割り土層（西から）

SF58 長軸断ち割り土層（東から）

SF36 短軸断ち割り土層（南から）

SF61（北から）

SF61 短軸断ち割り（北から）

SF60 上部押型文土器出土状況（南から）

SF60 出土押型文土器

例　言

1　本書は、三重県度会郡大紀町野添に所在する野添大辻遺跡の第１次発掘調査にかかる報告書である。

2　本遺跡の調査は主要地方道伊勢大宮線 (野添工区) 地方特定道路整備事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部からの経費の執行委任を受けて実施した。

3　発掘調査期間は平成 24 年 5 月 8 日～平成 24 年 9 月 25 日である。

4　第１次調査の発掘調査面積は、本調査と立会調査を合わせて 997㎡である。

5　発掘調査の体制は次の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

［現地調査　平成 24 年度］

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　　調査研究１課　主査　星野　浩行
主幹　伊藤　裕偉
活用支援課　研修員　門野　隆一

発掘調査作業委託　㈱中浦土木

［整理作業　平成 25 年度］

整理担当　三重県埋蔵文化財センター　　調査研究１課　主幹　伊藤　裕偉
技師　櫻井　拓馬
小原　雄也

保存処理委託（鉄製品）　㈱吉田生物研究所

6　本書の執筆は上記の現地調査・整理担当が分担し、文責は各節の文末に記載した。全体の編集は伊藤・櫻井があたった。遺物写真の撮影は櫻井が行った。

7　発掘調査および整理作業に際しては、地元野添区の方々をはじめ、下記の諸氏や機関に御指導･御協力を賜った。記して感謝したい（敬称略、組織名称は当時）。

奥義次、大下明、遠部慎、田部剛士、中瀬秀夫、堀木真美子、三重県県土整備部、大紀町教育委員会

8　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

9　平成 25 年度に、縄文時代の遺構・遺物に関連する自然科学分析を実施している。この成果については次年度以降刊行予定の報告書にて別途報告したい。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の 1：25,000 地形図「国束山」「横野」「脇出」「伊勢佐原」（平成 12 年 10 月発行）、三重県共有デジタル地図の 1：2,500 地形図（06PF811 番）を用いた。

三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合地第 93 号）

2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

3　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

4　本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＦ：煙道付炉穴・その他の炉穴

ＳＤ：溝　ＳＺ：性格不明遺構　　Pit：柱穴または小穴

5　土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967 年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。

6　遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

縄文土器（1：3）、石器（石鏃 1：1、剥片石器 1：2、礫器・磨石類・磨製石斧 1：3、石皿類 1：6）

土師器・陶磁器（1：4）、鉄器（1：2 または 1：4）

7　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

①共通事項

・色調は外面のみ、標準土色帖の色名を記す。マンセル記号の表記は省略した。

・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の 4 段階である。

・土器の残存率は全周を 12 分割して示す（例：口縁部 3/12）。1/12 以下のものは「口縁部片」など。

・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。

②縄文時代の遺物

・縄文土器における器種名、調整のナデ・ユビオサエは記述を省略した。

・土器の含有鉱物は、雲母が顕著なもののみ特記する。

・口径が復元できたものは備考に記す。

・備考に、遠部慎氏による土器付着物採取試料の試料番号を記した（例：MEMB-22）。

8　註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。

9　遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。

10　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。また、遺物写真は縮尺不同である。

目　次

巻頭図版

例言・凡例

目次

Ⅰ　前言（星野・伊藤）…… 1

Ⅱ　位置と環境（星野）…… 6

Ⅲ　層位と遺構（星野・伊藤・櫻井）……9

Ⅳ　遺物（櫻井・小原）……29

Ⅴ　総括（伊藤・櫻井）……73

巻末図版

挿図目次

第 1 図　発掘調査位置図 …… 4

第 2 図　遺跡地形図 …… 5

第 3 図　調査区位置図 …… 5

第 4 図　遺跡位置図 …… 8

第 5 図　調査区土層図（中垣戸地区） ……10

第 6 図　調査区土層図（中道Ａ・Ｂ地区） ……11

第 7 図　中垣戸地区遺構全体図 ……12

第 8 図　ＳＨ 22・39 平・断面図……16

第 9 図　ＳＨ 42・48 平・断面図……17

第 10 図　ＳＨ 50・ＳＨ 64・ＳＦ 97 平・断面図 ……18

第 11 図　ＳＦ 33・36・37・44 平・断面図……19

第 12 図　ＳＦ 46・53・57・58 平・断面図……20

第 13 図　ＳＫ 45・ＳＦ 59・60・61・62 平・断面図 ……21

第 14 図　中道Ａ地区遺構全体図 ……23

第 15 図　中道Ｂ地区遺構全体図 ……24

第 16 図　ＳＫ 1 平・立面図 ……26

第 17 図　押型文土器属性分類模式図 ……31

第 18 図　出土遺物実測図 1 ……34

第 19 図　出土遺物実測図 2 ……35

第 20 図　出土遺物実測図 3 ……36

第 21 図　出土遺物実測図 4 ……37

第 22 図　出土遺物実測図 5 ……38

第 23 図　出土遺物実測図 6 ……39

第 24 図　出土遺物実測図 7 ……40

第 25 図　出土遺物実測図 8 ……41

第 26 図　出土遺物実測図 9 ……42

第 27 図　野添大辻遺跡の石器組成 ……43

第 28 図　出土遺物実測図 10 ……48

第 29 図　出土遺物実測図 11 ……49

第 30 図　出土遺物実測図 12 ……50

第 31 図　出土遺物実測図 13 ……51

第 32 図　出土遺物実測図 14 ……52

第 33 図　出土遺物実測図 15 ……53

第 34 図　出土遺物実測図 16 ……56

第 35 図　出土遺物実測図 17 ……57

第 36 図　出土遺物実測図 18 ……58

第 37 図　出土遺物実測図 19 ……59

第 38 図　出土遺物実測図 20 ……60

第 39 図　縄文時代主要遺構分布図 ……73

第 40 図　押型文土器分類図 ……75

写 真 1　範囲確認調査 …… 1

写 真 2　調査の状況 …… 1

写 真 3　押型文土器の出土 …… 2

写 真 4　現地説明会風景 …… 2

表 目 次

第 1 表　遺構一覧表（縄文時代）……27

第 2 表　遺構一覧表（中世以降）……28

第 3 表　縄文遺構出土石器集計表 ……44

第 4 表　石材分類表 ……45

第 5 表　器種別石材利用状況 ……45

第 6 表　遺物観察表（縄文時代）……61

第 7 表　遺物観察表（中世以降）……69

写真図版一覧

・巻頭図版１（調査区全景）
中垣戸・中道Ａ地区全景（東から）
中垣戸地区（縄文遺構面）全景（東から）
・巻頭図版２（竪穴住居）
竪穴住居ＳＨ22と調査区土層（北から）
竪穴住居ＳＨ42（北から）
・巻頭図版３（炉穴①）
ＳＦ61全景（北から）
・巻頭図版４（炉穴②）
ＳＦ36（南から）
ＳＦ60（南東から）
・巻頭図版５（炉穴③）
ＳＦ37長軸断ち割り土層（西から）
ＳＦ57長軸断ち割り土層（西から）
・巻頭図版６（炉穴④）
ＳＦ58長軸断ち割り土層（東から）
ＳＦ36短軸断ち割り土層（南から）
・巻頭図版７（炉穴⑤）
ＳＦ61（北から）
ＳＦ61短軸断ち割り（北から）
・巻頭図版８（押型文土器）
ＳＦ60上部押型文土器出土状況（南から）
ＳＦ60出土押型文土器
・写真図版１（調査区全景①）
調査区近景（東から）
・写真図版２（調査区全景②）
中垣戸地区近景（東から）
中道Ａ地区全景（西から）
・写真図版３（調査区全景③）
中道Ｂ地区全景（西から）
立会Ａ地区全景（東から）
・写真図版４（縄文時代の遺構①）
中垣戸地区縄文遺構面（西から）
ＳＨ42（北から）
・写真図版５（縄文時代の遺構②　竪穴住居）
ＳＨ39（東から）
ＳＨ39（北から）
・写真図版６（縄文時代の遺構③　竪穴住居）
ＳＨ48（西から）
ＳＨ48（北から）
ＳＨ50（南から）
・写真図版７（縄文時代の遺構④　炉穴）
ＳＦ33礫群（北から）
ＳＦ33完掘（北から）
ＳＦ36・37・63（南から）
・写真図版８（縄文時代の遺構⑤　炉穴）
ＳＦ36（南から）
ＳＦ37（南から）
・写真図版９（縄文時代の遺構⑥　炉穴）
ＳＦ44（南から）
ＳＦ46（東から）
・写真図版10（縄文時代の遺構⑦　炉穴）
ＳＦ53（南西から）
ＳＦ57断ち割り状況（西から）
・写真図版11（縄文時代の遺構⑧　炉穴）
ＳＦ59・60（南東から）
ＳＦ60（東から）
・写真図版12（縄文時代の遺構⑨　炉穴）
ＳＦ60上部押型文土器出土状況（南東から）
ＳＦ60上部押型文土器出土状況（南から）
・写真図版13（縄文時代の遺構⑩　炉穴）
ＳＦ61（北東から）
ＳＫ45・ＳＦ62（西から）
・写真図版14（中・近世の遺構①）
ＳＫ75（中道Ａ地区、東から）
ＳＫ76（中道Ａ地区、東から）
・写真図版15（中・近世の遺構②）
ＳＥ28（中垣戸地区、北から）
ＳＫ１（中道Ｂ地区、東から）
・写真図版16（出土遺物①　縄文土器）
遺物　１～40
・写真図版17（出土遺物②　縄文土器）
遺物　43～93
・写真図版18（出土遺物③　縄文土器）
遺物　94～139
・写真図版19（出土遺物④　縄文土器）
遺物　140～202
・写真図版20（出土遺物⑤　縄文土器）
遺物　199
・写真図版21（出土遺物⑥　縄文土器）
遺物　211～317
・写真図版22（出土遺物⑦　縄文土器）
遺物　318～363
・写真図版23（出土遺物⑧　縄文土器）
遺物　385～400
口縁端部細部（刻み）・補修孔
・写真図版24（出土遺物⑨　縄文土器）
文様細部（刺突・押型文・縄文）
・写真図版25（出土遺物⑩　石器）
遺物　401～413・433
・写真図版26（出土遺物⑪　石器）
遺物　415～432
・写真図版27（出土遺物⑫　石器）
遺物　434～441
・写真図版28（出土遺物⑬　石器）
遺物　442～449
・写真図版29（出土遺物⑭　中・近世）
遺物　468・476・483・497・498・501・520・532
・写真図版30（出土遺物⑮　中・近世）
遺物　496・549・558・589・597・601・605・606・608

Ⅰ　前　言

1．調査の契機と協議経過

県道伊勢大宮線は、伊勢市から旧大宮町を結ぶ約40㎞の地方主要道であり、周辺住民にとって主要な幹線道路である。この道路は主に宮川沿いの山間部を通り、一部に狭隘な区間が残存するため、各地区にバイパス建設や拡幅工事がなされている。

野添大辻遺跡は、今回の道路改良工事を契機として新たに把握されることとなった遺跡である。その経緯は、以下の通りである。

（1）事前協議の経過

事業照会と分布調査　三重県教育委員会および三重県埋蔵文化財センター（以下、「当センター」）では、埋蔵文化財保護を目的とし、当該年度の県営公共事業にかかる事業照会を、前年度の秋頃に実施している。主要地方道伊勢大宮線道路改良工事にかかる事業照会が平成23年１月にあった。それを受けて、当センターでは事業地内の分布調査を実施したところ、事業地内を含む広範囲な遺物散布を確認した。

遺跡の発見　その結果をもとに、当センターと三重県教育委員会および大紀町教育委員会が協議し、事業地の一部を含む野添地区における遺物散布範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。遺跡名称は「野添大辻遺跡」とし、平成23年４月25日付け、教埋第25号で当センター所長から県教育長あてに「新たな埋蔵文化財包蔵地の把握について」の通知を行った。

範囲確認調査　県道伊勢大宮線の道路改良工事に伴う範囲確認調査は、伊勢建設事務所（以下、伊勢建設）調整のもと、平成23年９月５日と９日の２日間にかけて、事業予定地内に33ヶ所の調査坑を設定して実施した。その結果、事業地内に大きく分けて３地点（合計約2,780㎡）で遺構・遺物が確認され、工事着工前に発掘調査が必要であることが判明した。なお、範囲確認調査が２日間に渡ったのは、同月３日から４日にかけて猛威を振るった台風12号（紀伊半島大水害を引き起こした）の影響で、調査地の水が全く引かない状態になったことによる。

範囲確認調査の成果を基に、当センターと伊勢建設とで協議を行った。その結果、事業の進捗に合わせて事前の発掘調査を実施することとなった。

（2）第１次調査の実施

範囲確認調査で判明した約2,780㎡の調査面積は、一年度で処理するには面積が大きかった。そのため、当センターと伊勢建設とで協議を重ね、３分割して調査を進めることとなった。

発掘調査は平成24年度から実施した。その第１次調査区となったのが、ここで報告する調査区（中垣戸・中道地区）である。調査面積は約907㎡である。

また、調査区に隣接する町道部分で工事掘削が行われる部分については、３か所（立会Ａ～Ｃ地区）の約90㎡に工事立会調査を実施した。

なお、残りの範囲は平成25～26年度にかけて第

写真１　範囲確認調査

写真２　調査の状況（中垣戸地区）

２次、第３次調査が実施される予定である。

２．第１次調査の経過と各種措置

（１）調査の経過

第１次調査は平成 24 年５月６日に開始し、平成 24 年９月 25 日に終了した。また本調査終了後に３カ所の立会調査を実施した。

調査の経過に関しては以下の通りである。

【調査日誌（抄）】

2012（平成 24）年

５月 24 日　中垣戸地区の表土掘削開始。縄文土器片が出土。予定より深い掘削へ。土量増加のため、作業工程変更へ。

５月 30 日　中道Ｂ地区の表土掘削開始

５月 31 日　中道Ｂ地区中央付近より石列検出

６月 ５ 日　中垣戸地区の遺構検出を開始するが、検出できず。再度重機による掘削へ。中道Ｂ地区の調査から始めることに。

６月 ８ 日　中道Ｂ地区の遺構検出開始

６月 12 日　中道Ｂ地区の遺構掘削開始。石組遺構の掘削を進める。

６月 18 日　中道Ｂ地区の全景写真撮影

６月 19 日　台風４号接近のため、休工。６月下旬は天候不順で調査進まず。

６月 26 日　中垣戸地区の遺構検出と掘削開始。遺構はっきりせず、試行錯誤の調査。

６月 29 日　大紀町七保小学校の６年生 13 名が遺跡の見学と体験発掘を行う。

７月 ２ 日　中道Ｂ地区の実測終了。のち、埋戻し。

７月 ４ 日　J8 グリッドから押型文土器出土。この日は何もできなかった。

写真３　押型文土器の出土

７月 ５ 日　竪穴住居や煙道付炉穴を検出。以降、次第に同様の遺構が見つかる。

７月 ９ 日　中道Ａ地区の表土掘削を並行して開始（13 日まで）。縄文遺構はほとんどなく、二面調査の必要はなし、と判断する。

７月 23 日　中垣戸地区の遺構掘削終了。中道Ａ地区の遺構検出、掘削開始。このころ猛暑日が続くが、掘削ペースは早い。

８月 １ 日　中道Ａ地区の遺構掘削終了

８月 ３ 日　中道Ａ地区全景写真撮影

８月 ６ 日　中道Ａ地区、中垣戸地区の実測開始

８月 10 日　中道Ａ地区全景写真撮影

８月 11 日　現地説明会実施（95 名参加）

８月 15 ～ 31 日　遺構と土層断面の実測。煙道付炉穴の断ち割りと実測。現地調査終了

９月４～ 13 日　埋め戻し、現場撤収完了

10 月中旬　拡張される現町道に路床改良が実施されることが判明。協議の結果３カ所で立会調査を行うことになる。

11 月 15 ～ 16 日　立会Ａ地区の調査実施

11 月 21 日　立会Ｂ地区の調査実施

2013（平成 25）年

１月 ９ 日　立会Ｃ地区の調査実施。ＳＦ 46 の煙道部分確認

（２）文化財保護法にかかる諸手続

○文化財保護法第 97 条第１項「遺跡の発見通知」

（県教育委員会委員長あて埋蔵文化財センター所

写真４　現地説明会風景

長通知）

平成 23 年 4 月 25 日付　教埋第 25 号

○県埋蔵文化財保護条例第 48 条第 1 項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育長あて三重県知事通知）

平成 23 年 8 月 31 日付　伊建第 562 号

○文化財保護法第 99 条第 1 項（県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知）

平成 24 年 5 月 14 日付　教埋第 40 号

○文化財保護法第 100 条第 2 項「埋蔵文化財の発見・認定について」（大台警察署長あて県教育委員会委員長通知）

平成 24 年 10 月 5 日付　教委第 12 － 4411 号

平成 25 年 2 月 12 日付　教委第 12 － 4432 号

（3）普及公開

平成 24 年 8 月 11 日（土）に現地説明会を実施し、95 名の参加があった。平成 24 年 9 月下旬から平成 25 年 1 月下旬までの約 4 ヵ月間、三重県松阪庁舎 1 Ｆロビーにおいて、野添大辻遺跡の出土遺物を展示した。平成 25 年 3 月 9 日（土）に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2012」では遺物展示および解説を行い、33 名の参加があった。

また、平成 25 年 4 月 20 日（土）に三重県埋蔵文化財センター嬉野分室で行われた考古学講座において、「新しい文化財の仲間たち～野添大辻遺跡（度会郡大紀町）～」と題して遺跡説明および遺物解説等を行い、43 名の参加があった。

3．発掘調査と記録の方法

（1）地区設定

調査区内における地区割は 4 m方眼で設定しており、西から東へ数字を、北から南へアルファベットを与え、各北西角をグリッド名称とした。中垣戸地区・中道Ａ地区・中道Ｂ地区は連動しており、中垣戸地区の東西は 1 ～ 18、南北はＧ～Ｍ、中道Ａ地区の東西は 19 ～ 34、南北はＣ～Ｈ、中道Ｂ地区の東西は 35 ～ 45、南北はＡ～Ｄの範囲となる。

（2）遺構図面

遺構検出段階でグリッド単位の 1/20 略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに 1/100 の遺構配置図を作成することで、調査区全体の遺構配置を把握した。遺構平面図・土層断面図については 1/20 で手書き実測を行った。

竪穴住居跡、煙道付炉穴跡など各遺構の詳細な平面図･立面図等は 1/10 で手書き実測を行った。なお、これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。

（3）出土遺物の整理

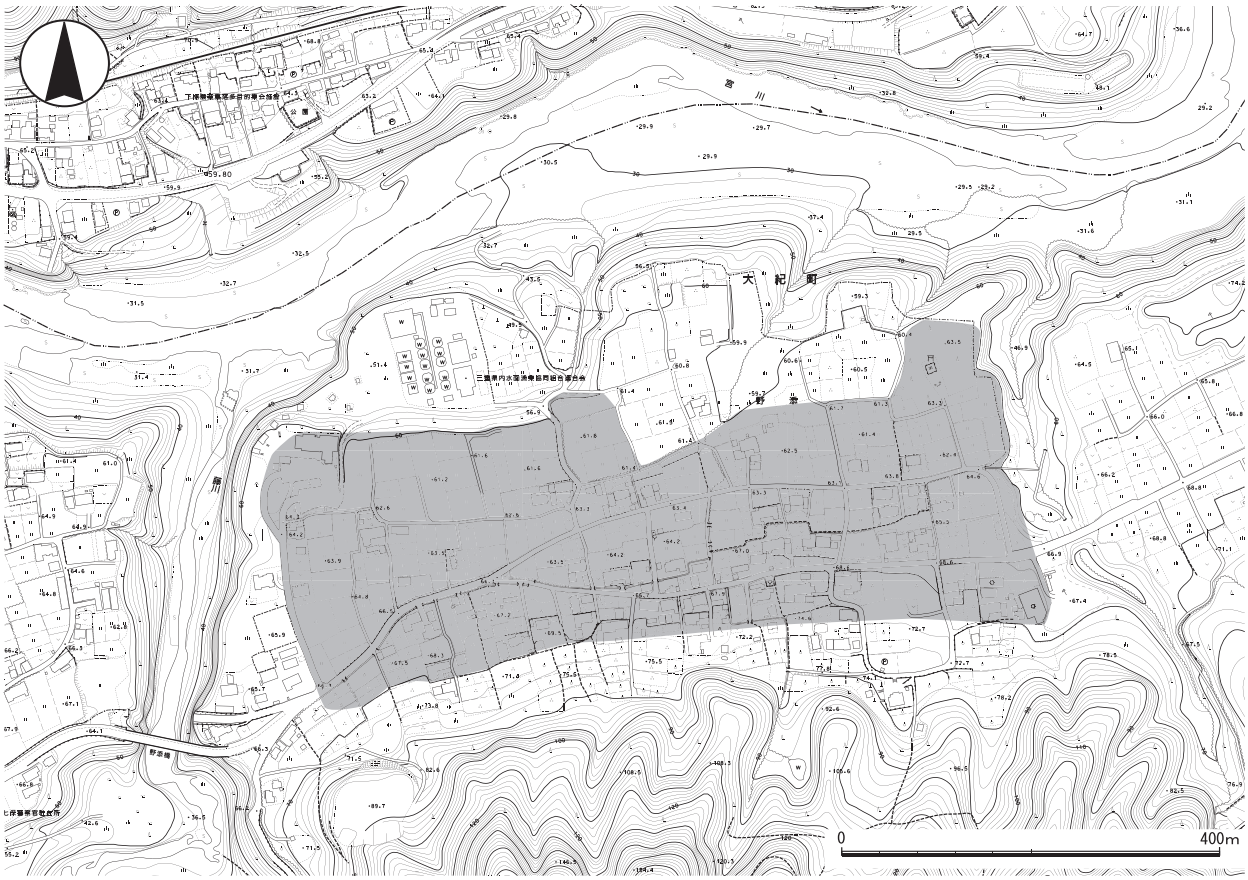
出土遺物は出土年月日と遺構の区別を行い、小地区単位で取りあげている。また報告書掲載遺物およびその参考資料（Ａ遺物）と未掲載遺物（Ｂ遺物）に区分して整理し、保存している。

（4）写真撮影

遺構関連の写真では、調査区全景写真は４×５判（モノクロ・カラーリバーサル）で、また重要な個別遺構はブローニーの６×９判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影した。また調査前状況や調査の進捗状況､遺構､土層面などの撮影は 35㎜判（モノクロ･カラーリバーサル）で撮影した。使用したカメラは４×５判と６×９判ではウィスタフィールド、35㎜判ではニコンＦＭ２である。またデジタル画像も適宜撮影した。

遺物の写真撮影はブローニーの６×９判・４×５判でモノクロ・カラー撮影をし、細部写真の撮影はデジタルカメラを用いた。　（星野･伊藤）

第1図　発掘調査位置図（1：5,000）



第2図　遺跡地形図（1：8,000）

第3図　調査区位置図（1：2,000）

Ⅱ　位置と環境

1．地理的環境

野添大辻遺跡（1）は三重県度会郡大紀町野添に所在する（第4図）。大紀町は三重県中央部の紀伊山地のなかに位置し、旧大宮町・旧紀勢町・旧大内山村が合併してできたものであり、野添地区は旧大宮町域にある。大紀町の地形はほとんど山地・丘陵からなり、標高600～800m程の山々に囲まれており、平地は宮川やその支流に沿ってわずかにみられるだけである。宮川は三重県と奈良県境にある大台ケ原を源流とし、三重県南部を蛇行しながら東流する1級河川である。総延長は約93kmにおよび、途中で大内山川・藤川・一之瀬川・横輪川などの多くの支流をあわせて伊勢湾に注いでいる。上流域は日本でも有数の多雨地域である大杉谷の渓谷があるため、宮川の水量は豊富で、何度も日本一の清流に選ばれるほど流れる水は清く美しい。中流域では河岸段丘を利用して茶の栽培が盛んで、下流域は伊勢市内の肥沃なデルタ地帯を形成している。

野添地区は宮川の右岸段丘上に位置する比較的大きな平坦面である。宮川と支流の藤川が合流する地で、集落と宮川の高低差は約30mあり、深い谷が形成されている。野添地区は、中世には伊勢神宮から滝原宮を経由して熊野へ続く熊野脇道が通っていたと考えられる。野添字中垣戸から宮川へ向かう道が渡し場道であり、対岸の下楠（大台町）を結ぶ往来として古くから利用された。また、野添地区を含む宮川上流部には伊勢と熊野を結ぶ信仰の道として開かれた難路の「くまのみち」が通っていた。近世には野添対岸の下楠・上楠を通る道が中心で、野添地区付近は俗に「熊野脇道」と呼ばれる道が通っていた。今ではここにＪＲ紀勢本線や国道42号線、また近年には近畿自動車道尾鷲多気線も開通して三重県と和歌山県を結ぶ交通の要所となっている。

宮川は、中央構造線外帯のうち三波帯に属し、遺跡周辺の基盤岩は泥質片岩である。宮川上流や藤川・大内山川は秩父累帯を北流し、砂岩・泥岩・チャートなどを下流に供給している。遺跡付近の宮川河床で観察される礫の多くは、この秩父累帯に産するものであろう。

2．歴史的環境

野添大辻遺跡が位置する宮川中流域には旧石器および縄文時代の遺跡が数多く存在している。旧石器時代の遺跡としては、宮川と支流の濁川が合流する地点にある出張遺跡（2）が広く知られている。ナイフ形石器を中心とした石器類が2万点あまりも出土した三重県を代表する遺跡のひとつである(1)。

縄文時代では大紀町神原地区の町指定史跡（昭和58年4月1日指定）である樋ノ谷遺跡（3）で縄文時代早期から晩期にかけての竪穴住居や土坑などが確認されている(2)。また森添遺跡（4）では後期から晩期にかけての遺構や多種多様な遺物が多数確認されている(3)。野添地区の東端には野手遺跡（5）があり、前期を主体に早期～後期におよぶ土器および石鏃・石匙・石錐・掻器など多様な器種の石器が採取されている。また野原地区にある大西遺跡（6）でも後期の土器を中心に早期や中期の土器も微量にあり、石器は器種、量共に豊富にある(4)。

また櫛田川流域にはなるが、中流域左岸の鴻ノ木遺跡（7）では縄文時代早期と後期、弥生時代以降の遺構・遺物が検出されている。なかでも縄文時代早期の大川式期に属する煙道付炉穴や竪穴住居などの遺構と尖底深鉢の完形で出土した押型文土器や礫器を中心とする大量の石器が出土し、注目される(5)。さらに坂倉遺跡（8）では縄文早期の炉跡や土坑が確認され(6)、大原堀遺跡（9）でも縄文晩期の墓跡等が確認される(7)などこの地域の縄文遺跡は多い。宮川流域は、櫛田川流域と共に県下の他地域に比べて縄文時代の遺跡が集中する地域で、長期間にわたって広く縄文文化が展開していたといえる。

しかし弥生時代にはいると宮川中流域の状況は一変する。野添地区では現在のところ弥生時代の遺跡は確認されておらず、周辺には対岸の川添地区に後期の遺物が採集されている林地遺跡（10）や野原地区の引瀬遺跡（11）、滝原地区の長者野遺跡が散見さ

れる。下流域で多くの遺跡が確認されているのとは対照的である(8)。さらにこの状況は古墳時代から古代にかけてより顕著となり、滝原地区の長者野古墳群で計四基の古墳（消滅したもの含む）が知られている程度である。

中世になると遺跡は増加し、古瀬戸の蔵骨器が出土した長ヶ中世墓群や長ヶ遺跡（12）がある(9)。またいくつかの中世城館の存在も確認されており、宮川左岸の川添地区にある粟生城跡（13）は山地の尾根の先端部付近に立地している(10)。また同じ川添地区には平地の居館で２ヶ所の堀をもつ奈良井城址（14）がある。南北朝時代から戦国期にかけて、この地域には南朝の中心勢力である北畠氏が勢力を伸ばし、その後も戦国大名として支配を確立していった。対岸の大台町には三瀬館址や下三瀬城址など北畠氏ゆかりの史跡が多い(11)。

また当地域は伊勢神宮領との関係が古代から深く、町内には内宮の別宮である滝原宮が置かれている。野添地区も古来神領で七箇御園のうちといわれる(12)。

戦国末期の蒲生氏郷や藤堂高虎などの支配を経て、江戸時代になると、野添地区を含めた旧大宮町域のほとんどは、紀州和歌山藩の勢州三領（白子・松阪・田丸）内の田丸領に属した。野添地区は水利に恵まれず、灌漑用水も末端の野添では十分に機能しなかったため、耕田不足となり離村者が増加し、村勢は衰退した。元禄年間（1688 ～ 1704）には家数90 軒、人数 450 人であったが、文化 11（1814）年では家数 36 軒、人数 170 人と激減、「死絶、株絶、潰百姓にて内力弱り歎ケ敷存じ奉り候」と切々訴えている。しかし江戸期には藩の援助もなく、明治 28（1895）年には地区の力を結集して近くの桂谷に池を築いた(13)。

その後、明治 22（1889）年には町村制施行により、野原・野添・金輪・打見・神原・古里・藤の七村が七保村となった。今回発掘調査を実施した中垣戸地区に七保村役場があったのは明治 34（1901）年 1 月から大正 2（1913）年 5 月までである。昭和 31（1956）年には七保村と滝原町が合併して大宮町となり、さらに 平成 17（2005）年 2 月には旧大宮町･旧紀勢町･旧大内村が合併して大紀町が成立し、現在に至っている。（星野）

註

（1）大台町出張遺跡調査会『出張遺跡調査報告書』1979 年。

（2）三重県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告（樋ノ谷遺跡）』1983 年 / 大宮町史編集委員会『大宮町史』歴史編、1987 年。

（3）度会町教育委員会『森添遺跡発掘調査報告』2011 年。

（4）大宮町史編集委員会『大宮町史』歴史編、1987 年。

（5）三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡（下層編）』1998 年。

（6）三重県埋蔵文化財センター『研究紀要』第 2 号、1993 年。

（7）三重県埋蔵文化財センター『大原堀遺跡発掘調査報告』2008 年。

（8）皇学館大学考古学研究会『宮川流域における弥生文化』2007 年。

（9）大台町の遺跡に関しては、下記文献に拠った。
皇學館大学考古学研究会『大台町の遺跡』1975 年。

(10) 三重県埋蔵文化財センター『粟生城跡』2002 年。

(11) 註 9 前掲書。

(12) 平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983 年。

(13) 註 4 前掲書および大宮町教育委員会『大宮町歴史の道』1983 年。

野添村の記述の出典は『中村虎夫氏蔵文書』である。なお、中村虎夫氏宅は今回調査を実施した中垣戸地区にあり、七保村役場があった場所である。

遺跡名

1．野添大辻遺跡	2．出張遺跡	3．樋ノ谷遺跡	4．森添遺跡	5．野手遺跡
6．大西遺跡	7．鴻ノ木遺跡	8．坂倉遺跡	9．大原堀遺跡	10．林地遺跡
11．引瀬遺跡	12．長ヶ中世墓群、長ヶ遺跡		13．栗生城跡	14．奈良井城址

第４図　遺跡位置図（1：100,000）　※国土地理院発行 1：25,000「国束山」「横野」「伊勢佐原」「脇出」による

Ⅲ　層位と遺構

1．基本層序

（1）調査地の地形

野添大辻遺跡は、宮川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。野添大辻遺跡第１次調査区は、中央部の中道Ａ地区西部が標高約 64 ｍで最も高く、西側の中垣戸地区および東側の中道Ｂ地区はそれよりも 10 ～ 30㎝程度低くなっている。つまり中道Ａ地区を頂点に、東西が低くなる地形である。

この状況は、後述のように発掘調査で確認された地層でも認識できる。高低差は現況と大きく変わらないが、基盤層では中道Ａ地区と中道Ｂ地区の差があまり見られなくなっている。

（2）層位の状況

土層断面図は中垣戸地区では南壁と西壁を、中道Ａ地区では南壁と東壁、中道Ｂ地区では南壁をそれぞれ図示した（第５図・６図参照）。立会Ａ地区は、中道Ｂ地区に類似すると判断し、図化しなかった。

基本層序を上から順に示すと、Ⅰ：表土層、Ⅱ：黒褐色混礫粘土層、Ⅲ：黒色土（黒ボク）層、Ⅳ：灰～黒褐色シルト質粘土層、Ⅴ：黄褐色系混礫粘土・中砂層、となる。

第Ⅰ層となる表土層は、中垣戸地区では畑地および住宅地の造成土である。中垣戸地区から中道Ａ地区西部にかけては近年まで住宅が建っていたため、第Ⅰ層を埋土とする撹乱坑が各所で確認された。中道Ａ地区の東部から中道Ｂ地区にかけては水田土壌がこの層にあたる。

第Ⅱ層は、第Ⅲ層由来の黒ボクと丘陵流出土が混合した層と考えられる。中道Ａ・Ｂ地区では、中世遺構の一部がこの層上面で確認できる。中垣戸地区の西側で厚く堆積している。第Ⅱ層上面から切り込まれる中世遺構埋土は第Ⅱ層そのものと極めて区別しにくいものであった。そのため、全地区を通じ中世遺構の確認は第Ⅲ～Ⅴ層の上面で実施した。

第Ⅲ層はいわゆる黒ボク層である。中世遺構の一部がこの層を基盤にしている。二次的に堆積した黒ボクと考えられるが、明確ではない。第Ⅲ層上面は、中道Ｂ地区東部の標高約 63.6 ｍが最も高く、西に向かって下降し、中道Ａ地区で 63.4 ～ 63.2 ｍ、中垣戸地区では 63.1 ｍである。層の厚さは概ね 20㎝内外だが、中道Ａ地区の中央部では 50㎝近い堆積が見られる。中垣戸地区の西端部も下部の黒色土との判別が難しいが、全体に厚みを増していると見られる。これら堆積土の厚みに見られる差異は、第Ⅲ層形成段階の堆積状況に差があったと考えられるが、今ひとつ明確にはできなかった。第Ⅲ層中には、少量の縄文時代早期の土器が含まれていた。

第Ⅳ層は縄文時代早期の包含層および遺構埋土である。第Ⅲ層との区別が難しい部分もあった。なお、第Ⅳ層は第１次調査区全体で確認できるが、遺物包含層と認識できるのは中垣戸地区にほぼ限定できる。

第Ⅴ層は当地の基盤となる段丘形成層である。縄文時代早期の遺構検出面でもある。第Ⅴ層上面の標高は、最も高い中道Ａ・Ｂ地区で 62.9 ｍほどで確認でき、中垣戸地区では 62.6 ｍ前後まで下降する。表層は黄褐色系粘土だが、深部には拳大前後の円礫や中砂～細砂層が確認できる地点もある。

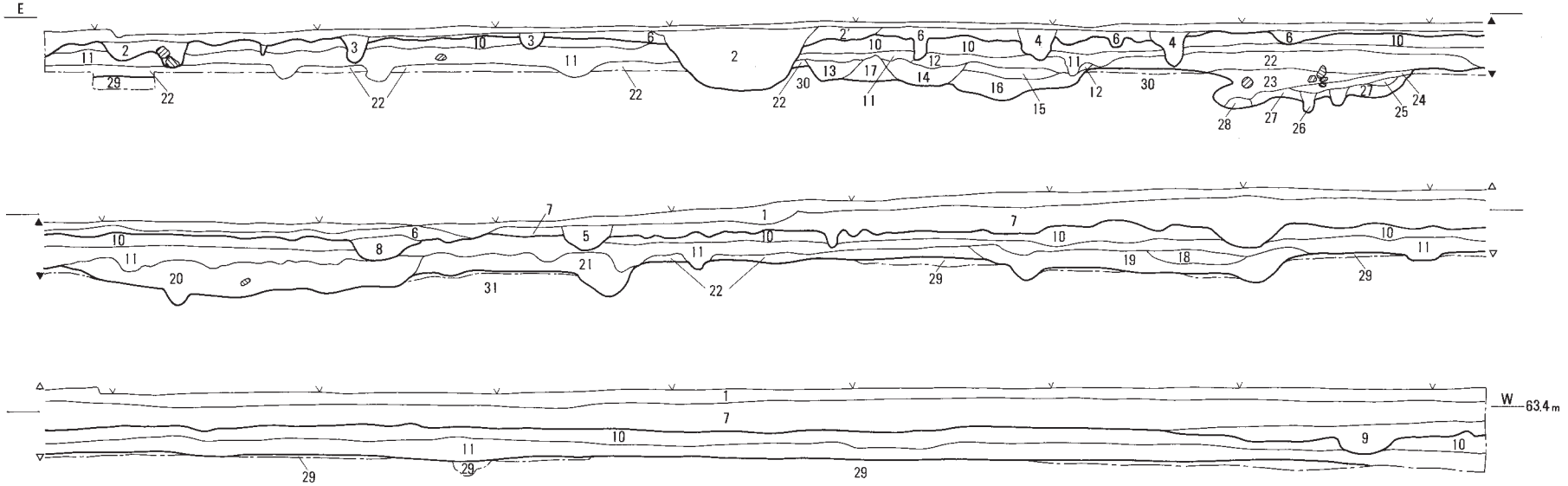
（3）遺構検出面について

中世遺構は第Ⅲ層上面で、縄文時代早期遺構は第Ⅴ層上面での検出が本来であるが、前述のように遺構識別の困難さから、多くの地点で第Ⅴ層上面での検出となった。その結果、中垣戸地区では中世遺構の多くを認識できなかった可能性がある。

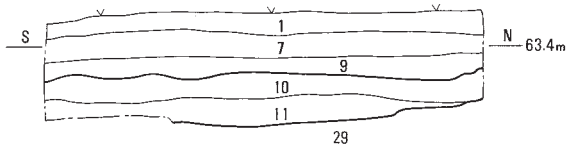
中道Ａ地区西部は調査前まで宅地であり、かなり攪乱を受けていた。ここでは第Ⅲ層上面で中世遺構面の検出を試みても、あまり成果が無いと判断したため、第Ⅴ層上面を検出面とした。

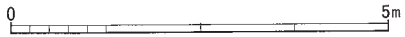
縄文時代の遺構は、ほとんどが中垣戸地区および隣接する立会Ｃ地区で検出された（第７図）。中道Ａ地区東半部および中道Ｂ地区は、第Ⅱ層およびその掘削土層中に中世遺物が多く認められた。ここでの遺構検出面は第Ⅲ層上面とした。　　（星野・伊藤）

中垣戸地区　南壁



中垣戸地区　西壁



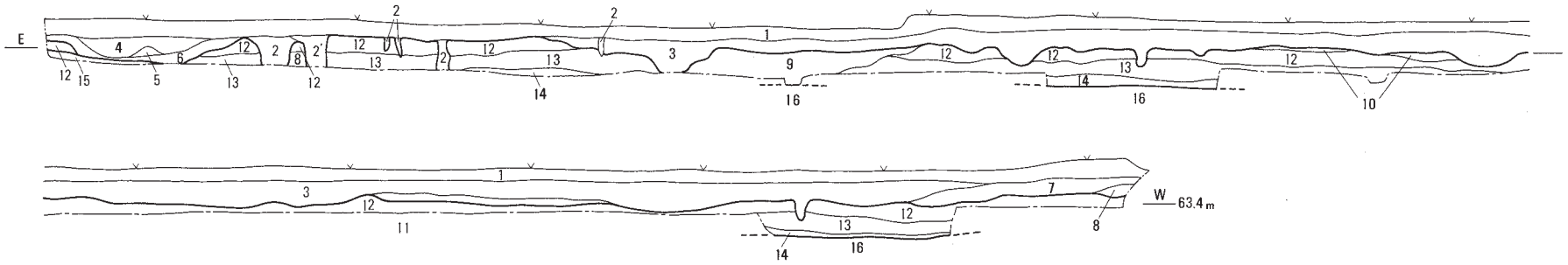


中垣戸地区　土層

1　表土
2　黒褐色土、小礫・礫多く含む（撹乱坑）　10ＹＲ2/2
3　黒褐色土、礫・小石含み軟質（中世以降遺構埋土）　10ＹＲ3/2
4　黒褐色土、褐色ブロック含・礫・小石含む（中世以降遺構埋土）　10ＹＲ2/2
5　オリーブ黒色土　5Ｙ2/2
6　黒褐色土　10ＹＲ2/2
7　黒褐色土、礫多く含む　10ＹＲ3/1
8　黒色土、小礫多く締まる　10ＹＲ2/1
9　黒褐色土、粘性無し　10ＹＲ2/2
10　黒色土（黒ボク）　7.5ＹＲ1.7/1（中道B第12層相当）
11　黒色土、やや灰色　10ＹＲ2/1（中道B第13層相当）
12　黒褐色土、小礫含む　10ＹＲ2/2
13　黒褐色土、粘性あり、礫含む　10ＹＲ2/2
14　黒褐色土、小礫・炭化物多く含み堅く締まる　10ＹＲ2/2
15　黒褐色土、小礫含み、堅く締まる　10ＹＲ2/2
16　黒褐色土、小礫・炭化物含み堅く締まる　10ＹＲ2/2
17　黒褐色土、小礫含む　10ＹＲ2/3
18　にぶい黄褐色土、粘性あり　10YR4/3
19　黒褐色土、堅く締まる　10YR2/2
20　黒褐色土、小礫含み堅く締まる　10ＹＲ2/3
21　黒褐色土、小礫多く含み堅く締まる　10ＹＲ3/2
22　黒褐色土、第10層よりも褐色味　10ＹＲ3/2
23　黒褐色土、小礫・礫・炭化物多く含む　10ＹＲ2/3
24　黒褐色土、礫・炭化物含む　10ＹＲ2/2
25　にぶい黄褐色ブロック含む黒褐色土、小礫含む　10ＹＲ2/3
26　黒褐色土、炭化物含む　10ＹＲ2/3
27　黒褐色砂質シルト　10ＹＲ2/2
28　にぶい黄褐色土（基盤層崩落土）　10YR5/4
29　にぶい黄褐色粘土～シルト（段丘形成層・基盤層）　10ＹＲ4/3
30　褐色粘土～シルト（段丘形成層・基盤層）　10YR4/4

第6図　調査区土層図　中道A・B地区（1：100）

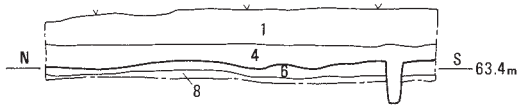
中道B地区　南壁



中道B地区　土層

1　表土（褐灰色シルト）　10YR4/1
2　明黄褐色ブロック含む黒褐色土（中世遺構埋土）　10YR3/1（12層+16層）
3　礫多く含む黒褐色土（中世遺構埋土）　10YR3/1
4　黒褐色土、礫・小石含み堅く締まる　10YR3/2
5　黒色土　7.5YR1.7/1
6　明黄褐・赤褐色ブロック含む黒褐色土　10YR3/2
7　黒褐色土、砂礫含み、堅く締まる　10YR3/1
8　にぶい黄褐色土、砂礫多い　10YR4/3
9　黒褐色土、礫少し含む　10YR2/3
10　黒褐色土　10YR2/2
11　黒色土、粘性あり、礫含む　7.5YR2/1
12　黒色土（黒ボク）　7.5YR1.7/1
13　黒色土、やや灰色　10YR2/1
14　暗褐色土　10YR3/3
15　にぶい黄褐色土、礫多く堅く締まる（段丘形成層・基盤層）　10YR5/4
16　明黄褐色粘土（段丘形成層・基盤層）　10YR6/6

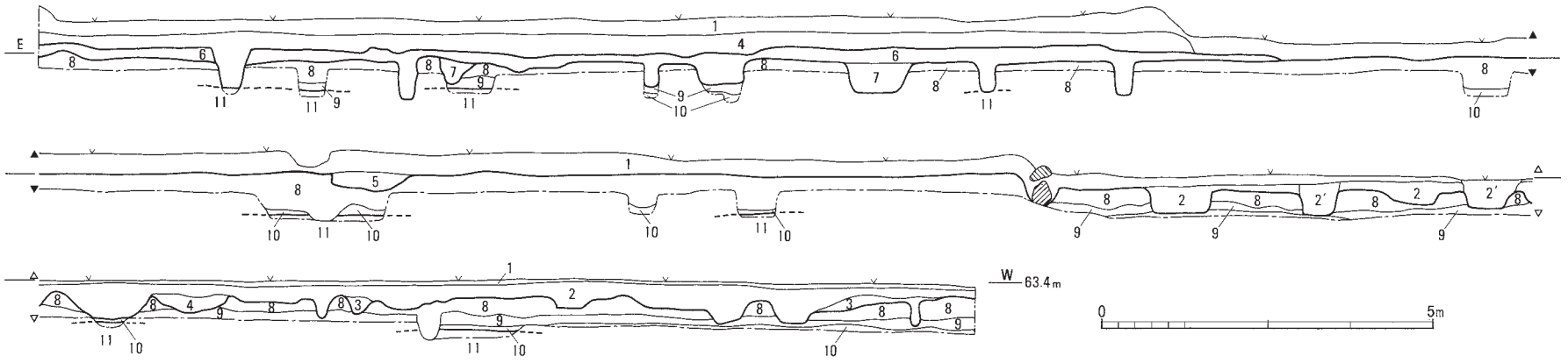
中道A地区　東壁



中道A地区　土層

1　表土（黒褐色シルト）　10YR3/1
2　黄褐色ブロック含む黒褐色土（撹乱遺構含む）　10YR2/1（8層+11層）
3　黒褐色土　7.5YR3/1
4　黒褐色土、礫非常に多い・中世遺物多い　10YR3/1
5　黒褐色土、小礫含み粘性無い　10YR2/2
6　黒褐色土、小礫含む　10YR2/2
7　褐色ブロック・炭含む黒褐色土　10YR2/2
8　黒色土（黒ボク）　7.5YR1.7/1（中道B第12層相当）
9　黒色土、やや灰色　10YR2/1（中道B第13層相当）
10　黒褐色土、褐色味・堅く締まる　10YR3/2
11　黒色土、粘性あり、礫含む　7.5YR2/1
12　にぶい黄褐色粘土（段丘形成層・基盤層）　10YR5/4（中道B第15層相当）

中道A地区　南壁



第7図　中垣戸地区遺構全体図（1：200）　※単独数字はピット番号（グリッド毎）

2．遺　構

（1）　縄文時代早期の遺構

①概要

縄文時代の遺構は、ほとんどが中垣戸地区および隣接する立会Ｃ地区で検出された（第７図）。中道Ａ地区の西側で土坑１基と若干のピットが確認されたが、中道Ｂ地区では皆無である。この状況から、縄文時代の遺構は中垣戸地区の中央から東側を中心に広がるとみられる。これらの遺構は、出土土器から縄文時代早期前葉（大川式）に位置付けられる。

縄文時代の遺構が確認された地点では、遺物包含層から多くの礫や石材片が散発的に出土した。この中には、礫器製作時に生じたとみられる堆積岩の剥片や分割礫状の石材が数多く含まれていた。また、使用痕や加工痕のない自然石様の礫も多かったが、いずれも、中垣戸地区以外ではほとんど認められなかった。石器として認定できない自然石も、縄文人の何らかの営為を示すものであっただろう。

当該期の遺構は竪穴住居６棟、煙道付炉穴 11 基、その他の炉穴３基、土坑 20 基である。この他、遺構検出時に明確な遺構と判断できなかったものは、性格不明遺構（ＳＺ）として掘削したが、これらの掘削中に個別の遺構として認定していったものも多い。

以下、遺構種別ごとに報告する。各遺構については、章末の遺構一覧表もあわせて参照されたい。

②竪穴住居（第８～ 10 図）

６棟確認した。いずれも浅い皿状を呈する。竪穴住居に伴う貯蔵穴などの屋内施設は明確でないが、垂木穴がみられるものや、機能面の硬化が認められるものがある。

ＳＨ 22（巻頭図版２）　中垣戸地区Ｋ７～８グリッドで検出した。南半は調査区外に続く。径 4.8 ｍの不整円形を呈し、深さは 18㎝を測る。竪穴住居と認識する前、上面（ＳＺ 24）で多くの遺物が出土したが、本来はＳＨ 22 に伴うものであったとみられる。

ＳＨ 39（写真図版５）　中垣戸地区ＩＪ 11 ～ 12 グリッドで検出。西側の一部が攪乱を受けている。南半は調査区外に続く。径 5.0 ｍの円形を呈する。深さは 45㎝を測る。壁面の立ち上がりは比較的急で、本調査の竪穴住居では最も深い。北西側と北東側にＳＦ 36・ＳＦ 44・ＳＦ 63 がそれぞれ重複している。埋土から、土器や礫器などの遺物が多数出土した。

ＳＨ 42（巻頭図版２・写真図版４）　中垣戸地区ＩＪ９～ 10 グリッドで検出。3.5 × 3.8 ｍの楕円形を呈し、深さは 15㎝を測る。南側にＳＦ 33 が重複している。壁面の立ち上がりは比較的ゆるやかで、壁際には垂木穴とみられるピットが環状にめぐる。遺物は他の竪穴住居に比べて少ない。

ＳＨ 48（写真図版６）　中垣戸地区Ｉ 14 グリッドで検出。南半は調査区外に続く。径 4.2 ｍの円形を呈し、深さは 20㎝を測る。壁面の立ち上がりは比較的急である。埋土から土器や礫器などの遺物が多数出土した。

北側にＳＦ 57、ＳＦ 58 が重複し、ＳＦ 57 はＳＨ 48 の埋没後に掘削されているが、ＳＦ 58 はＳＨ 48 と埋土の区別ができず、同時に埋没した可能性が高い。

ＳＨ 50（写真図版６）　中垣戸地区ＧＨ 14 ～ 15 グリッドで検出。北側は調査区外に続く。径 4.7 ｍの円形を呈し、深さは 30㎝を測る。壁面の立ち上がりはゆるく、浅い皿状を呈する。埋土から土器や石器など、比較的多くの遺物が出土した。なお、北西側で重複する炉穴ＳＦ 97 を検出している。

ＳＨ 64　中垣戸地区Ｉ 12 ～ 13 グリッドで検出。南側をＳＦ 44 に切られる。当初は住居として認識していなかったが、硬化面が認められたため竪穴住居と判断した。

径 4.1 ｍの不整円形を呈し、深さは 13㎝を測る。壁面の立ち上がりは非常にゆるい。硬化面は中央から南東へ向かって延びている。遺物は少量の出土であった。

③煙道付炉穴（第 11 ～ 13 図）

煙道付炉穴[1]は合計 11 基を数えるが、重複の可能性がある炉穴も含む。規模は概ね長さ約 2.5 ～３ｍ、開口部の幅は約１ｍを測る。軸方向に統一性はない。煙道部が良好に残存するものが多かった。

煙道付炉穴は、先行する遺構の窪みを利用して掘

削されることが指摘されているが(2)、竪穴住居と重複する炉穴は５基、単独の炉穴は６基ある。前者の中には竪穴住居の縁辺から外側に向かって掘削された炉穴が散見されるが、住居が完全に埋没した後に掘削されたものも含まれている。必ずしも廃絶した住居の窪みを利用して炉穴を掘削していたとは言えず、掘削パターンは多様であるとみたい。

焚口と煙道部の焚口側は強い被熱によって赤変硬化しており、最大で厚さ10cmに及ぶものもあった。この付近はとくに炭や焼土が多く認められたが、炭化材は木材の原型をとどめるような大きなものは出土していない。なお、埋土の篩掛けは行っていないので、骨片等や種子片などの微細遺物については不明である。

遺構の年代を知るため、煙道部や焚口で得られた炭化材は、採取位置を写真・図面で記録し、年代測定および材の樹種同定に供した。この成果については機会を改めて報告するが、Ⅴ章に一部を記したのであわせて参照されたい。

ＳＦ 33（写真図版７）　中垣戸地区Ｊ９グリッドで検出。ＳＨ 42 と重複するが、ＳＨ 42 の埋没後に掘削されている。現存長 2.9 ｍ、最大幅 0.9 ｍ、深さ 70cmを測る。長軸方向はＳ 28° Ｗを示す。

底面は煙道部に向かって緩やかに傾斜し、焚口付近で急に深くなる。煙道部は約 40cmと比較的短く、煙出部が小さいのが特徴である。焚口と煙道部の天井は非常に強く被熱し、赤変していた。

煙道部から焚口の埋土には、大小多数の礫が含まれていた。特に焚口には石皿（440 ～ 443）が複数認められたが、いずれも遺構廃絶時に集中的に廃棄されたものであろう。また、礫の多くは被熱が確認できず、炉穴の機能と直接関わるものではないといえる。遺物は土器や石器が多量に出土した。

ＳＦ 36（巻頭図版４、写真図版７・８）　中垣戸地区ＩＪ 10 ～ 11 グリッドで検出。ＳＨ 39 の縁辺に位置する。現存長 2.4 ｍ、最大幅 1.2 ｍ、深さ 60cmを測る。長軸方向はＮ６° Ｗを示す。

煙道部は長さ約 20cm、高さ 12cmと小さいが、断ち割りの結果、天井が崩落したものと判断された（巻頭図版６）。焚口と煙道部天井が強く被熱しており、焚口の被熱層は厚さ 10cmにおよぶ。遺物は土器や礫器を中心とした石器が多量に出土した。

ＳＦ 37（巻頭図版５、写真図版７・８）　中垣戸地区Ｊ 10 グリッドで検出。単独で造られた煙道付炉穴である。南側は一部攪乱を受けている。現存長 2.1 ｍ、最大幅 0.9 ｍ、深さ 60cmを測る。長軸方向はＮ 28° Ｗを示す。煙道部は長さ約 55cmで、煙出部も小さい。焚口と煙道部の天井が強く被熱する。出土遺物は比較的少ない。

ＳＦ 44（写真図版９）　中垣戸地区Ｊ 11 グリッドで検出。ＳＨ 64 とＳＨ 39 と重複しており、ともにＳＦ 44 が新しい。長さは 4.3 ｍであるが、２基の炉穴が重複している可能性が高い。最大幅は 1.7 ｍ、深さ 45cmを測る。長軸方向はＳ 62° Ｗを示す。

煙道部は崩落している。遺構の南西が被熱しており、南西側が煙出部であると推測される。おそらく、南側に進展するように再掘削されたものであろう。

遺物は土器のほか、磨石や礫器などの石器が比較的多く出土した。

ＳＦ 46（写真図版９）　中垣戸地区Ｈ 13 グリッドおよび立会Ｃ地区で検出。単独で検出された炉穴である。現存長約 2.9 ｍ、最大幅は 0.8 ｍ、深さ 55cmを測る。長軸方向はＮ 54° Ｅを示す。

煙道部の長さは約 60cmで、焚口は被熱するが、煙道部の被熱は明確でなかった。煙道部には拳大の礫が大量に埋められていたが､被熱した礫はない。よって、炉穴の廃棄時に意図的に埋められたものと思われる。なお、焚口や開口部には同様の礫は確認できなかった。出土遺物は少ない。

ＳＦ 53（写真図版 10）　中垣戸地区ＨＩ 15 グリッドで検出。現存長 4.1 ｍ、最大幅 1.3 ｍ、深さ 50cmを測る。ＳＦ 44 に次ぐ大規模なもので、２基の炉穴が前後に重複している可能性が高い。長軸方向はＮ 3° Ｅを示す。

煙道部は崩落しており、北側に焼土や炭化物混じりの層が確認できた。推測される煙道部の位置から、北側に再掘削された可能性が高い。遺物は土器や石器などが比較的多く出土した。

ＳＦ 57（巻頭図版５、写真図版 10）　中垣戸地区Ｉ 14 グリッドで検出。ＳＨ 48 の壁際に位置する。現存長 3.3 ｍ、最大幅 0.8 ｍ、深さ 50cmを測る。長軸方向はＮ 14° Ｅを示す。

他の炉穴と比べて煙道部が約 90cmと長いのが特徴である。土層断面から判断すると、同じＳＨ 48 に重

複するＳＦ 58 よりも新しい炉穴と思われる。

被熱部分は焚口と煙道部天井が被熱するが、比較的範囲は狭い。遺物の出土は少量であった。

ＳＦ 58（巻頭図版６）　中垣戸地区Ｉ 14 グリッドで検出。ＳＦ 57 に隣接する。現存長 1.9 ｍ、最大幅は 0.9 ｍ、深さ 60㎝を測る。長軸方向はＮ８° Ｅを示す。

ＳＦ 57 と同様に、ＳＨ 48 の壁際に位置する煙道付炉穴である。煙道部の長さは約 45㎝でＳＦ 57 と比べて短い。焚口と煙道部の天井が被熱する。

遺物の出土はごく少量であるが、本遺構はＳＦ 57 に比べて認識が遅れたため、出土遺物の一部はＳＨ 48 に含まれていると思われる。

ＳＦ 59（写真図版 11）　中垣戸地区Ｊ８グリッドで検出。ＳＦ 60 と重複しているが、ＳＦ 60 の方が新しい。現存長 3.0 ｍ、最大幅 0.7 ｍ、深さ 40㎝を測る。長軸方向はＮ９° Ｗを示す。

煙道部は残存していないが、焚口または煙道部に相当する両側面が強く被熱する。遺物は少量の出土であった。

ＳＦ 60（巻頭図版８、写真図版 11・12）　中垣戸地区Ｊ７～８グリッドで検出。現存長 2.2 ｍ、最大幅は 1.1 ｍ、深さ 65㎝を測る。長軸方向はＮ 64° Ｗを示す。

煙道部は約 35㎝と短い方であるが、煙道断面は 50 × 35㎝の楕円形で比較的大きい。被熱は焚口と煙道部の両側面に広く認められた。焚口は一段低く掘り窪められ、底面には拳大以下の大きさの礫が敷き詰められていた。また、煙道部を閉塞するように径 40㎝ほどの大きな河原石が詰められていた（巻頭図版４）。

遺物は土器や石器が多く出土した。開口部の上層で、上半がほぼ完形の深鉢（199）が倒立状態で出土したことは特筆される。残念ながら、この下半部分は周辺の遺構や遺物包含層中にも確認できなかった。

ＳＦ 61（巻頭図版３・７、写真図版 13）　中垣戸地区Ｈ 16 グリッドで検出。単独で検出された煙道付炉穴である。現存長 2.9 ｍ、最大幅は 0.8 ｍ、深さ 60㎝を測る。長軸方向はＳ 13° Ｗを示す。

煙道部の断ち割りによる断面観察から、壁面の被熱部分は水平方向が最も強く、被熱は厚さ 12㎝に及ぶことがわかった。

煙道部は約 30㎝と短いが、高さは 40㎝程あり、他の炉穴に比べても広い。また煙出部も比較的大きいものである。出土遺物は少量であったが、開口部より石皿（444）が出土した。

④その他の炉穴

煙道が確認できなかった炉穴を一括する。この中には煙道付炉穴の一部と考えられるものもある。集石炉は認められなかった。

ＳＦ 62　中垣戸地区Ｉ 13 グリッドで検出。ＳＫ 45 と重複するが、埋没時期は同時であったとみられる。現存長は 1.5 ｍ、最大幅は 1.0 ｍ、検出面からの深さは 70㎝を測る。長軸方向はＮ 27° Ｅを示す。

北側の掘形はオーバーハングしており、煙道付炉穴を掘削する途中で崩壊した可能性がある。遺物量は少ない。

ＳＦ 63（写真図版７）　中垣戸地区Ｊ 10 グリッド、ＳＦ 36 の南側に接して検出された。0.9 × 0.7 ｍの楕円形を呈し、深さは 36㎝で、底面の中心が被熱していた。土坑状の屋外炉であろう。

埋土中には少量の礫が出土したが、被熱を受けていないことから、集石炉である可能性は低い。

ＳＦ 97　立会Ｃ地区のＳＨ 50 内で検出した楕円形の遺構で、底面に被熱が認められた。おそらく煙道付炉穴の開口部に相当しようが、調査区の制約から全体像は分からない。遺物は少量の出土である。

⑤土坑

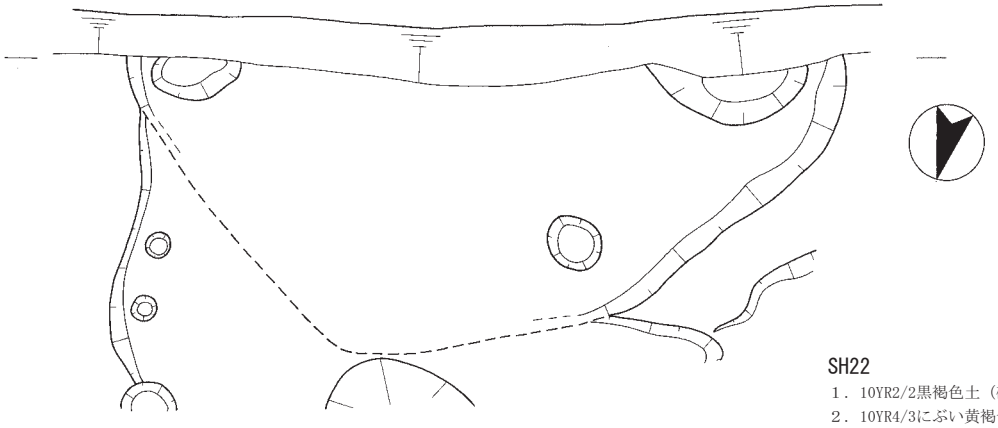
土坑には、不定形かつ浅いものが多く、深さのあるものは稀である。廃棄土坑や貯蔵穴のような遺構はごく少なかったと推測されるが、その役割は廃絶した炉穴などが担っていたのではないだろうか。

ＳＫ 14　中垣戸地区Ｋ４グリッドで検出された不整形の土坑で、深さは８㎝と非常に浅い。土坑としたが、性格不明遺構に含めておくべきかもしれない。遺物は土器片と石器が出土した。

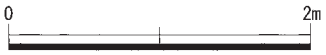
ＳＫ 29　中垣戸地区ＩＪ８～９グリッドで検出された不整形の土坑で、深さは８㎝と非常に浅い。3.0 × 2.6 ｍの不整形な形状で、遺物は少量の土器片と石器が出土した。

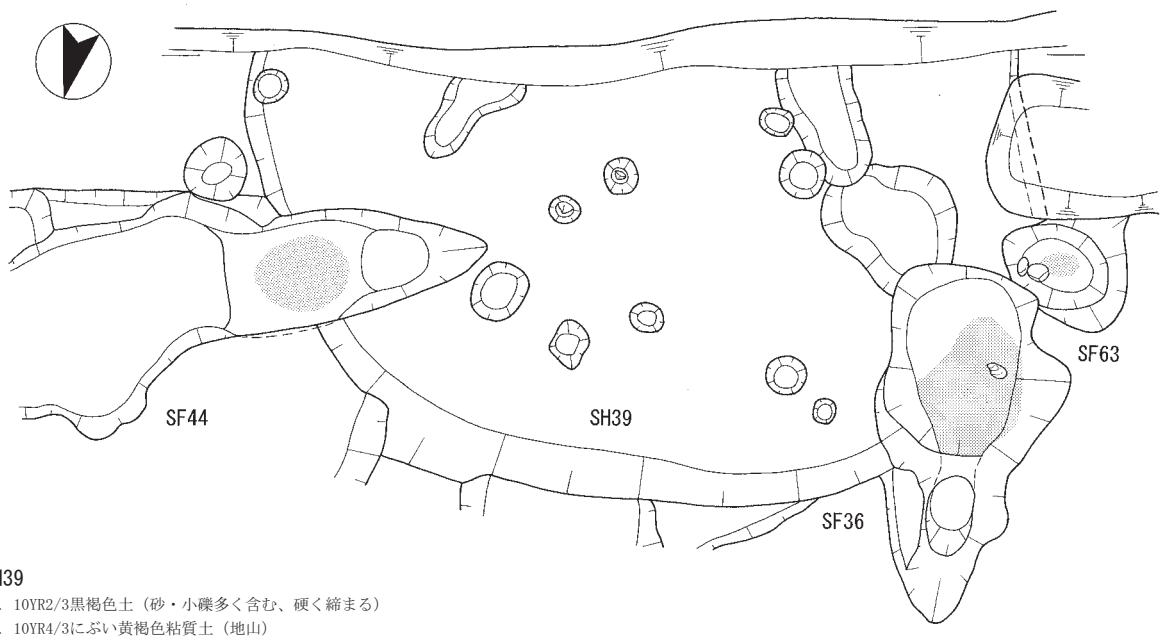
ＳＫ 30　中垣戸地区ＩＪ８グリッドで検出された瓢箪形の土坑で、深さは 14㎝を測る。少量の土器片、石器が出土した。

ＳＫ 32　中垣戸地区ＩＪ 10 グリッドで検出され



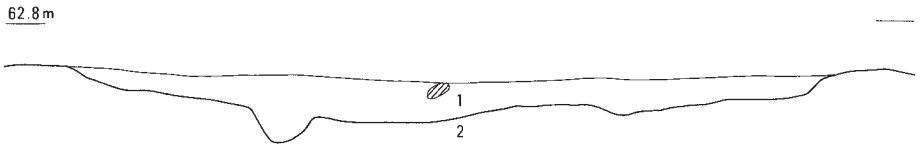
SH22
1．10YR2/2黒褐色土（硬く締まる）
2．10YR4/3にぶい黄褐色粘質土（地山）



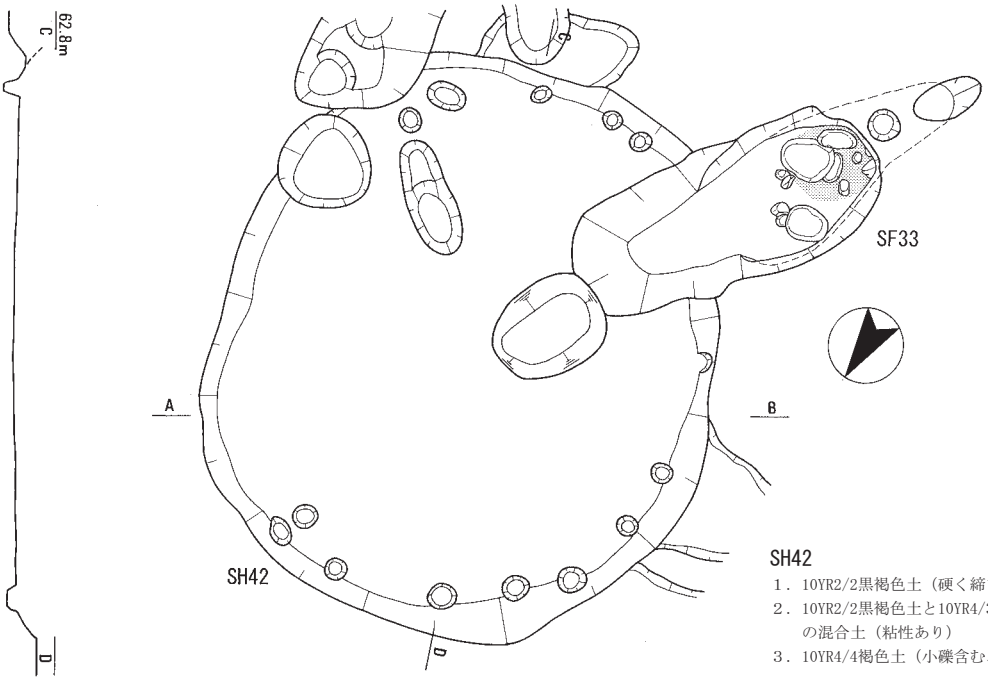


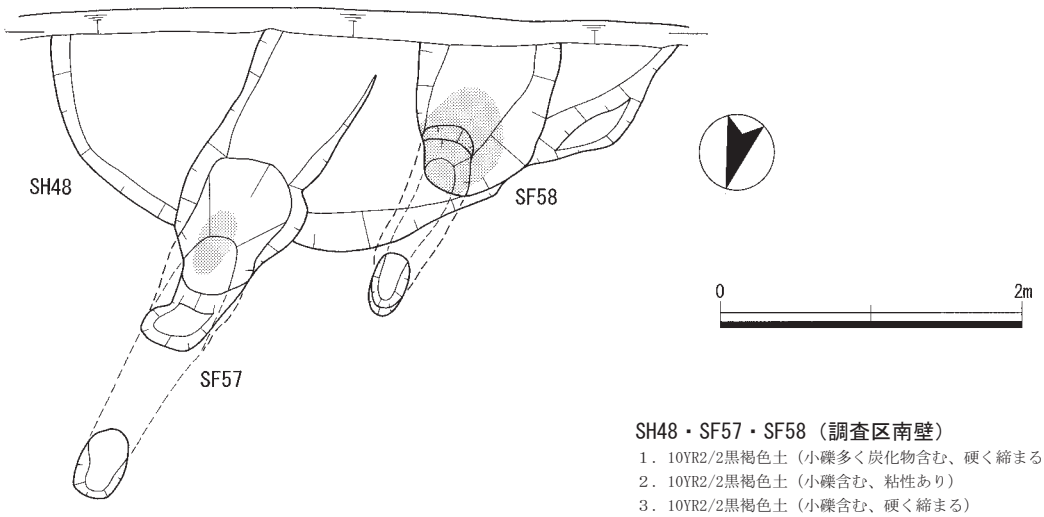
SH39
1．10YR2/3黒褐色土（砂・小礫多く含む、硬く締まる）
2．10YR4/3にぶい黄褐色粘質土（地山）

被熱

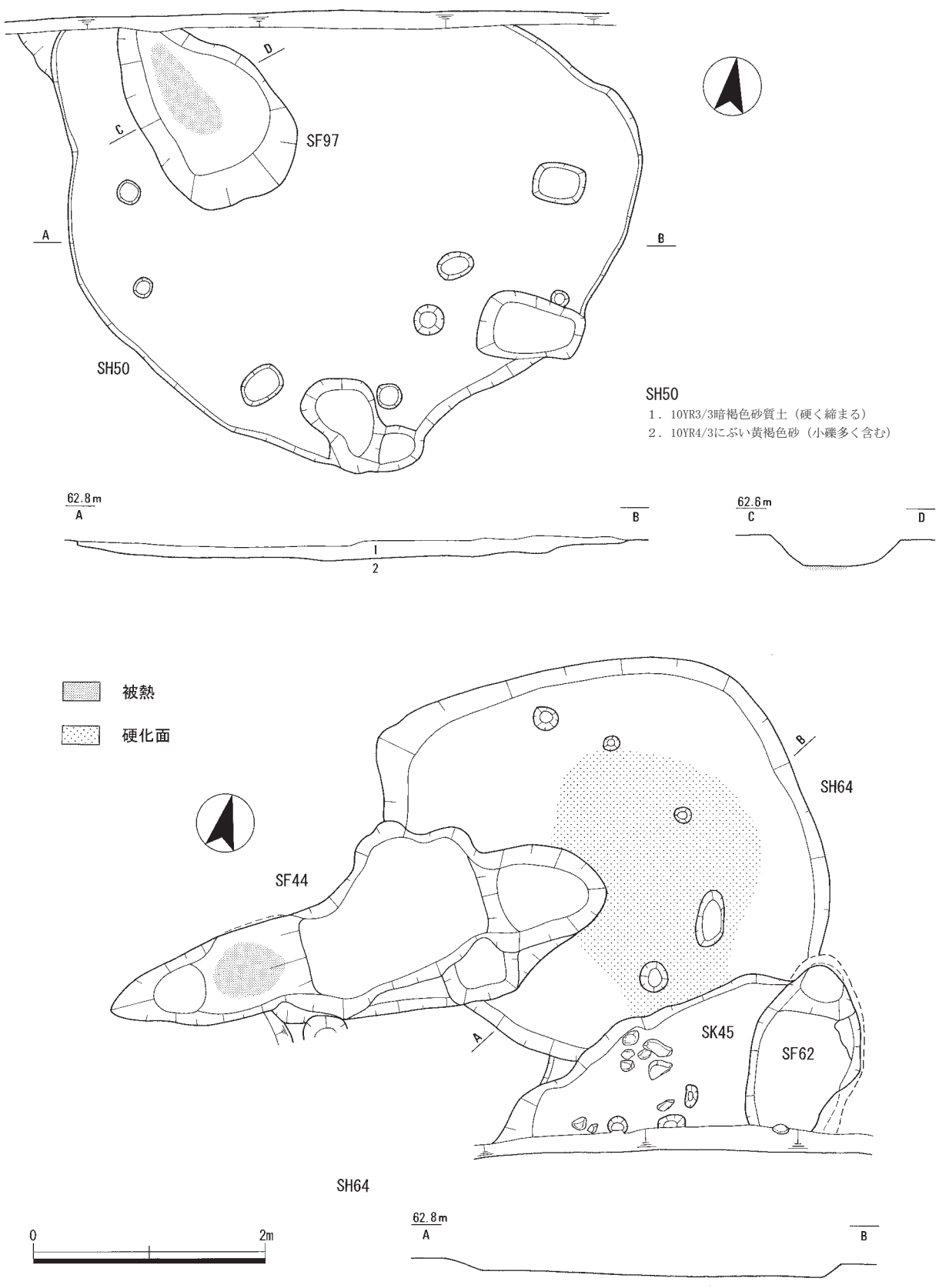


第8図　SH 22・39 平・断面図 (1：50)

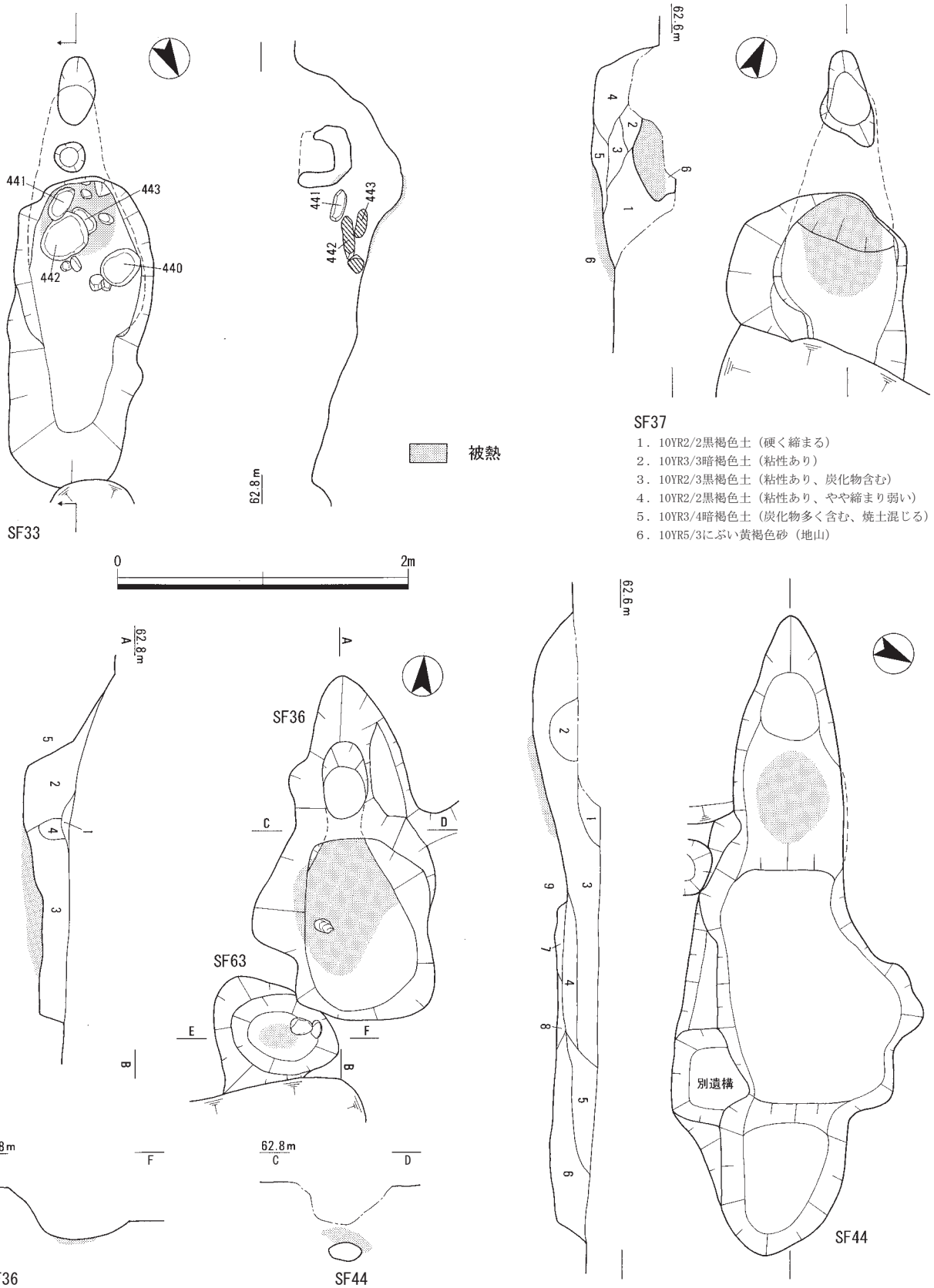




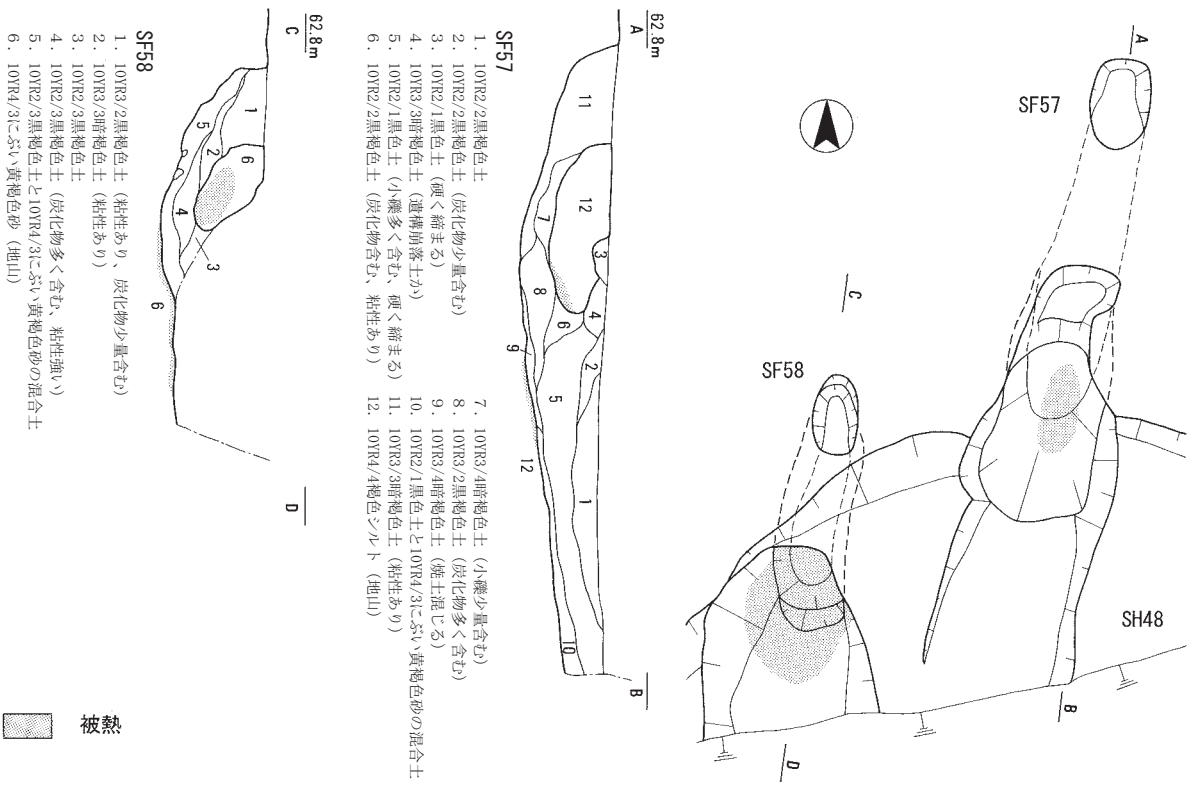
第9図　ＳＨ 42・48 平・断面図（1：50）



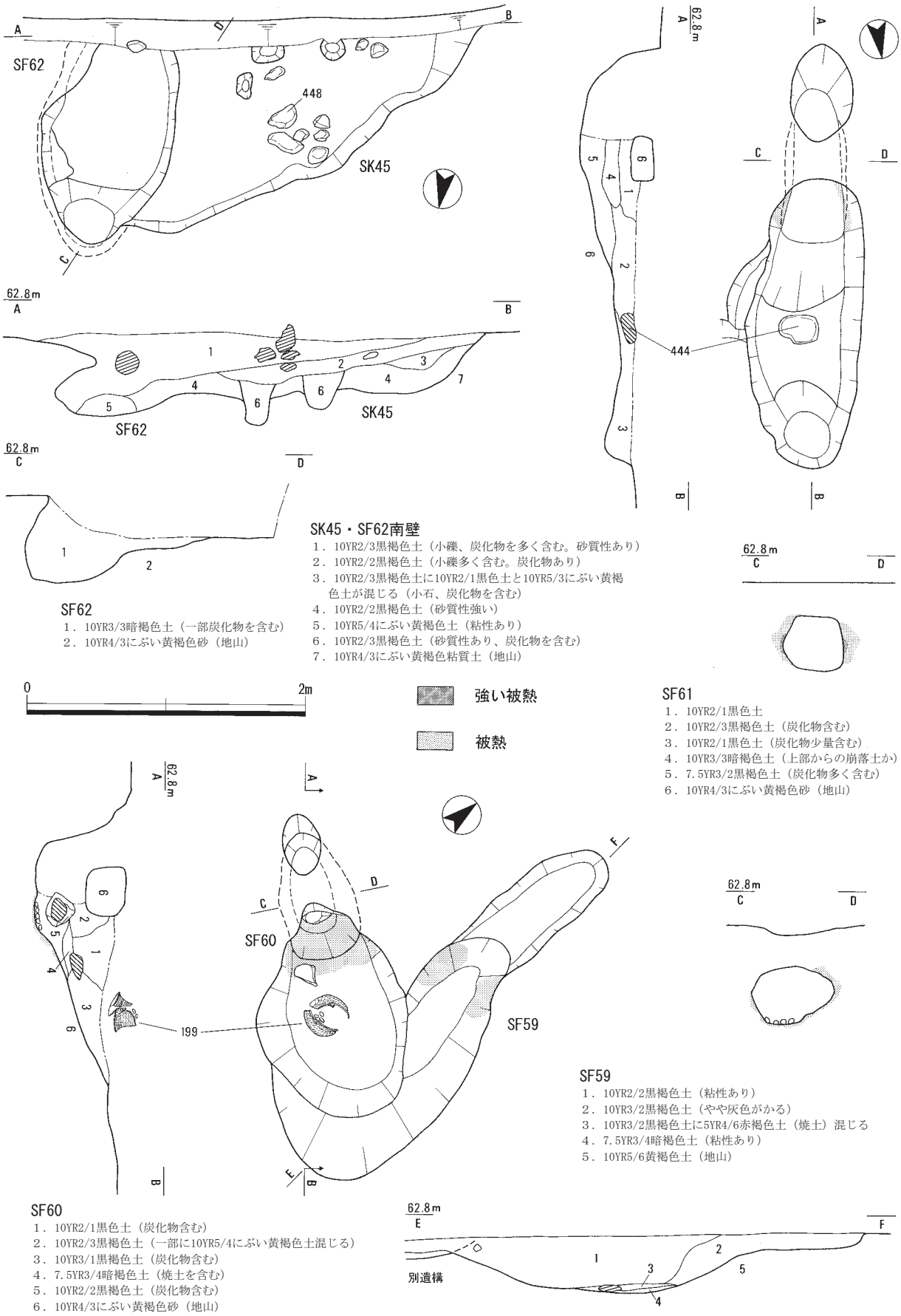
第10図　SH 50・SH 64・SF 97 平・断面図 (1:50)



第11図　ＳＦ33・36・37・44平・断面図（1：40）



第12図　ＳＦ46・53・57・58平・断面図（1：40）



SK45・SF62南壁
1．10YR2/3黒褐色土（小礫、炭化物を多く含む。砂質性あり）
2．10YR2/2黒褐色土（小礫多く含む。炭化物あり）
3．10YR2/3黒褐色土に10YR2/1黒色土と10YR5/3にぶい黄褐色土が混じる（小石、炭化物を含む）
4．10YR2/2黒褐色土（砂質性強い）
5．10YR5/4にぶい黄褐色土（粘性あり）
6．10YR2/3黒褐色土（砂質性あり、炭化物を含む）
7．10YR4/3にぶい黄褐色粘質土（地山）

SF62
1．10YR3/3暗褐色土（一部炭化物を含む）
2．10YR4/3にぶい黄褐色砂（地山）

SF61
1．10YR2/1黒色土
2．10YR2/3黒褐色土（炭化物含む）
3．10YR2/1黒色土（炭化物少量含む）
4．10YR3/3暗褐色土（上部からの崩落土か）
5．7.5YR3/2黒褐色土（炭化物多く含む）
6．10YR4/3にぶい黄褐色砂（地山）

SF59
1．10YR2/2黒褐色土（粘性あり）
2．10YR3/2黒褐色土（やや灰色がかる）
3．10YR3/2黒褐色土に5YR4/6赤褐色土（焼土）混じる
4．7.5YR3/4暗褐色土（粘性あり）
5．10YR5/6黄褐色土（地山）

SF60
1．10YR2/1黒色土（炭化物含む）
2．10YR2/3黒褐色土（一部に10YR5/4にぶい黄褐色土混じる）
3．10YR3/1黒褐色土（炭化物含む）
4．7.5YR3/4暗褐色土（焼土を含む）
5．10YR2/2黒褐色土（炭化物含む）
6．10YR4/3にぶい黄褐色砂（地山）

第13図　SK45・SF59・60・61・62平・断面図（1：40）

た 2.9 × 1.5 mの不整楕円形の土坑で、深さは５㎝と非常に浅い。少量の土器片と石器が出土したのみである。

ＳＫ 45（写真図版 13）　中垣戸地区ＩＪ 12 ～ 13 グリッドで検出された不整楕円形の土坑で、長さ 2.7 mを測る。南側は調査区外へ広がる。遺物量は多く、石皿（448）などの石器や礫が出土した。

ＳＫ 47　中垣戸地区Ｈ 13 ～ 14 グリッドで検出された、深さ 20㎝の不整形の土坑である。押型文土器の底部などが出土した。

ＳＫ 67　中道Ａ地区Ｇ 21 ～ 22 グリッドで検出された土坑である。遺物は土器片１点のみである。

⑥性格不明遺構

生痕や遺構の重複により生じた不定形な落ち込み状のものである。竪穴住居のような円形を呈するものもあるが、底面の状況などから住居には含めていない。

ＳＺ 10　中垣戸地区Ｌ１～２グリッドで検出された不整楕円形の遺構。調査区の西端に位置する。ごく浅い落ち込みのようなものと考えられる。遺物は少量であるが、土器や石器が出土した。

ＳＺ 13・18　中垣戸地区ＫＬ３～５グリッドで検出された。付近の包含層から土器片や石器が出土していたため、竪穴住居と想定し掘削を行ったが、底面は凹凸があり、硬化面なども確認できなかった。ごく浅い落ち込みであろう。

中垣戸地区の西側５グリッドまでは明確な遺構はないと考えられる。

ＳＺ 24　中垣戸地区ＪＫ８グリッドで検出された遺構。この付近は樹木による攪乱が集中しており、遺構検出が非常に困難であった。比較的多くの遺物が出土したこと、またこの遺構の下層にＳＦ 59、ＳＦ 60 があることから、竪穴住居を含む複数の遺構が撹乱などの影響を受けたものと推測される。

ＳＺ 31　中垣戸地区９～ 11 グリッドで検出。この付近も遺構の識別が困難で、一帯を５㎝程掘削していきながら遺構検出を進めた。したがって遺構というよりも遺物包含層に含まれるものである。

（星野・櫻井）

（２）中世以降の遺構

①概要

野添大辻遺跡第１次調査で確認した中世以降の遺構は、平安時代末期から近世に及ぶ。明らかな共伴遺物のある遺構は少ないが、出土遺物量からは 15 世紀代が中心になっていると考えられる。

中垣戸地区では井戸２基といくつかの土坑を確認した。ただし、近現代の攪乱が多かったこと、そして縄文遺構検出面とほぼ同じ黒ボク層下での確認であったため、検出できなかった中世遺構もあったと考えられる。

中道Ａ地区は、西端から 20 m付近までは中垣戸地区と同じような状況である。立会Ａ地区を含む中道Ａ地区東部から中道Ｂ地区にかけては、中世のピット群や土坑・井戸が確認できた。ピットには明らかに掘立柱建物の一部と考えられるものが多数認められるが、明確な規則性やまとまりを見出すことはできなかった。

②中垣戸地区（第７図）

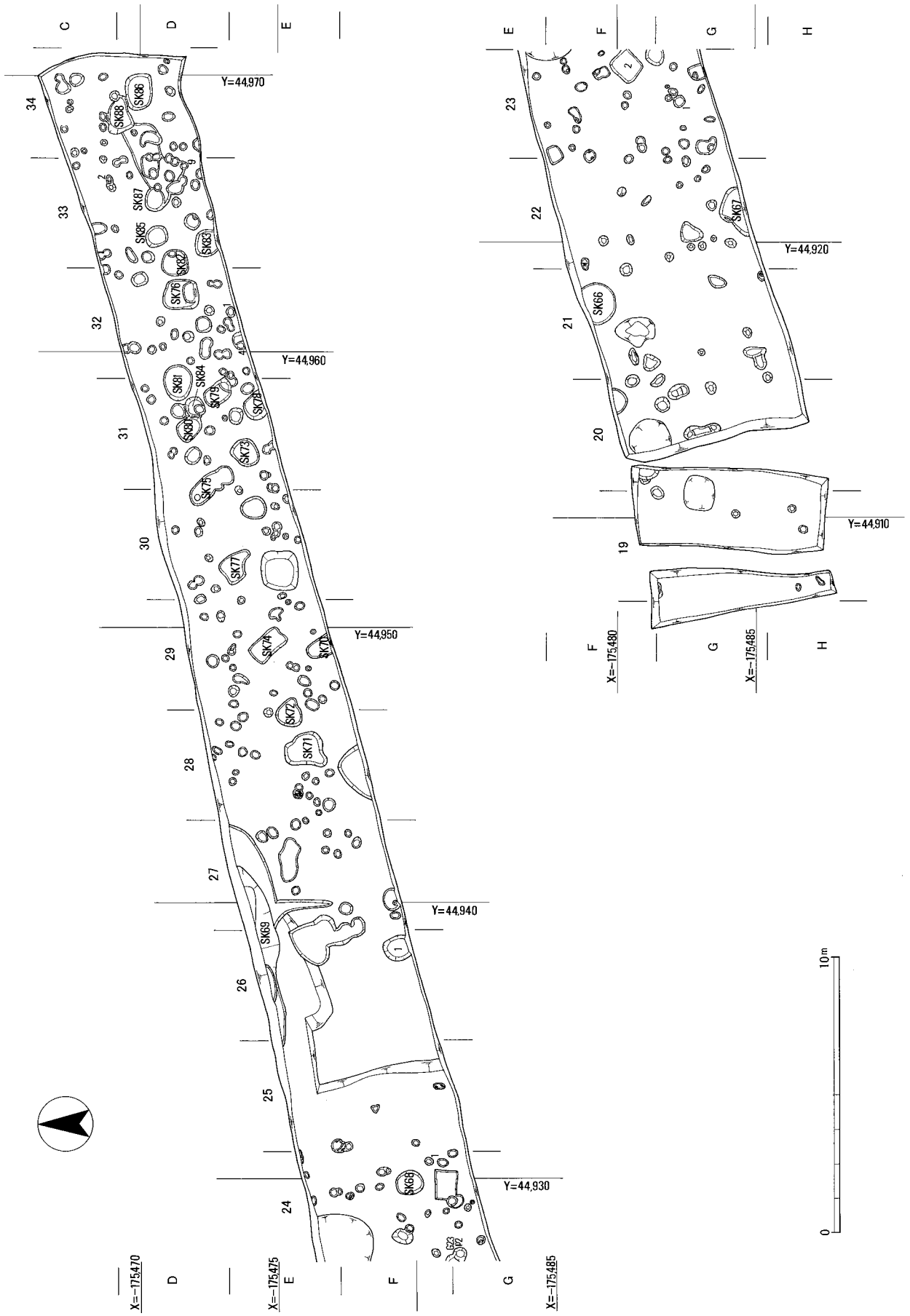
ＳＥ 28（写真図版 15）　調査区中央北部で確認した。直径約 1.5 mの掘形内に、内法径約 0.8 mの円形石組みを伴う石組井戸である。石組の遺存状態が悪く、崩落の危険性が高かったため、１m程しか掘削しなかった。石は統一性のない大小さまざまな川原石が使用されていた。

土師器・陶器などの多くの遺物が出土した。出土遺物には中世前期のものが多いが、最も新しい遺物が 15 世紀前半のものであるため、遺構の時期もその頃と考えられる。

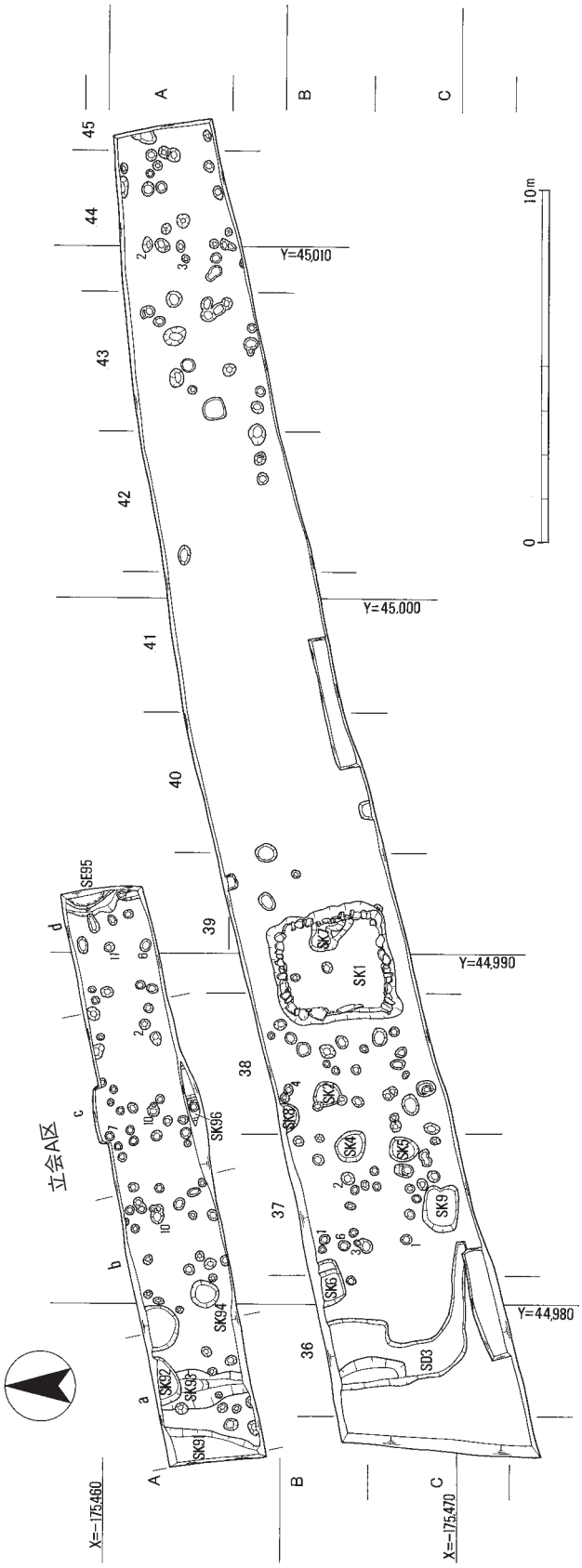
ＳＥ 34　調査区中央北部で確認した。ＳＥ 28 の東方約５mに位置する。掘形は長軸約 1.8 m、短軸約 1.6 mの楕円形を呈する。崩落の危険性が高かったため、１m程しか掘削しなかった。この範囲内での構造物は無かったため、石組井戸ではないと考えられる。

出土遺物は非常に多く、とくに完形に近い状態で出土した鍋が注目できる。出土遺物から、14 世紀代に機能し、15 世紀初頭頃に埋没したと考えられる。

ＳＫ 49　調査区東部の北壁部で検出した。縄文時代の竪穴住居ＳＨ 50 と重複する。最大長 2.2 mで、大部分が調査区外に及ぶ。遺構の深さは 18㎝である。埋土内から土師器鍋などが出土した。出土遺物の時



第 14 図　中道Ａ地区遺構全体図（1：200）　※単独数字はピット番号（グリッド毎）



第 15 図　中道B地区遺構全体図（1：200）
※単独数字はピット番号（グリッド毎）

期は 16 世紀後半頃である。

ＳＫ 52　調査区東部のＩ 15 グリッド南壁寄りで検出した、最大幅約 1.6 ｍの楕円形をした土坑である。遺構の南部は調査区外に及ぶ。

出土遺物には、18 世紀代の肥前産の磁器碗、瀬戸美濃産の陶器碗、擂鉢などがある。

ＳＫ 54　調査区東端に近いＨ 16 グリッドで検出した遺構である。直径約 1 ｍの、ほぼ円形を呈する。埋土内からは、土師器鍋、陶器の他、隣接するＳＦ 61 から混入したと思われる押型文土器片、石器が少量出土した。

ＳＫ 56　Ｈ 17 グリッドで検出した遺構である。ＳＫ 54 に隣接する。長軸約 2.6 ｍ、短軸約 0.9 ｍ、深さ 45㎝の楕円形の土坑である。

埋土内からは、16 世紀代と考えられる土師器・陶器類のほか、混入したと思われる押型文土器も出土している。

ピット群　中垣戸地区で確認したピットは、調査区東端部に集中する。確認基数が少ないのは、前述のように遺構検出面が深かったことによるものと考えられる。

③中道Ａ地区（第 14 図）

ＳＫ 69　Ｅ 26 グリッド付近の、調査区北壁沿いで検出した遺構である。遺構の北部は調査区外に及ぶ。検出範囲内での長さは６ｍを超える。

出土遺物は、16 世紀代のものを中心としている。

ＳＫ 72　Ｅ 28 グリッドで検出し楕円形の土坑である。出土遺物は少量で、土師器類の他には青磁片が２片出土した。埋土内の出土遺物は 15 世紀中葉頃のものである。

なお、ＳＫ 72 から北東方向に２・３ｍほどの間隔を置いてＳＫ 74・77・75・80・81 がほぼ同一線上に並ぶ。柱穴ではないと考えているが、念のため指摘しておきたい。

ＳＫ 73　Ｅ 30 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.1 ｍ、短軸約 0.9 ｍ、深さ 30㎝で、楕円形を呈している。

遺構中央部、底面付近で完形の土師器小皿が出土した。時期は 15 世紀中葉頃と考えられる。

ＳＫ 74　Ｅ 28 ～ 29 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.3 ｍ、短軸約 0.75 ｍ、深さ 32㎝で、平面形は隅丸長方形を呈している。出土した少量の土

師器類からは、15 世紀代の遺構と考えられる。

ＳＫ 75（写真図版 14）　Ｄ 30 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.8 ｍ、短軸約 0.7m、深さ約 32cm の不整形を呈するが、複数の土坑が重なっていたものを認識できずに調査した可能性もある。土坑北側の上部では拳大の石が集められていたが、特に規則性等は見られなかった。

出土遺物は少なく、15 世紀代の土師器類が少量見られたのみである。

ＳＫ 76（写真図版 14）　Ｄ 32 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.2 ｍ、短軸約 1.1 ｍの隅丸長方形を呈する。遺構の深さは、南側の一番深いところで 58㎝である。

出土遺物は土師器の皿・鍋があり、15 世紀代のものである。

ＳＫ 77　ＤＥ 29 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.3 ｍ、短軸約 0.95m、深さ約 28㎝で、不整形である。出土遺物は少量で、15 世紀代の土師器類がある。

ＳＫ 79　Ｄ 31 グリッドで検出された土坑である。長軸約 1.1 ｍ、短軸約 0.7 ｍ、深さ 40㎝で、隅丸長方形を呈する。土師器皿･鍋､陶器類などが出土した。

遺物の時期は 15 世紀代である。

ＳＫ 80　Ｄ 30 ～ 31 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.0 ｍ、短軸約 0.75m、深さ約 29㎝で、楕円形を呈する。出土遺物は少量で、15 世紀代のものが見られる。

ＳＫ 83　Ｄ 32 グリッド南壁で検出した土坑である。長軸約 1.0 ｍ、短軸約 0.75m、深さ約 26㎝で、楕円形を呈する。土師器皿・鍋など多くの遺物が出土した。14 世紀中葉から 15 世紀にかけての遺構と考えられる。

ＳＫ 86　Ｄ 34 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.3 ｍ、短軸約 0.95 ｍ、深さ約 22㎝で、楕円形を呈している。埋土内からは 15 世紀代の土師器皿･鍋・羽釜などが出土した。

ＳＫ 88　ＣＤ 33 グリッドで検出した不整形の土坑で、ＳＫ 86 に隣接する。

出土遺物は多く、土師器類・陶器がある。鎌倉時代のものも含まれているが、15 世紀末頃の土師器鍋もある。

ピット群　中道Ａ地区では、調査区中央部を除く東部と西部にピットが集中している。これらのなかには掘立柱建物を構成すると考えられる良好なものも含まれているが、明確にまとめることはできなかった。それでも、ピットの集中状況から建物集中域がこの２ヶ所にあったものと考えておきたい。

その他　調査区西部では、現代の井戸・土坑が集中的に確認されている。これらは、調査以前にここに建てられていた公民館施設に伴うものである。

④中道Ｂ地区（第 15 図）

ＳＫ１（第 16 図、写真図版 15）　調査区西部で確認した石組み遺構である。南北約 3.3 ｍ、東西約 3.2 ｍの方形土坑内に、内法で南北約 2.7 ｍ、東西約 2.4 ｍの方形石組を伴っている。土坑は、深いところで約 40㎝ある。

石組みは、遺存の良いところで３段程度、高さは約 30㎝である。土坑内には多くの石材が転落しており、本来の石積みはもう少し高かったと考えられる。石積みの下端は土坑底面と一致せず、やや高い位置にある。元々あった土坑を再利用して、その内側に石組を造作した可能性も考えられる。

石組の石材は川原石で、平たい面を用いながら無造作に積み上げられている。石組の隅は明確な角を形成せず、丸く仕上げられている。

遺構の底面にはピットや土坑（ＳＫ７）の重複が見られる。これらはＳＫ１に伴う遺構ではないと考えられる。

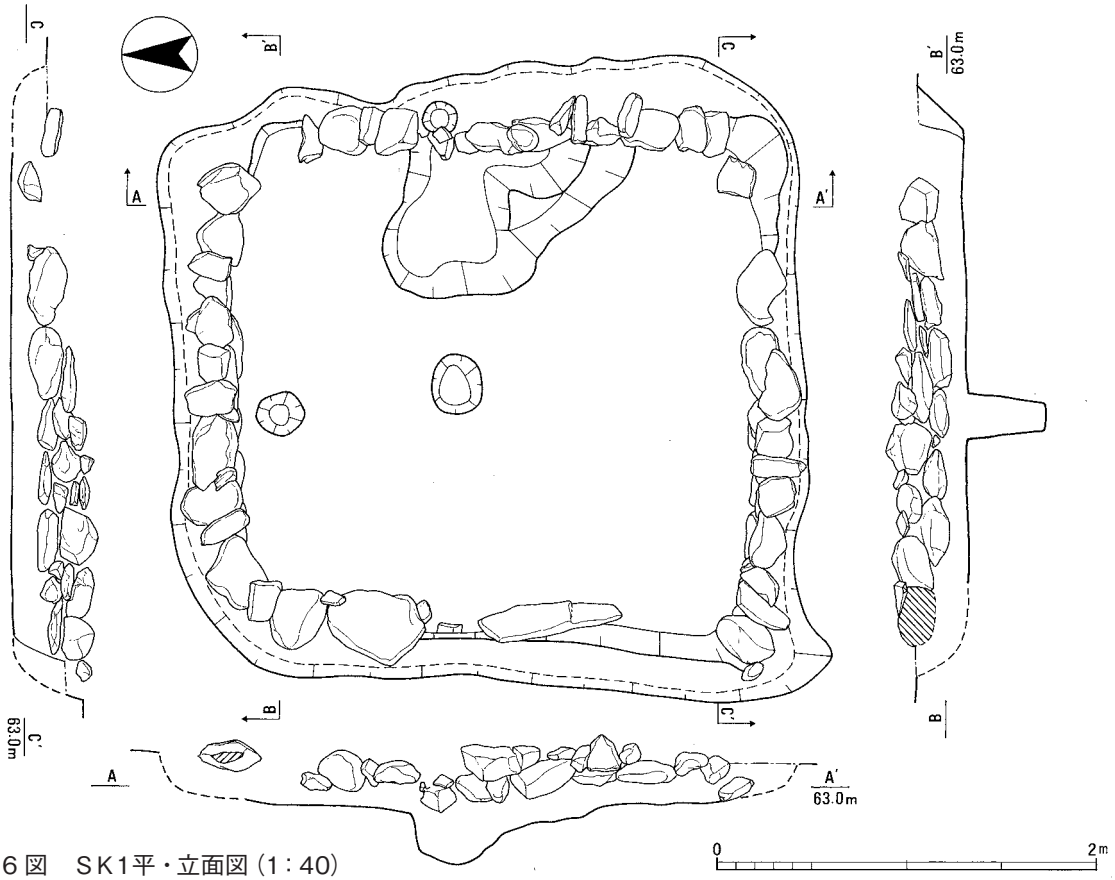
石組内の埋土からは、土師器・陶器類が比較的多く出土した。出土遺物から、15 世紀前半頃に埋没した遺構と考えられる。

ＳＤ３　Ｃ 36 グリッドで確認した溝である。南部では幅約１ｍ、深さ約 20㎝で、北端部では西方がやや深くなり、幅も２ｍほどになる。調査区内で屈曲し、Ｌ字形を呈するので、区画溝と考えられる。この溝は、北側の立会Ａ地区でも確認できた。

土師器・陶器など比較的多くの遺物が出土した。出土遺物は 15 世紀中頃のものが中心である。

ＳＫ４　Ｂ 37 グリッドで検出した土坑である。長軸約 1.0 ｍ、短軸約 0.9 ｍの楕円形を呈する。15 世紀前半頃の土師器類が出土した。

ＳＫ５　Ｃ 37 グリッドで検出した土坑である。長軸約 0.85 ｍ、短軸約 0.65 ｍ、深さ 29㎝の楕円形を呈する。15 世紀代の土師器類のほか、白磁片が出土



第16図　SK1平・立面図（1：40）

した。

ＳＫ６　　Ｃ 36 ～ 37 グリッドの調査区北壁付近で検出した土坑である。東西辺約 1.3 ｍ、深さ 37㎝の方形を呈している。北部は調査区外に及ぶ。

出土遺物は少量で、14 世紀から 15 世紀前半頃にかけてのものと考えられる。

ＳＫ７　　ＳＫ１と重複している土坑である。ＳＫ１の東壁付近にあたり、長軸約 1.5 ｍ、短軸約 0.8 ｍ、深さ 62㎝の不整形を呈する。ＳＫ１よりも古い。出土した土師器は、15 世紀代のものである。

ピット群　　中道Ｂ地区では、調査区東部と西部にピットが集中している。中道Ａ地区と同様、掘立柱建物を構成すると考えられる良好なものも含まれている。掘立柱建物として明確にまとめることはできなかったが、ピットの集中状況から建物集中域がこの２ヶ所にあったものと考えておきたい。とくに西部は区画溝（ＳＤ３）と石組土坑（ＳＫ１）があり、良好な集落（屋敷）域であったと考えられる。

⑤立会Ａ地区

ＳＥ 95　　最東端で検出された遺構である。大部分が調査区外に及ぶ。検出範囲内では弧状を呈し、直径 1.5 ｍ程度の円形を呈すると考えられる。限られた調査区内の状況であるが、遺構検出面から 70㎝以上掘られているため、井戸と考えられる。掘削範囲内では石組は確認できなかったので、石組み以外の構造を持つと考えられる。出土遺物は少量だが、15 世紀中頃の土師器類が出土している。

ピット群　　立会Ａ地区では、ほぼ全域から多くのピットが確認されている。いずれも掘立柱建物を構成する可能性の高いものである。この調査区は、中道Ｂ地区西部と隣接しており、両者は一体で集落（屋敷）を構成していたと考えられる。　　（星野・伊藤）

註

（１）煙道付炉穴の部分名称は下記に従っている（開口部・煙道部・煙出部）が、ここでは煙道部と開口部境界の強く被熱する部分を、特に「焚口」と呼ぶことにする。また、長さは開口部から煙出部までの全長、幅は開口部の最大幅で計測している。

小濱学「炉穴とその機能」『縄文時代の考古学』５、同成社、2007 年。

（２）註１前掲。

第１表　遺構一覧表（縄文時代）

竪穴住居

遺構番号	地区	グリッド	性格	時代	形状	規模(m)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
ＳＨ22	中垣戸	K7～8	竪穴住居	縄文早期	不整円形	4.8×2.0	18	押型文土器・石器	
ＳＨ39	中垣戸	IJ11～12	竪穴住居	縄文早期	円形	5.0?×3.0	45	押型文土器・石器	SF36・44が重複
ＳＨ42	中垣戸	IJ9～10	竪穴住居	縄文早期	楕円形	3.5×3.8	15	押型文土器・石器	垂木穴あり、SF33が重複
ＳＨ48	中垣戸	I14	竪穴住居	縄文早期	円形	4.2×1.3	20	押型文土器・石器	遺物多、SF57・58が重複
ＳＨ50	中垣戸	GH14～15	竪穴住居	縄文早期	円形	4.7×3.0	30	押型文土器・石器	遺物多、SF97が重複
ＳＨ64	中垣戸	I12～13	竪穴住居	縄文早期	不整円形	4.1×3.6	13	押型文土器・石器	機能面硬化、SF44が重複

煙道付炉穴・その他の炉穴

遺構番号	地区	グリッド	性格	時代	軸方向	規模(m)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
ＳＦ33	中垣戸	J9	煙道付炉穴	縄文早期	Ｓ28° Ｗ	2.9×0.9	70	押型文土器・石器	石皿など、遺物非常に多
ＳＦ36	中垣戸	IJ10～11	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ６° Ｗ	2.4×1.2	60	押型文土器・石器	遺物多
ＳＦ37	中垣戸	J10	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ28° Ｗ	2.1×0.9	60	押型文土器・石器	
ＳＦ44	中垣戸	J11,IJ12	煙道付炉穴	縄文早期	Ｓ62° Ｗ	4.3×1.7	45	押型文土器・石器	遺物多、重複の可能性
ＳＦ46	中垣戸	H13	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ54° Ｅ	2.9×0.8	55	押型文土器・石器	
ＳＦ53	中垣戸	HI15	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ３° Ｅ	4.1×1.3	50	押型文土器・石器	遺物多、重複の可能性
ＳＦ57	中垣戸	I14	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ14° Ｅ	3.3×0.8	50	押型文土器・石器	
ＳＦ58	中垣戸	I14	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ８° Ｅ	1.9×0.9	60	石器	
ＳＦ59	中垣戸	J8	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ９° Ｗ	3.0×0.7	40	押型文土器・石器	
ＳＦ60	中垣戸	J7～8	煙道付炉穴	縄文早期	Ｎ64° Ｗ	2.2×1.1	65	押型文土器・石器	口縁部完形の土器出土
ＳＦ61	中垣戸	H16	煙道付炉穴	縄文早期	Ｓ13° Ｗ	2.9×0.8	60	押型文土器・石器	
ＳＦ62	中垣戸	I13	炉穴	縄文早期	Ｎ27° Ｅ	1.5×1.0	70	押型文土器・石器	掘削途上の煙道付炉穴か
ＳＦ63	中垣戸	J10	炉穴	縄文早期	（楕円形）	0.9×0.7	36	押型文土器・石器	底面被熱
ＳＦ97	立会Ｃ	－	炉穴	縄文早期	－	－	28	押型文土器・石器	

その他縄文遺構

遺構番号	地区	グリッド	性格	時代	形状	規模(m)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
ＳＫ11	中垣戸	K3	土坑	縄文早期	不整楕円形	1.25×0.7	19	押型文土器・石器	
ＳＫ12	中垣戸	L2	土坑	縄文早期	不整楕円形	1.5×1.3	15	押型文土器・石器	
ＳＫ14	中垣戸	K4	土坑	縄文早期	不整形	2.5×1.0	8	押型文土器・石器	
ＳＫ15	中垣戸	L2	土坑	縄文早期	楕円形	1.3×1.0	13	押型文土器・石器	
ＳＫ16	中垣戸	L2～3	土坑	縄文早期	不整楕円形	1.0×0.8	14	押型文土器	
ＳＫ19	中垣戸	J5～6	土坑	縄文早期	不整形	1.1×1.0	18	押型文土器・石器	
ＳＫ20	中垣戸	K7	土坑	縄文早期	瓢箪形	1.2×0.7	7	石器	
ＳＫ25	中垣戸	JK7	土坑	縄文早期	楕円形	1.2×1.0	33	押型文土器	
ＳＫ26	中垣戸	JK6	土坑	縄文早期	不整形	2.5×1.8	14	押型文土器・石器	
ＳＫ27	中垣戸	I8	土坑	縄文早期	楕円形	0.8×0.7	8	押型文土器・石器	
ＳＫ29	中垣戸	IJ8～9	土坑	縄文早期	不整形	3.0×2.6	8	押型文土器・石器	
ＳＫ30	中垣戸	IJ8	土坑	縄文早期	瓢箪形	1.75×0.85	14	押型文土器・石器	
ＳＫ32	中垣戸	IJ10	土坑	縄文早期	不整楕円形	2.9×1.5	5	押型文土器・石器	
ＳＫ35	中垣戸	I10	土坑	縄文早期	不整形	1.3×0.8	10	押型文土器・石器	
ＳＫ38	中垣戸	I10	土坑	縄文早期	不整形	2.50×0.8	8	押型文土器	
ＳＫ40	中垣戸	I11	土坑	縄文早期	不整形	1.5×1.2	17	押型文土器	
ＳＫ41	中垣戸	HI11	土坑	縄文早期	不整形	2.7×2.5	13	押型文土器・石器	
ＳＫ45	中垣戸	IJ12～13	土坑	縄文早期	不整楕円形	2.7×1.3	43	押型文土器・石器	遺物多
ＳＫ47	中垣戸	H13～14	土坑	縄文早期	不整形	2.9×2.1	20	押型文土器・石器	
ＳＫ67	中道Ａ	G21～22	土坑	縄文早期	不整円形	1.8×0.8	20	押型文土器	

第２表　遺構一覧表（中世以降）

中世以降の遺構　　※：掘削深度（完掘できず）

遺構番号	地区	グリッド	性格	時代	形状	規模(m)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
ＳＫ１	中道Ｂ	BC38～39	石組遺構	中世Ⅲｂ	長方形	3.3×3.0	34	土師器皿・鍋・釜 陶器甕、卸皿	遺物多
ＳＫ２	中道Ｂ	B38	土坑	中世Ⅲ	楕円形	0.8×0.75	15	土師器皿・鍋	
ＳＤ３	中道Ｂ 立会Ａ	BC36	溝	中世Ⅲｂ	Ｌ字形	6.0×2.0	26	土師器皿・鍋・羽釜 山茶碗、陶器片	遺物多
ＳＫ４	中道Ｂ	B37	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.0×0.9	29	土師器皿・鍋	鍋３ａ
ＳＫ５	中道Ｂ	C37	土坑	中世Ⅲ	楕円形	0.85×0.65	29	土師器皿・鍋、白磁	鍋３～
ＳＫ６	中道Ｂ	B36～37	土坑	中世Ⅱｂ～Ⅲ	方形	1.3×0.8	37	土師器皿・鍋	
ＳＫ７	中道Ｂ	B39	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.5×0.8	62	土師器皿・鍋	ＳＫ１より古、鍋３ａ
ＳＫ８	中道Ｂ	B38	土坑	中世Ⅱ～Ⅲ	楕円形	0.8×0.4	27	土師器皿	
ＳＫ９	中道Ｂ	C37	土坑	中世Ⅲ	不整楕円形	1.2×1.0	39	土師器皿・鍋	鍋３ｂ
ＳＫ21	中垣戸	J6	土坑	中世	円形	1.1×1.1	9	土師器小片(１点)	
ＳＥ28	中垣戸	I8	井戸	中世Ⅲｂ	円形	1.1×1.1	*100	土師器皿・鍋・羽釜、 山茶碗　陶器甕	遺物多
ＳＥ34	中垣戸	I10	井戸	中世Ⅲ	円形	1.7×1.7	*100	土師器皿・鍋、山茶 碗、陶器、青磁、土錘	遺物非常に多
ＳＫ49	中垣戸	G14～15	土坑	中世Ⅳ	円形	2.2×0.7	18	土師器鍋	
ＳＫ52	中垣戸	I15	土坑	近世	楕円形	1.6×0.6	21	陶器碗、擂鉢	深さ90cm(土層断面より)
ＳＫ54	中垣戸	H16	土坑	近世	楕円形	1.1×1.0	6	押型文土器・土師器鍋	
ＳＺ55	中垣戸		落ち込み	中世Ⅳ					
ＳＫ56	中垣戸	H17	土坑	中世Ⅳ	楕円形	2.6×0.9	45	擂鉢・土師器	
65			欠番						
ＳＫ66	中道Ａ	F21	土坑	近世	楕円形	1.5×1.1	15	土師器鍋	
ＳＫ68	中道Ａ	F24	土坑	近世	楕円形	1.0×0.8	45	土師器鍋、山茶碗	
ＳＫ69	中道Ａ	E25～27	土坑	中世Ⅳ	不整形	6.6×0.7	48	土師器鍋、山茶碗	遺物多
ＳＫ70	中道Ａ	E28～29	土坑	中世Ⅱ～	楕円形	0.9×0.8	40	土師器皿・甕、山茶碗	
ＳＫ71	中道Ａ	E28	土坑	中世Ⅲ	不整楕円形	1.6×1.4	31	土師器皿、陶器	
ＳＫ72	中道Ａ	E28	土坑	中世Ⅲｂ	不整楕円形	1.1×1.0	36	土師器皿・鍋、青磁片	
ＳＫ73	中道Ａ	E30	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.1×0.9	30	土師器小皿(完形1点)	
ＳＫ74	中道Ａ	E28～29	土坑	中世Ⅲ～	隅丸長方形	1.3×0.75	32	土師器皿・鍋	
ＳＫ75	中道Ａ	D30	土坑	中世Ⅲ	不整形	1.8×0.7	32	土師器皿・鍋	
ＳＫ76	中道Ａ	D32	土坑	中世Ⅲ	隅丸長方形	1.2×1.0	58	土師器皿・鍋	
ＳＫ77	中道Ａ	DE29	土坑	中世Ⅲ	不整形	1.30×0.95	28	土師器皿・鍋	
ＳＫ78	中道Ａ	E31	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.0×0.8	31	土師器皿・鍋	
ＳＫ79	中道Ａ	D31	土坑	中世Ⅲ	隅丸長方形	1.1×0.70	40	土師器皿・鍋、山茶碗	遺物多、鍋３ａ
ＳＫ80	中道Ａ	D30～31	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.0×0.75	29	土師器皿・鍋、山茶碗	
ＳＫ81	中道Ａ	D31	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.3×1.05	33	土師器皿・鍋	鍋３～
ＳＫ82	中道Ａ	D32	土坑	中世Ⅲ	円形	1.0×1.0	24	土師器皿・鍋	鍋３ａ
ＳＫ83	中道Ａ	D32	土坑	中世Ⅱｂ～	楕円形	1.0×0.75	26	土師器皿・鍋	遺物多、鍋２ｃ
ＳＫ84	中道Ａ	D31	土坑	中世Ⅲ	円形	0.7×0.7	26	土師器皿・鍋	鍋３ａ
ＳＫ85	中道Ａ	D32	土坑	中世Ⅲ	楕円形	0.85×0.75	30	土師器皿・鍋	鍋３ａ
ＳＫ86	中道Ａ	D34	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.3×0.95	22	土師器皿・鍋・山茶碗	遺物多、鍋３ｂ
ＳＫ87	中道Ａ	D33	土坑	中世Ⅳａ	円形	0.8×0.8	24	土師器皿・鍋	鍋４ａ
ＳＫ88	中道Ａ	CD33	土坑	中世Ⅳａ	不整形	1.5×1.0	23	土師器皿・鍋・羽釜 陶器甕、山茶碗	遺物多、鍋４ｂ
ＳＫ91	立会Ａ	－	土坑	中世Ⅱ～	不明	2.4×1.0	40	土師器皿	
ＳＫ92	立会Ａ	－	土坑	中世Ⅱ～	楕円形	1.3×0.6	18	土師器皿	
ＳＫ93	立会Ａ	－	土坑	中世Ⅱ～	楕円形	1.4×1.1	14	土師器皿	
ＳＫ94	立会Ａ	－	土坑	中世Ⅱ～	円形	0.8×08	15	土師器皿	
ＳＥ95	立会Ａ	－	井戸	中世Ⅲｂ	円形	1.0×0.4	*77	土師器皿・鍋	
ＳＫ96	立会Ａ	－	土坑	中世Ⅲ	楕円形	0.5×9.4	15	土師器鍋	

Ⅳ　遺　物

1．出土遺物の概要

（1）遺物の数量と構成

本次調査（立会調査含む）で出土した遺物は土器･陶磁器・瓦・石製品・鉄製品で、総量はコンテナ換算で 57 箱（整理前）、総重量 181.9kg である。遺物の時期は縄文時代早期から江戸時代におよぶが、中でも縄文時代の遺物の占める量が多い。

縄文時代の遺物は中垣戸地区下層と、中道Ａ地区の一部のみで出土し、その他の遺物は各調査区から出土している。中世以降の遺物では、14 世紀後半から 15 世紀前半の土器・陶磁器が最も多くみられた。SE34 出土土器はこの時期の良好な資料である。また、発掘調査では平安末～鎌倉時代に属する遺構は明確にできなかったが、当該期の渥美産陶器などが散見され、近隣に屋敷地等が存在する可能性は高いといえよう。近世の遺物としては、18 世紀後半以降の肥前系磁器や瀬戸美濃産陶器が少量出土した。

（2）整理の方針と方法

整理作業にあたっては土器の口縁部や底部など時期の判別しやすい部位を中心にピックアップを進めた。石器は、極力全点を図化するよう努めていたが、礫器の器種認定が難しく、大下明氏の指導を経て、整理期間の後半で大幅に数量が増加したため、一部の提示にとどまらざるを得なかった。未報告の資料については、機会を改めて提示したい。

写真は図化遺物のうち主要なもののみを撮影し、石膏による補填は脆弱部の補強のみにとどめた。

縄文土器は表面の剥落を防ぐため、洗浄ののち可逆性のある市販の土器強化剤、大成テクノケミカル株式会社製ナチュラルコート NW-1（エチレン酢ビ系樹脂塗料）を含浸した。この結果、土器の表面状態は非常に安定したが、拓影採取時に画仙紙の細かい繊維が土器に固着してしまう、土器に付着した炭化物まで固めてしまい、分析用試料採取に苦労するなどの問題が生じた。今後の検討課題である。

以下、時代ごとに遺物の詳細を記述する。製作技法の特徴や法量など、各遺物の詳細については章末尾の遺物観察表をあわせて参照されたい。

2．縄文時代の遺物

（1）総説

①遺物の概要

本次調査で出土した縄文時代の遺物は、土器の破片総数約 1,200 点、石器 448 点におよぶ。ここで示す遺物はすべて中垣戸地区で出土したことから、以下、出土地区については省略して記述を進めたい。

縄文土器は、ほぼ全てが縄文早期前半のネガティブな押型文土器で、わずかにそれに伴う縄文施文の土器がある。三重県を中心とした山田猛氏の編年では大川ａ式新[1]、矢野健一氏の編年では大川式古段階[2]に相当するものが主体で、大鼻式や神宮寺式は出土していない。以下では、特に断らない限り山田氏の土器編年に即して記述することにしたい。

石器についても、一部の排土・表採資料を除けば、基本的には縄文早期の所産と判断される。石器は剥片石器が少なく、礫石器が大半を占めるという、三重県では珍しい石器組成を示している。また、磨石などに当該期特有のものが認められる。

②資料の提示方法

土器は出土した遺構・層位ごとに図示したが、生痕などの影響や、重複遺構の見落としが十分に想定されるため、遺物の共時性や一括性については、なお検討を要する。しかし、遺構ごとの土器様相に大きな差を見出すことは難しい。石器は器種ごとにまとめ、遺構名を付記した。

遺物包含層（基本層序第Ⅲ・Ⅳ層）出土土器は一括して扱う。本層は重機により掘削し、層位的な遺物の取り上げを行っていないためである。

遺物の図化方法は、鴻ノ木遺跡や大鼻遺跡など、当センターの既刊報告書に倣ったが、縄文土器断面における文様の凹部見通し線は、縮尺の関係ですべてを表現することが難しく、刺突にのみ示した。

③年代測定試料の採取

土器の残存状態は良好で、内外面に炭化物が付着していたことから、遠部慎氏（徳島大学埋蔵文化財調査室、当時）にこれらの採取と炭素 14 年代測定を依頼した。この成果については、炉穴から採取した炭化材の年代測定・樹種同定等とあわせて、次年度以降に報告する予定である。結果の速報は第Ⅴ章で触れたので参照願いたい。

（2）縄文土器（第 18 図～第 26 図）

①押型文土器の分類と属性

まず、当遺跡の土器の大要とバラエティを示すため、便宜的に各属性を分類しておくことにしたい。そして、奈良県大川遺跡 (3) の土器分類を発展させた奈良県鵜山遺跡 (4) の分類との対応を示す。

これらの属性間、とりわけ器形・器壁厚と施文手法には一定の相関が認められ、典型的な大川ａ式の要素を備えるものと、刺突を多用する南勢地域の地域色が色濃いものに大別できよう。

土器の製作工程については、ここで改めて論じることはしないが、各土器に認められる製作技法の痕跡については適宜取り上げたい。

ⅰ）器形（第 17 図－①～③）

大川式の一般的な器形２種（f1・f2）の存在が想定されるが、全形を知りうる個体はないので、口縁部と底部の形態を示しておく。

・口縁部形態

r1：口縁部がやや強く屈曲しながら外反するもので、器壁は比較的厚い。鵜山１ｂ類に相当する。

r2：口縁部の屈曲がやや弱く、ゆるやかに外反するもの。器壁はやや薄手で、後述の文様構成 c2 類が多い。鵜山１ｃ類にほぼ相当する。

大川式の口縁部形態は、r1 から r2 へ変遷することが知られている。しかし本遺跡では、文様の特徴や同一遺構における共伴関係などから、基本的には同時期のものとみておきたい。こうした器形の差は、大きくは文様構成に起因する、製作手法の違いによるものと考えられる。r1 は刺突が深く、口縁端部の刻みも大きいものが多い。また、頸部以上の文様構成が多段で、頸胴部の境界が明確であるか、逆に頸胴部の境界があいまいで、口縁部のみが強く外反する。一方、r2 は口縁部から頸部まで刺突のみで充填するものが多く、刺突・刻みともにヘラ状工具を用いた浅いものが多用される。それに応じて口縁部が緩やかに外反するのであろう。

・底部形態

底部は、尖底状（b1）と乳頭状（b2）のものがほぼ同率で認められる。一般的には、底部が広角に開くものが多い時期であるが、出土例には狭角ぎみのものもみられる。施文は底部先端まで及ばない。

ⅱ）文様構成（第 17 図－④）

文様構成は、いずれも口縁部～頸部に押型文ないし刺突文を横位施文、胴部に押型文を縦位密接施文する直交構成をとる。口縁部以下をすべて縦位密接施文するものは認められない。４種に分ける。

c1：口縁部に横位押型文、頸部に刺突、胴部に押型文を縦位施文するもの（鵜山 C2rp 型）。

c2：口縁部から頸部を刺突、胴部に押型文を縦位施文するもの（鵜山 C1p 型）。

c3：口縁部ないし口～頸部を無文とするもの（鵜山 C1o・C2o 型）。

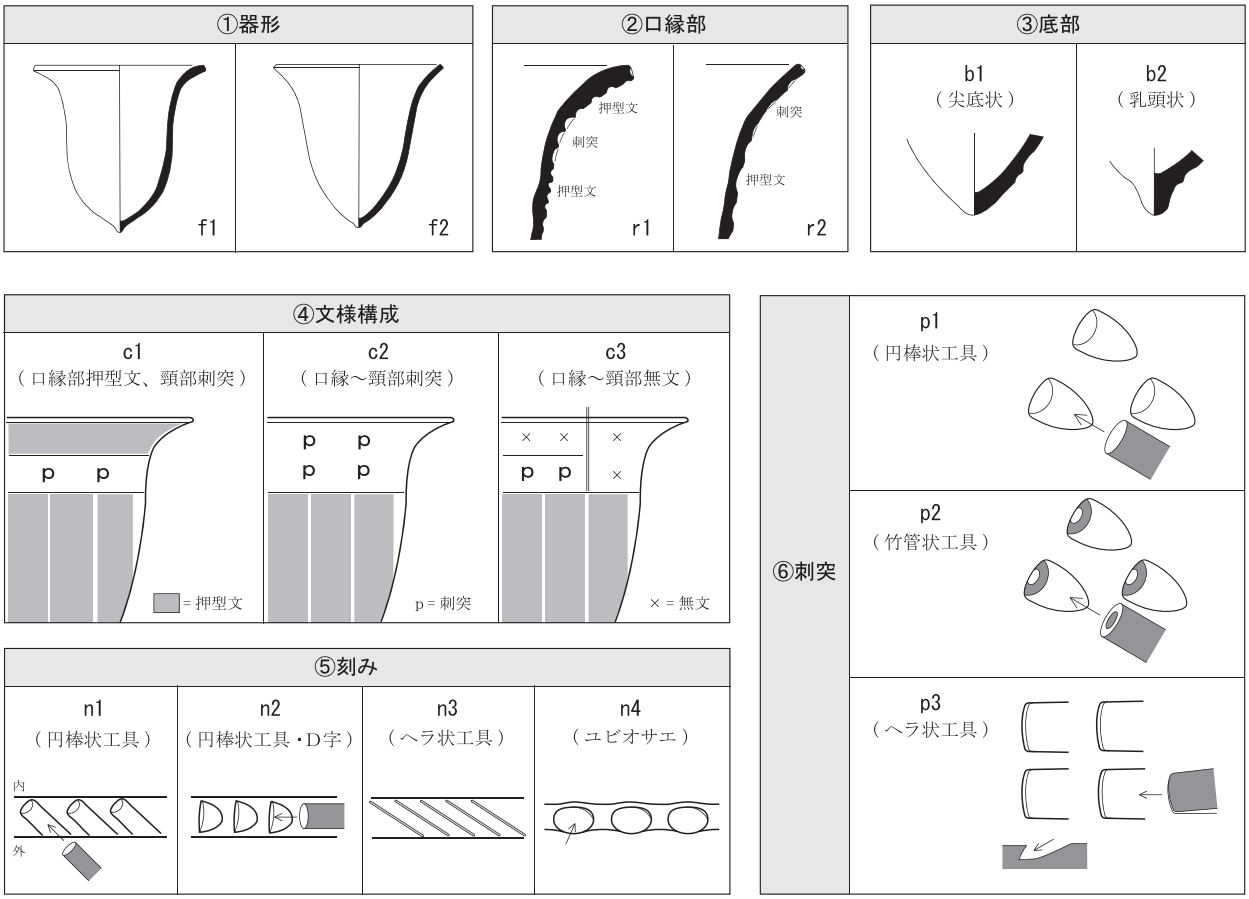
c4：その他上記に該当しないもの。胴部に縦位帯状施文するもの（188）や、口縁端部直下に刺突を１列入れ、口縁部に押型文を横位施文するもの（88）など。

上記類型の出現比率（c4 を除く）は、c1 が 47％（45 点 (5)）、c2 が 44％（42 点）、c3 が９％（９点）で、c1 と c2 がおよそ同率となる点が特筆される。同様の傾向は、大和高原の縄文早期遺跡 (6) においても認められる。また櫛田川流域の松阪市鴻ノ木遺跡 (7) や鐘突遺跡においても、c2 類が一定量認められる。ところが、公表された資料から判断する限り、滋賀県や東海地方西部では文様構成 c1 類をとるものが一般的なようである。この点は、大川式の地域性を検討する上で今後重要な要素となろう (8)。

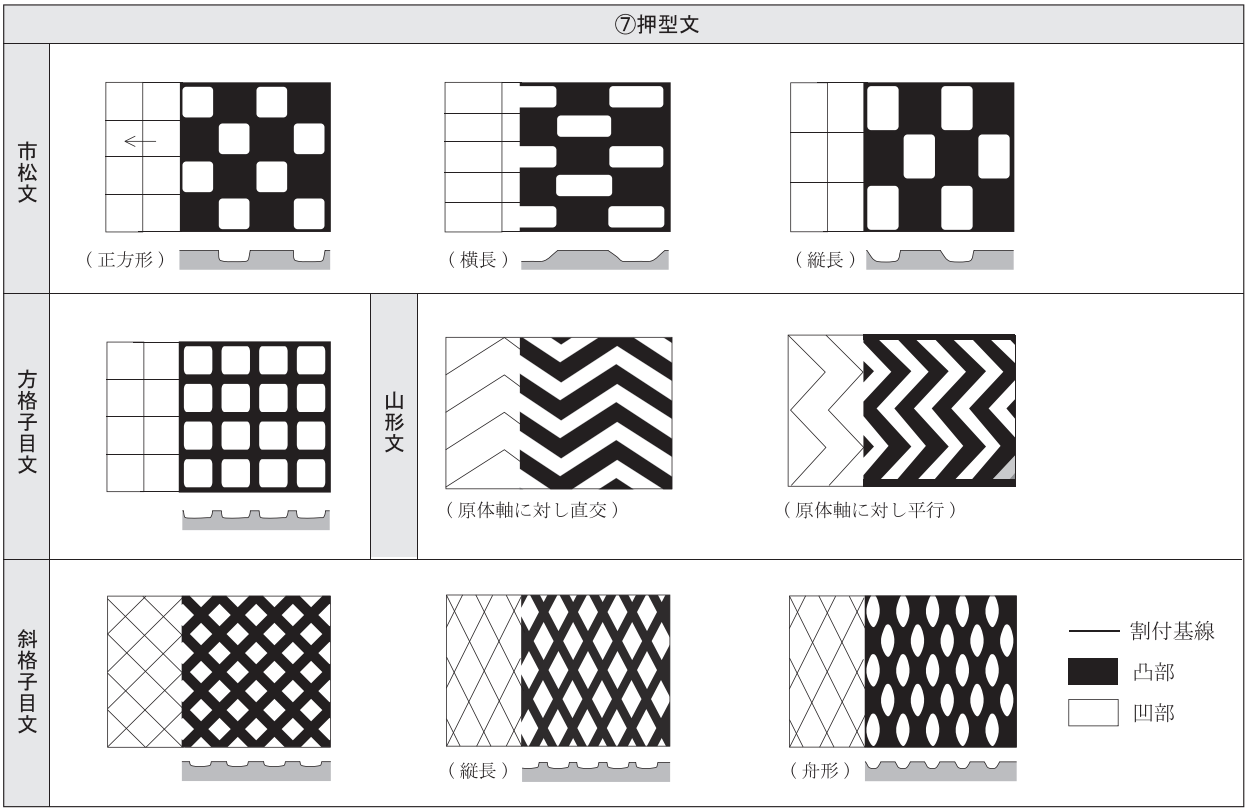
なお、164・343 など、頸部に山形文を有する個体は、口縁部横位押型文＋胴部縦位押型文（鵜山 c1r 類、あるいは密接帯状施文 (9)）の文様構成をとる可能性がある。しかし、山形文の施文パターンはやや複雑で、鴻ノ木遺跡でも頸部刺突と胴部縦位押型文の間に充填されるものなどがある。当遺跡ではいずれも小片のため、類別は控えておきたい。

ⅲ）刻み（第 17 図－⑤、写真図版 23）

口縁端面（口唇面）の刻みで、工具の形状および



※①・④・⑦は註４文献を一部改変、その他は新たに作図した。



第 17 図　押型文土器属性分類模式図

刻みの手法によって４種に分ける[10]。

n1：円棒状工具を押圧または刺突するもの。

n2：D 字形。工具を口縁端部に平行させるもの。

n3：ヘラ状工具で線状の細い刻みを施すもの。

n4：ユビオサエによるもの。

刻みは、口縁に対しそれぞれ右肩上がり・左肩上がり・直交するものがある。このうち、左肩上がりのものが全体の約７割を占め、直交するものがそれに次ぐ。製作者の利き腕（右利きか）や製作時の姿勢が反映されるのであろう。297 は、工具端部の圧痕から、細い竹管状の工具が用いられていることが判明する例である。こうした工具端部の圧痕は、すべて口縁端部の土器内面側にみられる。

ⅳ）刺突（第 17 図－⑥、写真図版 24）

刺突痕から復原される工具によって３分する[11]。

p1：円棒状工具を用いるもの。

p2：竹管状の工具を用いるもの。刺突痕は円棒状工具に似るが、工具端部の圧痕が環状ないし爪形を呈する。棒状具の切断面が凹凸をもつものも含まれていよう。

p3：平たいヘラ状の工具を用いるもの。工具は先端が角頭状のものや半円形のものがある。

p1・p2 は器壁に対して約 30° の角度で棒状の工具を刺突するもので、大きくは同種のものといえる。p3 は、器壁に対し水平気味に刺突するものが多いが、船形沈文のような切れ長の文様を企図し、器壁に対し垂直に刺突したもの（167）もある。

刺突は右下から行うものが多いが、稀に下方や上方から刺突するもの（38）や、左上方・右下方からの刺突を組み合わせ、羽状に施文するもの（73）がある。ただし、同一個体内で二種類以上の異種工具が用いられた刺突の例はない。

従来、大川ａ式の刺突工具には、押型文原体の利用が想定され、同一原体による施文が一貫していたと考えられているが、本遺跡では先端を薄く尖らせたヘラ状工具の刺突痕が複数例確認できる。

ⅴ）押型文（第 17 図 - ⑦、写真図版 24）

押型文は文様の割り付けにより、市松文、方格子目文、斜格子目文、山形文に大別する。

市松文：方格子状の割り付けに、凹部が交互に配されることによって市松状をなすもの。

市松文は、凹部が端整なものと、形が崩れ楕円形を呈するものが同一遺構内で混在する。原体軸に対して凹部が縦長の市松文には、凹部の長幅比が２：１以上となる長大なものはない。また、横長の市松文は、文様相互が左右に重なるものが多い。

方格子目文：方形または楕円形の凹部が縦横平行して配されるもの。小片のため、斜格子目文や市松文との判別に迷うものが多い。

斜格子目文：凹部が菱形や、船形に近い楕円形を呈し、凸部が斜交する格子目となるもの。原体軸に対して凹部が斜傾するものはみられない。凹部の長幅比は２：１未満に収まる。凹部は小ぶりで深いものが多いが、113 は凹部がごく浅い。

山形文：凹部および凸部が山形を呈するもの。原体軸に対して山形が直交するもの（67）と平行するもの（214・216 ほか）がある。口縁部または頸部に横位施文するものが多い。

これら文様の出現比率は、市松文が 82%（276 点）、方格子目文５％（18 点）、斜格子目文 10%（32 点）、山形文３％（10 点）で、市松文が圧倒的に多いという大川式の一般的な様相に合致している[12]。

施文原体については、密接施文する押型文の重複幅や口縁部の施文幅から、押型文原体の長さは概ね 2.5 ～３㎝であると推測される。また、胴部縦位施文の先後関係から復元される施文の流れは、土器を正位に据えたとき右から左へと進行している。なお、原体の周長については十分に検討できなかった。今後の課題としたい。

ⅵ）胎土

胎土は比較的緻密で、色調はにぶい黄橙色から黒褐色を呈する。含有鉱物は石英・チャートや砂岩等を主体とし、稀に雲母が顕著なものが認められる。このうち、雲母が顕著なものについては遺物観察表に特記したが、胎土とその他の属性に特別な相関はみられず、搬入土器等を峻別することはできない。

ⅶ）補修孔（写真図版 23）

補修孔のある土器は４点ある。補修孔はいずれも頸部以上に認められる。刺突や押型文の凹部に外面から回転穿孔するものが多く、器壁の薄い部分を巧みに利用していることが知られる。

②遺構出土土器

ⅰ）竪穴住居出土土器（第 18・19 図）

１～ 19 はＳＨ 22 出土遺物である。１～５は口縁

部片。３・４は口縁端部の刻み工具痕が明瞭である。３は口縁端部にわずかにナデによる無文部があり、市松文。胴部片（８～17）では、斜格子または崩れた市松文（８）や、やや縦長の市松文（12・13）などが目立つ。18・19は底部片で、19は先端が乳頭状を呈するもの。底部端には施文が及ばない。

20～66はＳＨ39出土遺物。20～24・30・32は文様構成c1類で、口縁部はいずれも市松文が施文される。30はヘラ状工具による長めの刺突を施す特徴的なものである。ヘラ状工具は先端が丸く収められ、やや傾けたまま下方から刺突する。32は右下方からの刺突列が４段あるが、これは本遺跡で最多段の例である。25～28は口縁部下を刺突する文様構成c2類。25は口縁端部下に若干の無文帯がみられる。28・42は同一個体か。器壁は薄くシャープなつくりである。共に角頭形のヘラ状工具による刺突を施す。刺突工具と刻み工具とは同一のものであろう。

37～64は頸～胴部片である。文様は市松文が多く、凹部が横長のものが目立つ。38の刺突は下方からなされる。40の刺突痕は胴部の縦位押型文に切られており、施文の先後関係が知られる例である。52は方格子目文としたが、小片のため文様の天地が判然としない。65・66は底部片である。66はやや狭角ぎみの尖底で、底部先端には施文が及ばない。

67～72はＳＨ42出土遺物で、67の山形文は原体に直交して進む。73～86はＳＨ50出土。73は３段の刺突を羽状に配する。74はヘラ状刺突のもの。

87～111はＳＨ48出土遺物。87～91は口縁部片で、87・88・90は口縁部直下に１段ないし２段の刺突を配し、以下を縦位施文する。87は文様の凹部に補修孔を穿つ。90の刺突は竹管状工具を用い、爪形を呈する。94～109は胴部片で、凹部形状の整った市松文が多い。110・111はともに尖底状の底部片で、111は比較的先端まで文様が充填されている。

112・113はＳＨ64出土遺物。113は文様の凹部がごく浅い斜格子目文である。

ⅱ）炉穴出土土器（第20～22図）

114～139はＳＦ33、140・141はＳＦ37出土。114は斜格子目文が上下２段に配される。117は器壁が厚手で、刺突も粗大である。刺突痕を利用して補修孔を穿つ。胴部片では、凹部が横長の市松文が比較的多いが、137のような小ぶりの楕円文による方格子目文がみられる。140はＳＦ37出土。刻みと刺突がユビオサエによるもので、爪痕はすべて圧痕の右側に認められる。

142～161はＳＦ36、162～165はＳＦ46出土遺物。144は文様構成c1類で、口縁部が強く外反する。163はやや直立ぎみに立ち上がる口縁部で、擬口縁をあてたものか。164は頸部に原体軸に直交する山形文を施す。

166～180はＳＦ44出土。厚手の土器片が多く認められる。167は頸部にやや特殊な刺突を施す。169は補修孔がある。補修孔を有するものは、すべて文様の凹部に穿孔する点で共通する。170は口縁部に原体軸に平行する山形文を施文か。180は縄文施文で、撚りの強い単節の縄文を横走させる。

181～188はＳＦ53出土。188は幅１㎝の無文帯を残し、縦長の市松文を帯状施文する。

191～199はＳＦ60出土遺物。199は最上層で出土した土器で、胴部以上がほぼ完形に復元できる。実測図とともに拓本の展開図を示した（第21･22図、写真図版20）。

口縁部形状はr2で、口縁～胴部までゆるやかに外反する。文様構成はc2類である。三重県では、文様構成c2類の土器は小片しか知られておらず、文様構成の全体像を示す土器として貴重な事例である。

口縁端部の刻み、口縁部の刺突はいずれもヘラ状工具を用いる。刺突は右下方から３段おこない、胴部は原体軸に対して横長の市松文を縦位施文する。押型文の重複幅は約2.6㎝で、施文は、若干の例外はあるが、土器を正位に据えたとき右から左へと進行している。

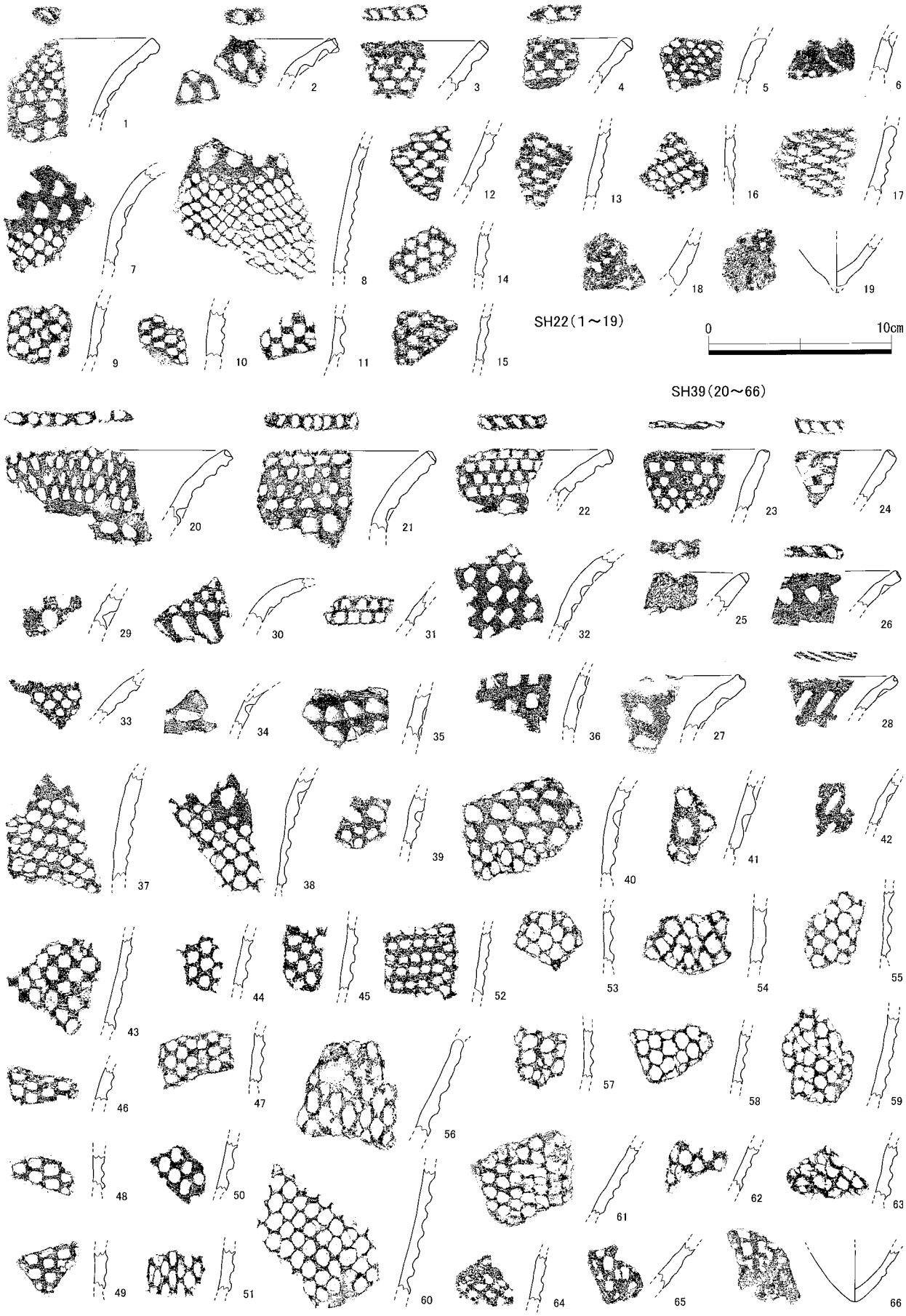
ⅲ）土坑・その他の遺構出土土器（第23～25図）

211は角頭状のヘラ状工具で刺突するが、明らかに工具先端を薄く加工したものである。215は文様構成c3類で、口縁部を無文とする。口縁部は短く外反する。236・237・239は、同じく口縁部を無文とするものである。251は口縁端部の刻み・刺突ともに右肩上りであり、左利きの製作者によるものか。

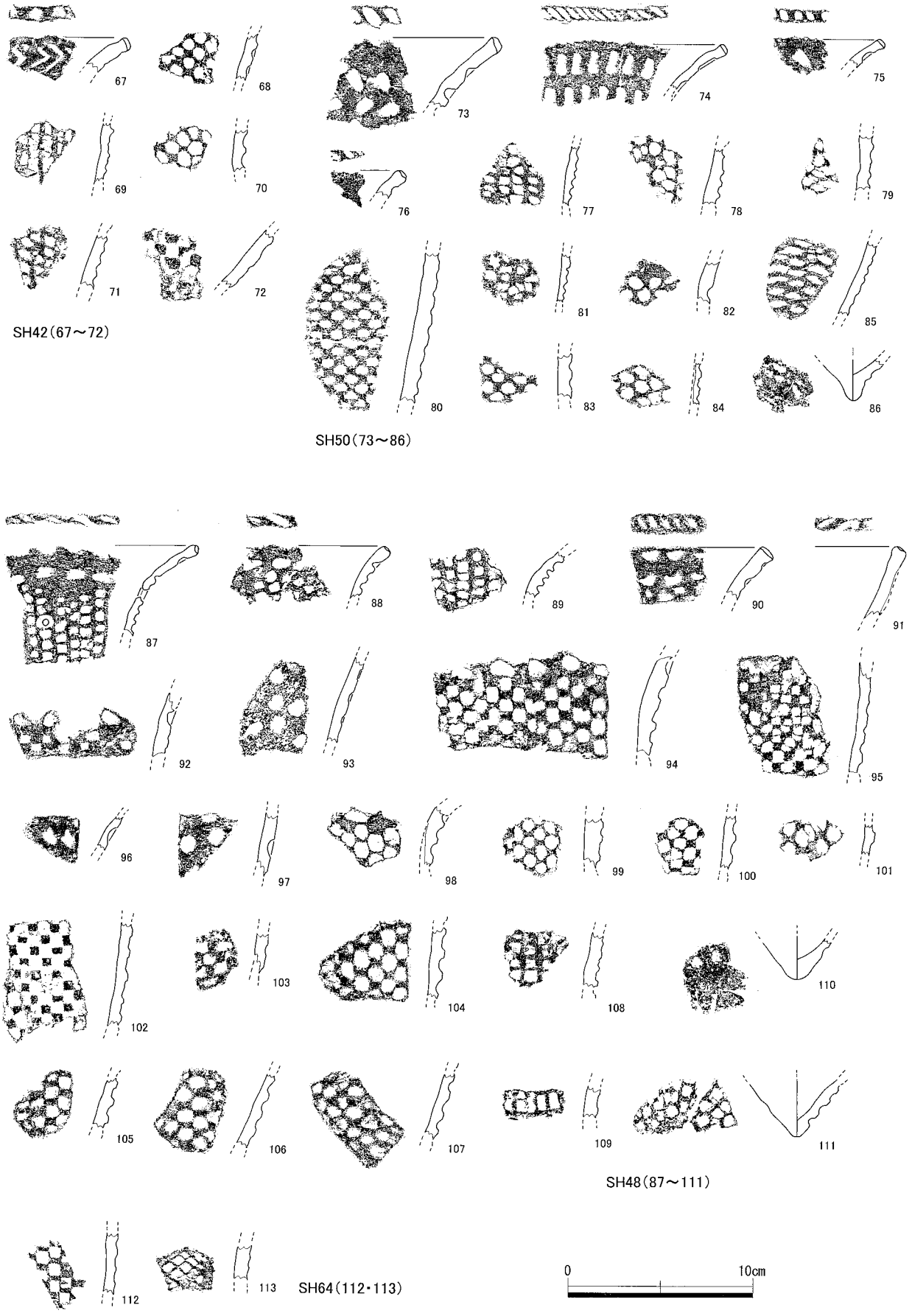
ⅳ）遺物包含層・表土等出土土器（第25・26図）

337～339・342は文様構成c1類。341・343は口縁部または頸部に山形文を施文する。341は口縁端部が外傾しており、やや新しいものか。

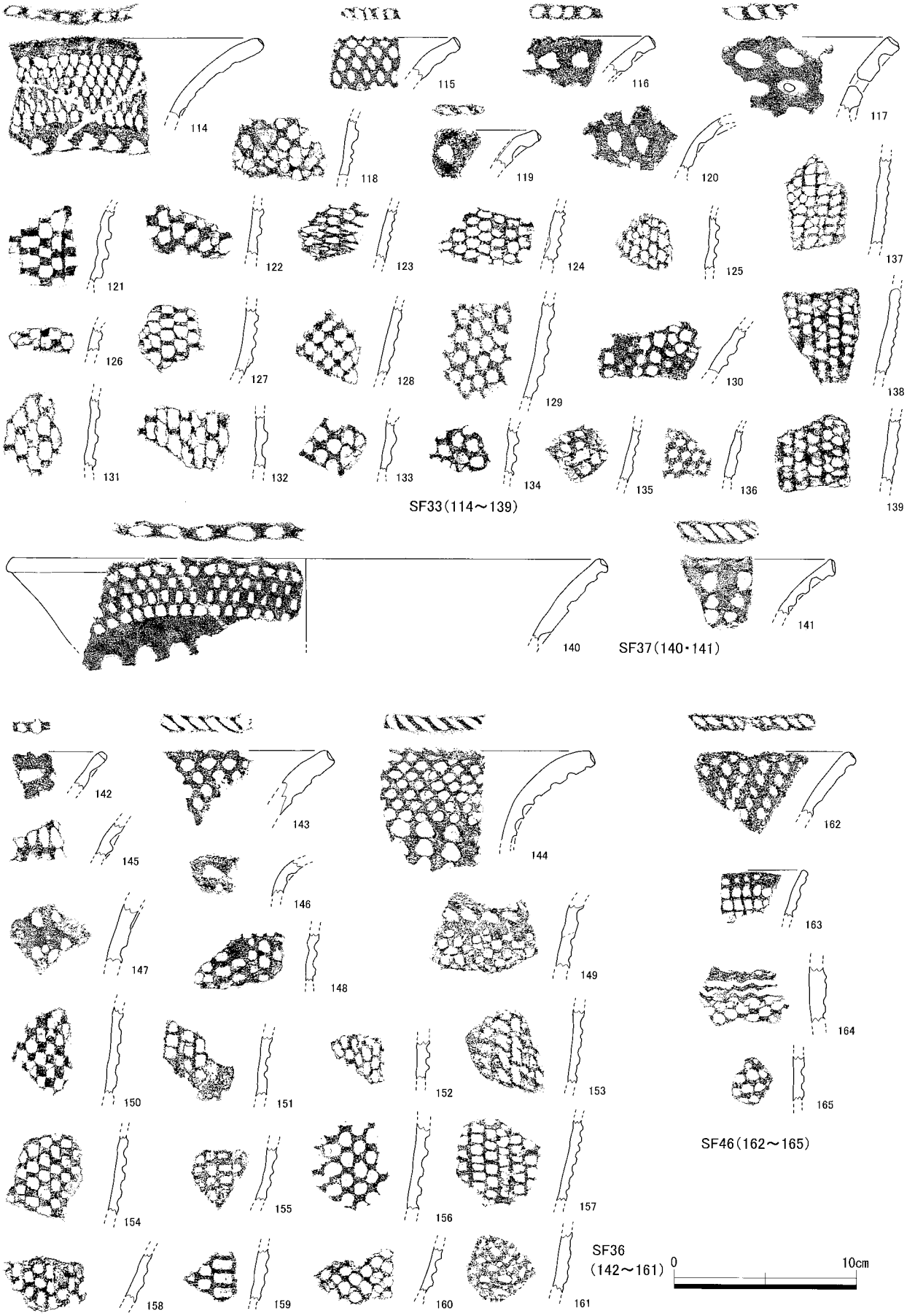
344～352は文様構成c2類。352は内面に穿孔途



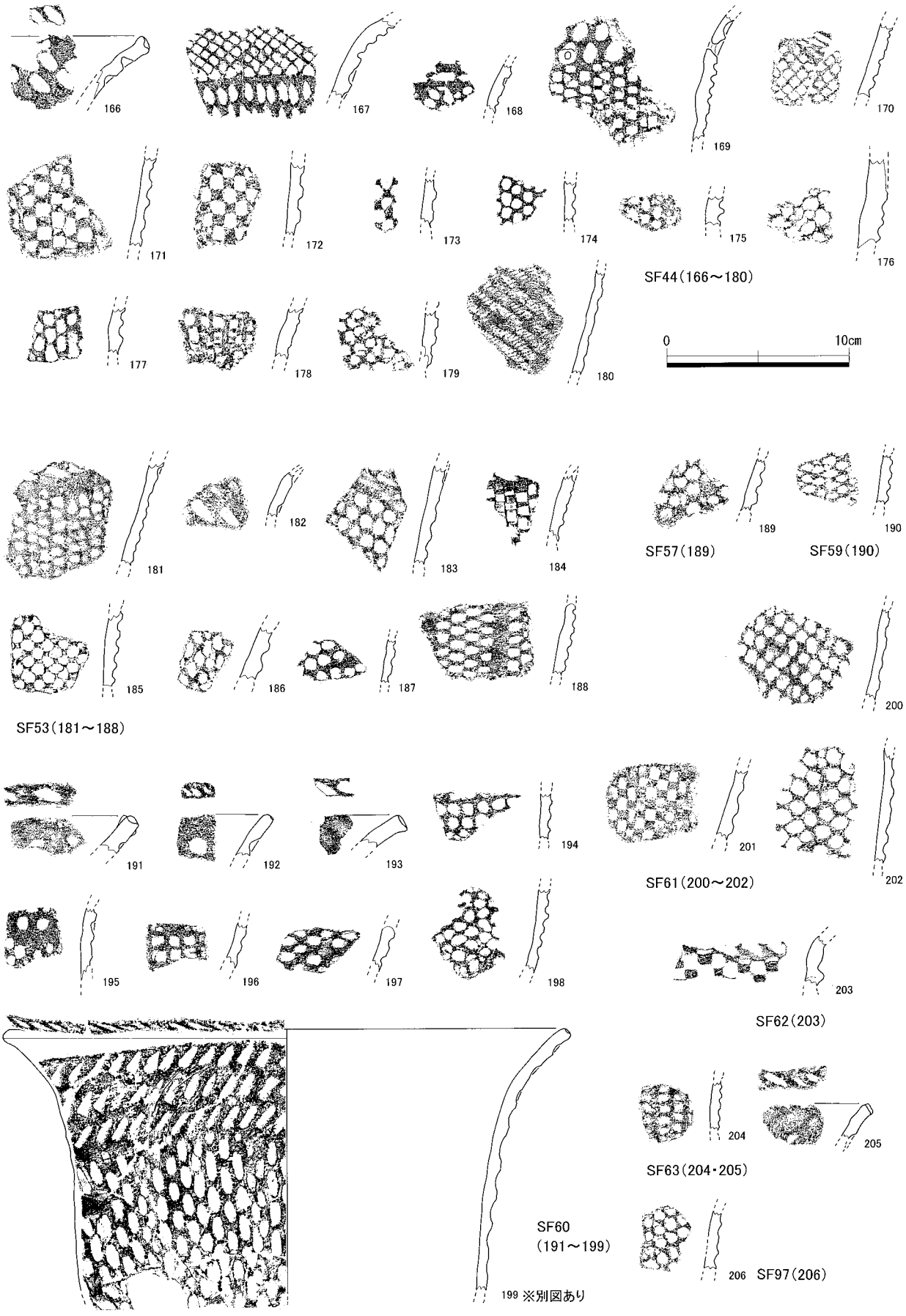
第 18 図　出土遺物実測図1　縄文土器① (1：3)



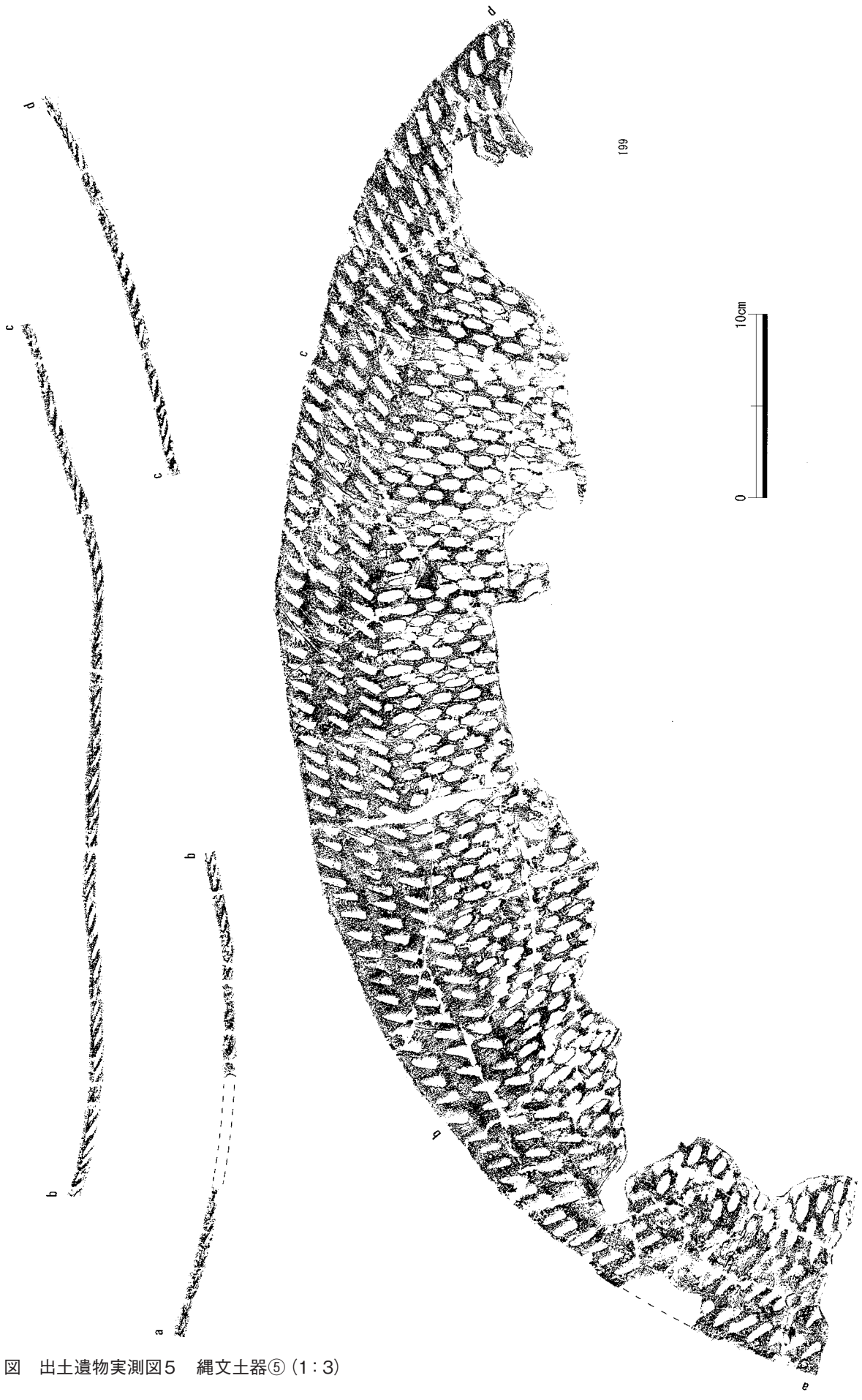
第19図　出土遺物実測図2　縄文土器②（1：3）



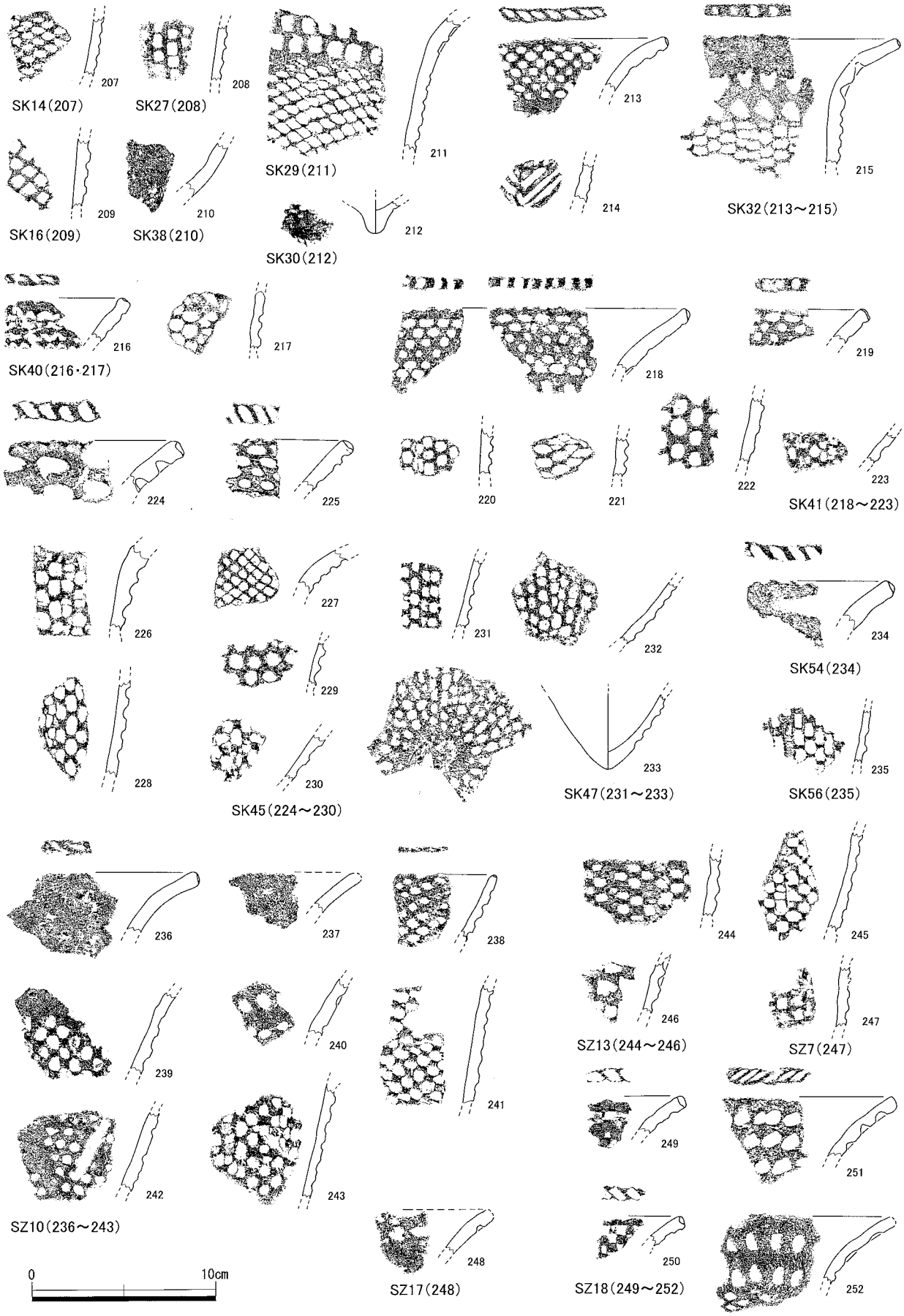
第 20 図　出土遺物実測図3　縄文土器③ (1：3)



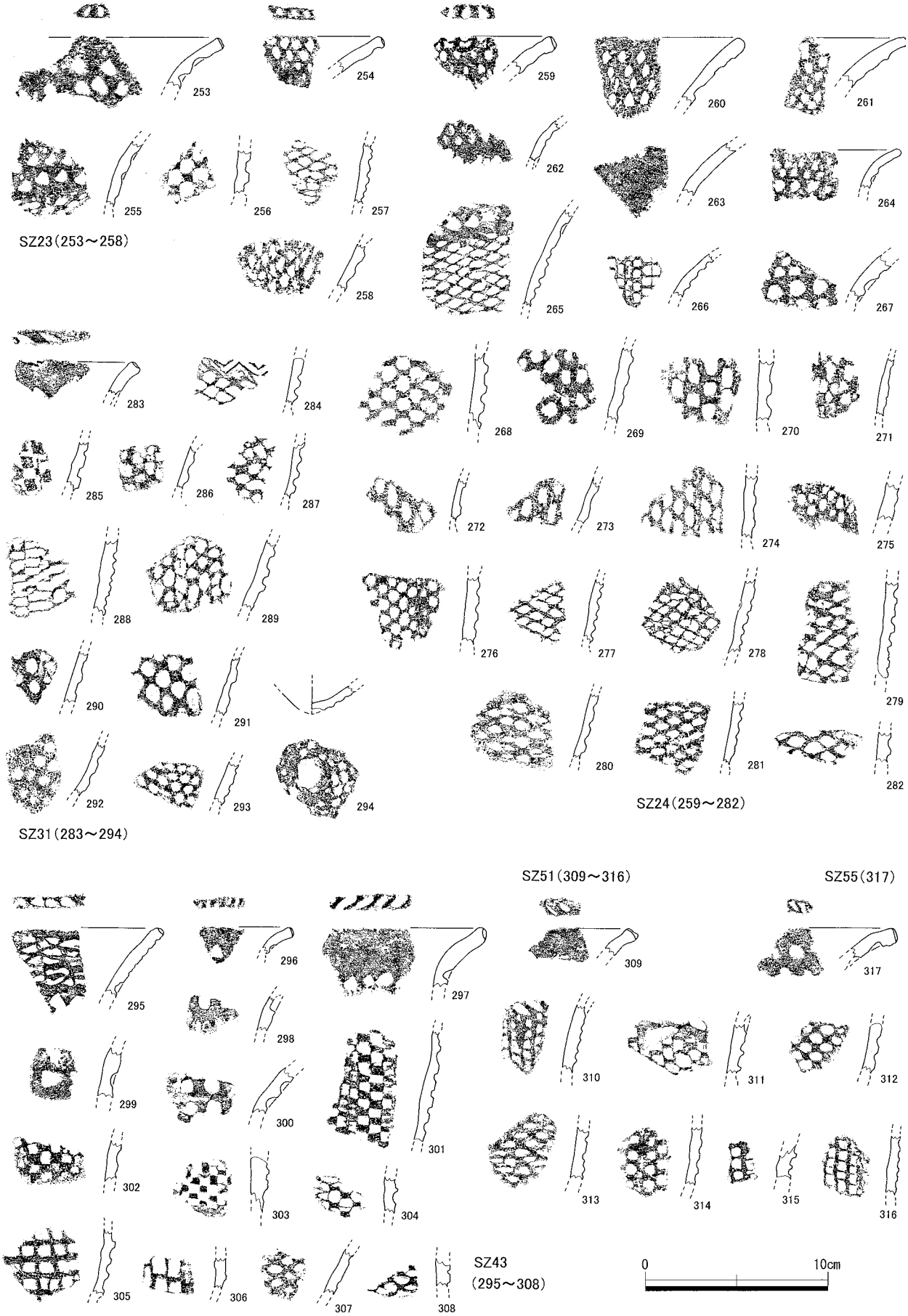
第 21 図　出土遺物実測図4　縄文土器④ (1：3)



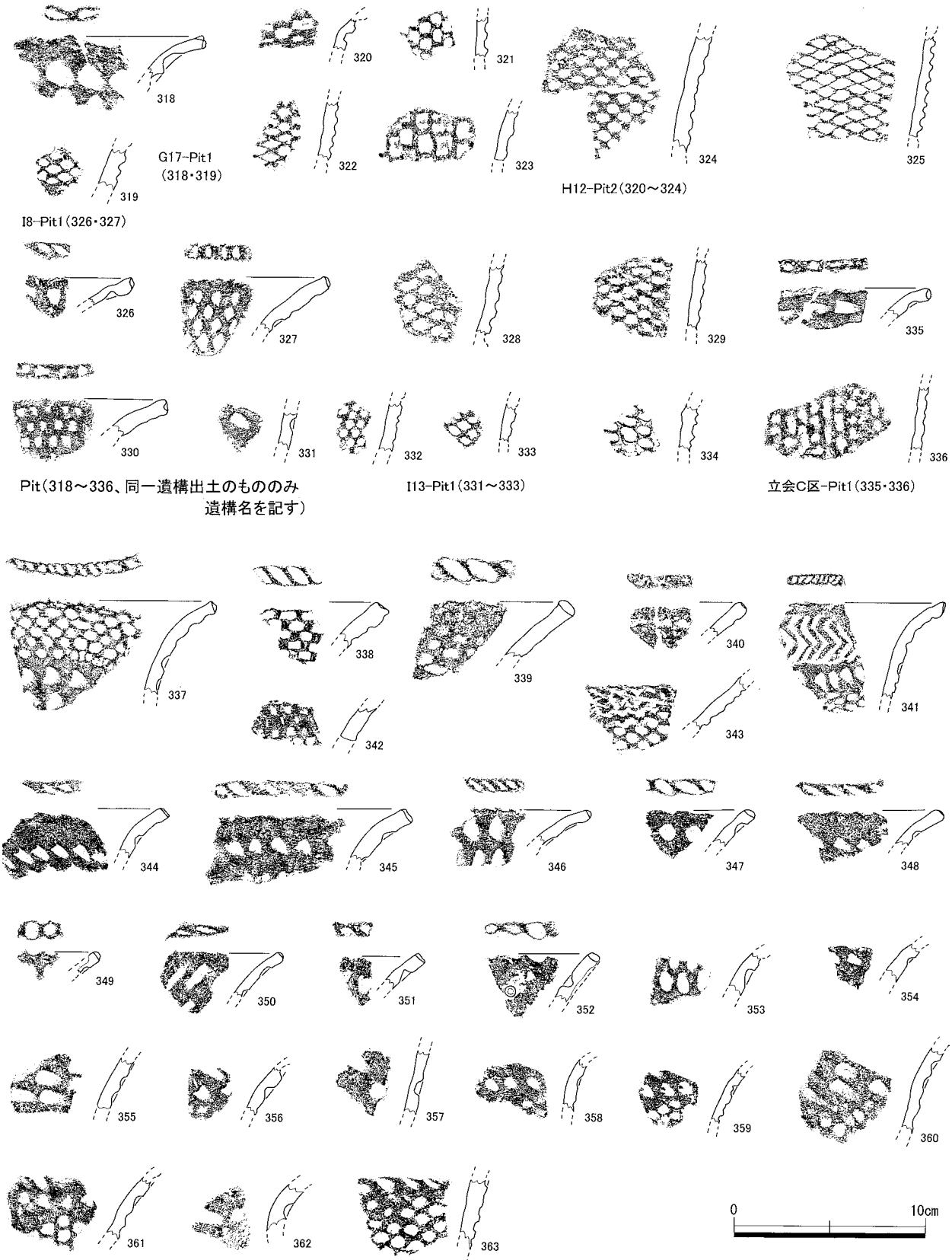
第 22 図　出土遺物実測図5　縄文土器⑤ (1 : 3)



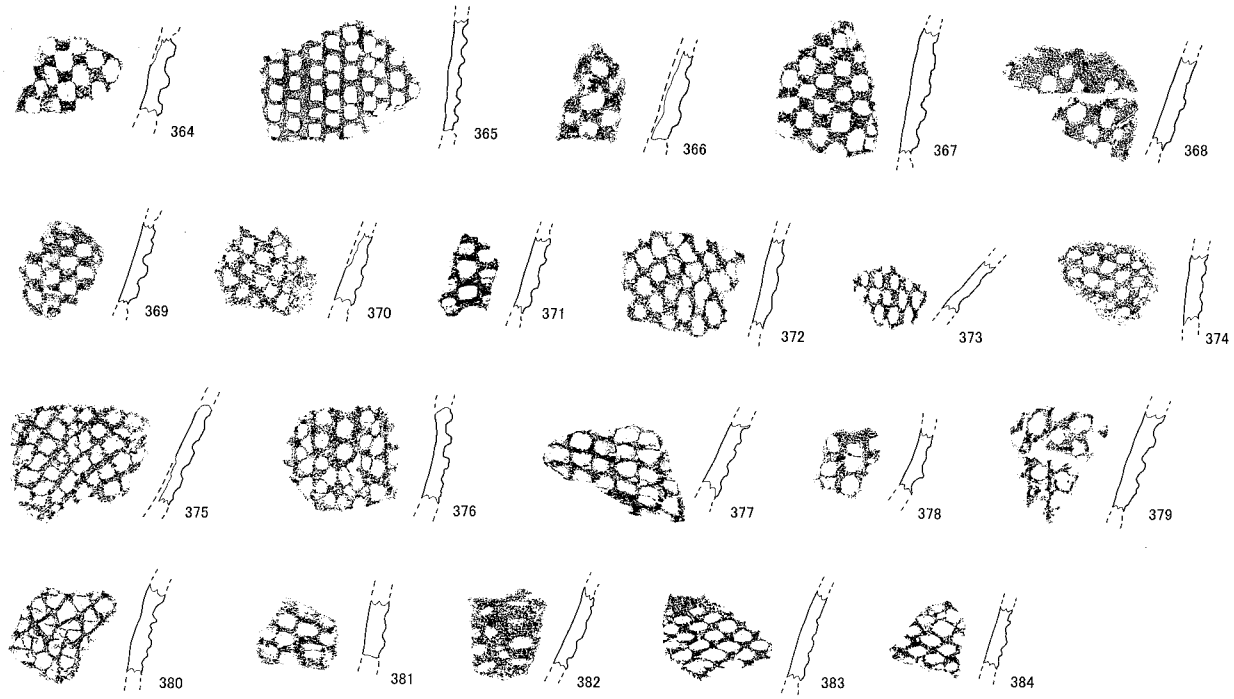
第 23 図　出土遺物実測図6　縄文土器⑥ (1：3)



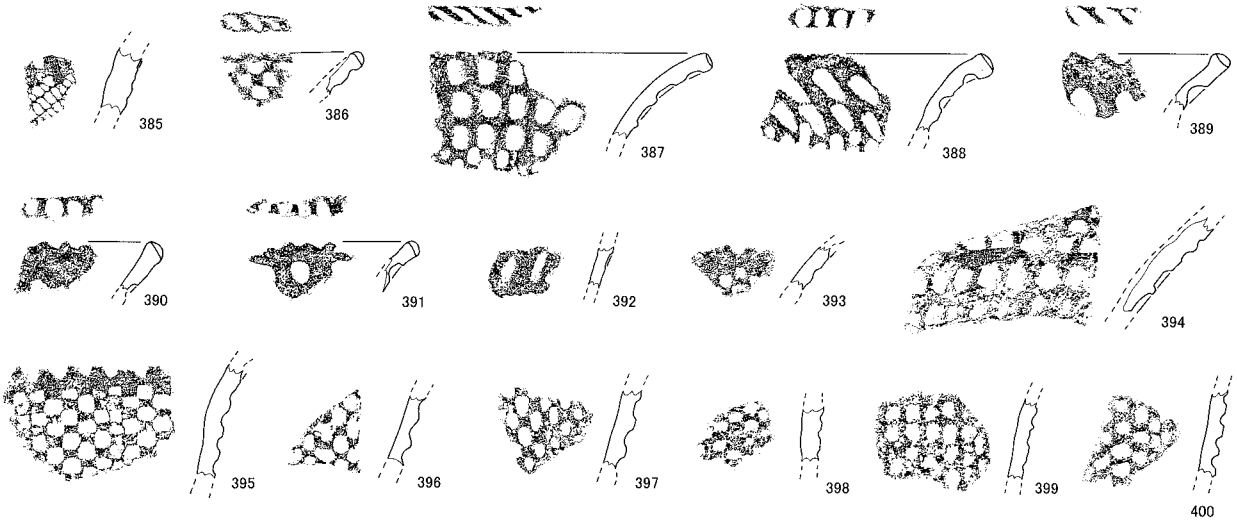
第 24 図　出土遺物実測図7　縄文土器⑦ (1 : 3)



第 25 図　出土遺物実測図8　縄文土器⑧ (1 : 3)



包含層(364～384)



排土(385～400)

0　10cm

第 26 図　出土遺物実測図9　縄文土器⑨ (1：3)

上の補修孔がみられる。385 は頸部に縄文施文と円棒状工具による刺突がみられる。器壁の厚みなどから、大川ａ式の範疇で捉えられるものであろう。387･388 は、文様構成 c2 類で、頸胴部の境界がなく、口縁部のみが短く外反する。

（３）石器（第 28 ～ 33 図）

①出土量と石器組成

今回の調査では、出土したすべての礫や剥片類をグリッドないし遺構ごとに取り上げたのち、発掘・整理担当が使用痕や一次・二次加工痕の有無をもとに、現地または水洗後に取捨選別した。その結果、石器を 121 点、剥片・砕片などの製作関連遺物を含め 448 点の遺物を回収することができた。一方で、遺構埋土の篩がけは実施できなかったので、微細遺物の回収率が低くなっている可能性はある。

第３表に縄文時代の遺構より出土した石器の点数を示した。石器は、SF33・SK45・SF61 など、礫を投棄した炉穴や土坑などから多く得られている。

石器の器種分類は器種構成や石材の利用状況が似通っている鴻ノ木遺跡の報告書 (13) に従う。

本遺跡の石器組成は第 27 図に示した。石鏃や削器といった剥片石器がきわめて少なく、礫器・磨石・石皿などの礫石器が多い点が注目されよう。礫石器の中では、礫器が全体の５割強を占め、当遺跡を代表する石器となっている。この他、礫器製作に関連する堆積岩類の剥片が 300 点以上出土している点も見逃せない。礫器の多さや、礫器の製作に関わる剥片等が多い点は鴻ノ木遺跡に類似する要素である。

一方で、剥片石器、とくに石鏃の少なさは、鴻ノ木遺跡や亀山市大鼻遺跡をはじめとする県内の諸遺跡や、サヌカイト製剥片石器を多く保有する大和高原の縄文早期遺跡とは大きく異なっている (14)。

②石材の利用傾向（第４・５表）

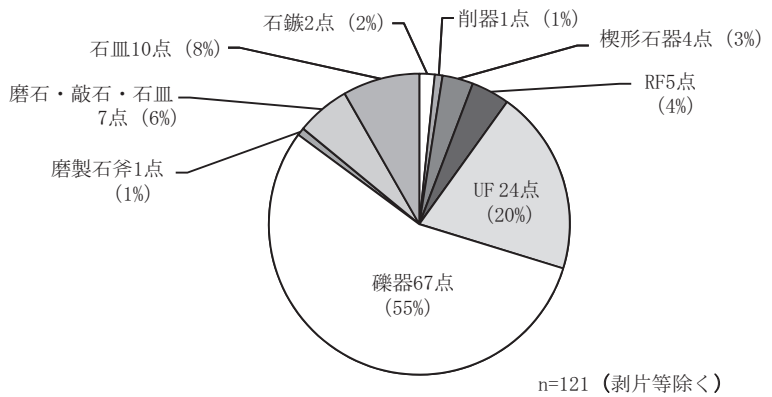
野添大辻遺跡の石器は、大半が遺跡の付近を流れる宮川で採取できる石材を用いている (15)。同じ石材は更新統の層中にも産するが、風化が著しく石器の石材には適さない。また、当地の基盤岩である泥質片岩・緑泥片岩は用いられていない。

石材の利用傾向は、剥片石器がチャート・二上山サヌカイト、礫石器では礫器が砂岩・泥岩、磨石・敲石・石皿類が花崗岩・凝灰岩・砂岩、磨製石斧が比重の重い緑色岩類を用いており、器種ごとの石材の使い分けは明瞭である。楔形石器も泥岩の小礫を用いており、礫石器的な色彩が強い。

石材のうち、砂岩・泥岩は様々な石質のものがあり、それぞれ２～３種に細分できる。やや粗粒の砂岩から、珪質で緻密な泥岩まで幅広く用いられ、石の硬軟を反映して礫の形状は亜角礫から円礫まで幅がある。これらはいずれも宮川河床で確認できることから、同じ岩帯で産するものとみられる。

注目すべきは、こうした石質や礫形状の違いを問わず礫器が製作されている点であり、剥片石器類が、厳密な石材選択によるのとは対照的である。この点は礫器の機能や性格を考える上で考慮しなければならない。

溶結凝灰岩としたもの（409）は、表面が脂肪光沢を有する肌色で、破面は黒灰色を呈する。肉眼観察によれば、三河地域に広く分布し、愛知県設楽地方に産する「松脂岩もしくは凝灰質頁岩」(16) に類似している (17) が、出土点数が少なく注意を喚起する程度にとどめたい。在地石材の可能性もあろう。



n=121（剥片等除く）

第 27 図　野添大辻遺跡の石器組成

第３表　縄文遺構出土石器集計表

遺構番号	石鏃	削器	楔形石器	RF	UF	礫器	磨製石斧	磨石･敲石･凹石	石皿	剥片･砕片	石核	その他
SZ10			1			2				35		
SK11										1		
SK12										7		
SZ13					3			1		16		
SK14						2				5		
SK15					1					4		
SK16												
SZ17				1		1				14		
SZ18					1	2				4		
SK19										2		
SK20				1		1				1		
SH22			1			1						
SZ24						1		1				
SK26						1				4		
SK27					1	1				2		
SK29						1				2		
SK30					1					1		
SK32										5		
SF33						9			4	8		4
SK35										3		
SF36					3	3				27		
SF37										4		
SK41										1		
SH42					1	1						
SZ43						1						
SF44				1	1	2		1		19		
SK45			1			3			1	14		2
SF46									1	4		
SK47					1	2				3		
SH48						1		2				
SH50		1				2						
SZ51												
SF53					4	4				30		
SF57					1	1				6		
SF58										1		
SF59						1				3		
SF60					1	2				20		1
SF61					1	6			1	18		
SF62						1				4		
SF63						1				2		
ピット	1					4				21		
包含層				2	1	10		2	1	25		2
表土・排土	1		1		3		1		2	2		
小計	2	1	4	5	24	67	1	7	10	318	0	9
計(石鏃～石皿)												121
総計(剥片等も含む)												448

※SZ23・SK25・SZ31・SK38・SH39・SK40・SH64・SK67・SF97は石器の出土なし

第４表　石材分類表

産地の位置	成因分類	石材名（岩石名）	特徴	利用状況	
				製品	その他
近距離	火成岩	花崗岩	中粒の花崗岩。優白色。主要造岩鉱物は石英が多く、黒雲母・角閃石が少量。石英の平均粒径が１㎜、黒雲母0.5 ㎜、角閃石が 0.5×1 ㎜、長石が鉱物の間を充填的に埋める。	敲石･磨石凹石･石皿	
（宮川で採取）	火山砕屑岩	凝灰岩A	石基が暗緑色と白色をなす。異質岩片（チャート）を含む。斑晶は石英 1×1 ㎜＜不定形な長石 2×1 ㎜、黒雲母 0.5×0.5 ㎜、角閃石 2×0.5 ㎜、礫岩状のもの	石皿	
		凝灰岩B	白色の凝灰岩、目立つ鉱物なし。緻密なもの	（+）	剥片･砕片
		溶結凝灰岩	乳白色、破面は黒色。脂肪光沢を持ち、貝殻状剥片を産しやすい（渥美などに多くみられるものと類似、搬入石材の可能性あり。剥片石器の石材か）	（+）	剥片･砕片
	変質岩（火成岩起源）	緑色岩塩基性岩	緑色岩類や塩基性の半深成～深成岩を総称。肉眼観察では細分が困難	磨製石斧	
	堆積岩	砂岩A	中～細粒の砂岩、優白色、２×３㎜の泥岩・長石片を含む。泥岩片は不定形。	（+）	剥片･砕片
		砂岩B	細粒～極細粒の砂岩、優白色、まれに泥岩チップを挟む。１×１㎜の石英粒が目立つ。	敲石･磨石石皿･礫器	剥片･砕片
		泥岩A	風化の少ない、構造は塊状で、角礫状のものが多い。暗灰色。	礫器	剥片･砕片
		泥岩B	白色に風化する面が特徴、葉理が目立つものが多い。	楔形石器礫器	剥片･砕片
		泥岩C	やや珪質で風化が少ない。	礫器	剥片･砕片
		チャート	緑色を呈するもの。	（+）	剥片･砕片
近距離	火成岩	サヌカイト	二上山産	石鏃､削器	剥片･砕片

第５表　器種別石材利用状況

	石鏃	削器	楔形石器	ＲＦ	ＵＦ	礫器	磨製石斧	磨石・敲石凹石	石皿	剥片・砕片	石核	その他
花崗岩								3	4			2
凝灰岩A						2			2			
凝灰岩B										6		
溶結凝灰岩					1							
緑色岩塩基性岩					1		1			3		
砂岩A						1				10		1
砂岩B			1	1	5	34		4	4	86		4
泥岩A				2	2	3				9		
泥岩B			2		10	18				172		1
泥岩C			1	1	4	9				16		
チャート				1	1					12		1
サヌカイト	2	1								4		
計	2	1	4	5	24	67	1	7	10	318	0	9

③出土石器

石鏃（401・402）　出土した２点をすべて図示した。401は小型の石鏃でサヌカイト製。排土から出土した遊離遺物であり、早期のものとは即断できない。両面とも中央に素材剥片の剥離面を残し、縁辺のみに調整を施す。側縁は直線に近く、基部は緩やかに抉りを入れ、凹基とする。402は基部と先端が折損しており、全形は不明。側縁はほぼ直線的で、石鏃としてはやや大型のものであろう。

削器（403）　１点のみ。403はサヌカイト製で、立会Ｃ地区出土。自然面が背面に残る横長剥片を素材として、腹面側から剥離し片刃の刃部を作る。刃部角度は、素材の薄さに規制され、約30°と浅い。

楔形石器（404 ～ 406）　両極打撃によって、対向する２辺ないし４辺に階段状の剥離痕をもつもの。４点中３点を図示した。いずれも砂岩や泥岩の円礫を原材とする。自然面を片面のみに残す矩形のもの（404）と打欠石錘状のもの（405・406）がある。

RF、UF（407 ～ 413）　二次加工ある剥片、使用痕のある剥片である。計29点出土し、代表的なものを図化している。ＲＦは５点ある。413は厚さのあるチャート剥片の長辺に、片面から剥離を加えたもので、削器とすべきかもしれない。この他、砂岩等の剥片を利用したものが多い。

ＵＦは24点ある。砂岩・泥岩・緑色岩等の貝殻状剥片の末端に微細な刃こぼれが見られるものを抽出したが、これらに明確な使用痕、すなわち刃部の潰れや擦痕は認められない。鈴木康二氏は、剥片末端の微細な刃こぼれが、剥片剥離時の偶発的剥離を含む可能性もあるとして、ＭＦ（微細剥離を有する剥片）の概念を提唱しているが[18]、ここでいうＵＦは、まさに氏のいうＭＦに相当するものである。

なお、ＵＦの素材となった剥片は、礫の表皮を残す点は共通しているものの、平面形状は様々であり、定型的な技法により得られたものとは言い難い。

以上のことから、砂岩や泥岩の剥片を道具として積極的に用いる意識は乏しいとみるべきであろう。

礫器（414 ～ 432）　67点出土し、うち19点を図示した。砂岩・泥岩の円～亜角礫に直接打撃により刃を付けたもので、刃部は基本的に片刃である。大きさは、片手での把握に適した拳大のものが多い。

既往の研究では、刃部形状に着目した詳細な分類がなされているが[19]、本遺跡の礫器は刃部が鋭角を呈するもののほか、刃部が不明確なもの、石核状を呈するものなどがあり、厳然たる区分が難しい。ここでは、全体の形状により４大別する程度にとどめ、詳細な分析は今後の課題としておく。

Ａ：刃部角度が鋭角のもの（431・432など）。刃部は２～３単位の剥離によって弧刃となる。自然面が大きく残されるものが多い。

Ｂ：多方向からの加撃で刃部が多方向となり、石核状を呈するもの（424・426など）。自然面は比較的小さいかまったく残らない。

Ｃ：扁平なもの（414）。量的には少ない。

Ｄ：刃部角度が直角に近いもの（416・422）。礫を半裁したようなもの（分割礫状）も含める。

石材には、比較的細粒の泥岩Ｂ、砂岩Ｂが多用されるが、石質は様々である。石質が緻密な泥岩Ｃを用いたもの（422）は、きわめて鋭利な刃部が形成されるが、粗粒の石材はやや刃部が鈍くなる。

礫器は使用により刃部の潰れや微細な剥離といった使用痕が生じるとされるが[20]、肉眼観察による限り、使用痕はまったく認められない。軟質の加工対象に用いたか、使用期間が短い、あるいは単に敲石として用いた自然礫が割れたものも含まれていよう。

磨製石斧（433）　排土から回収された１点のみである。押型文期の磨製石斧は、幅広扁平であることが知られているが[21]、本例は乳棒状を呈することから後代のものであろう。石材は緑色岩で、側縁に敲打、全面に研磨がみられる。刃部は折損するが、破面には補修のための研磨痕が認められる。

敲石、凹石、磨石（434 ～ 439）　７点あり、６点を図示した。いずれも複数の用途に用いられており、機能を限定しがたいことから、一括して取り扱う。

434はいわゆる石鹸形磨石である。四面とも使用により磨滅するほか、主面（幅広の使用面）の中央には敲打痕が認められる。また両端部を剥離し、礫器として用いた可能性がある。435は凹石。両主面のほか、側面にも打撃による凹みがみられる。436・437・438は磨石だが、側縁に敲打痕が集中している。438は磨面に線状の敲打痕が残る。

石皿（440 ～ 449）　10点出土し、すべて図示した。炉穴の焚口から出土したもの（440 ～ 443）が多い。

いずれも扁平な川原石をそのまま用いている。磨面は、自然面に対してやや平滑となる程度で、凹みができるほどのものはない。また、台石として使われた可能性があるのは446のみである。これら石皿・磨石類は、残存デンプン粒分析により、使用の有無や加工対象の特定を図る必要があろう。

剥片、砕片　チャートやサヌカイトの剥片は極めて少なく、石核も出土していないことから、当地でこれら剥片石器の製作が積極的に行われたとは考えられない。一方で、砂岩・泥岩の剥片や砕片が300点あまり得られている。

礫器やＵＦの項ですでに述べたように、野添大辻遺跡では砂岩・泥岩製の剥片石器がないこと、剥片は定型的な剥片剥離技法によるものでないこと、ＲＦ・ＵＦは、不定形剥片を転用した偶発的なものであると考えられることなどから、これら剥片・砕片は、礫器の製作時に生じた残滓であると判断した。同様の理由から、これら石材で石核状を呈するものは、すべて礫器に含めている。

以上のような、礫器をめぐる技術的組織を踏まえた上で、石器組成の評価や地域間の比較を行う必要があろう。この点は本書の最後で再論したい。

（櫻井）

註

（1）山田猛「押型文土器の型式学的再検討」『三重県史研究』4、1988年、および山田猛「大鼻式・大川式の再検討」『研究紀要』2、三重県埋蔵文化財センター、1993年。

（2）矢野健一「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌』78－4、日本考古学会、1993年、および矢野健一「押型文系土器（大川式・神宮寺式土器）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、2008年。

（3）山添村教育委員会『大川遺跡』1989年。

（4）奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『鵜山遺跡』2006年。

（5）文様構成c1類45点の内訳は、3段の文様構成が明らかなもの17点、口縁部横位施文のみ確認28点。

（6）註4前掲。

（7）三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡（下層編）』1998年。

（8）大川式の地域性について、山田猛氏の御教示を得た。

（9）註6前掲書にて、山田猛氏が提唱した類型をさす。

（10）刻みに関する技術的考察は下記文献に詳しい。
山田猛「（3）考察」『花代遺跡（A・B地区）発掘調査報告書（遺物編）』青山町教育委員会、2000年。

（11）註4前掲書中では「押引刺突」としているが、本遺跡資料の観察による限り、口縁端部の刻みと同じく、刺突と側面押圧を同時に行う手法であると考えられる。

（12）山田猛「神村論文を読んで－三重県から－」『利根川』24・25号、利根川同人会、2003年。

（13）註6前掲。なお、石器の器種認定および石器全般について、鴻ノ木遺跡の石器を整理された大下明氏（雲雀丘学園中・高等学校）の御教示を得た。

（14）大下明「近畿地方と東海地方西部における押型紋土器期の石器群について」『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会、2002年。

（15）石材の分類および同定については、愛知県埋蔵文化財センター堀木真美子氏の御教示を得た。

（16）小島隆「東三河を中心とした石鏃石材の分布（1）」『三河考古』7、1994年／小島隆「東三河を中心とした石鏃石材の分布（2）」『三河考古』8、1995年。

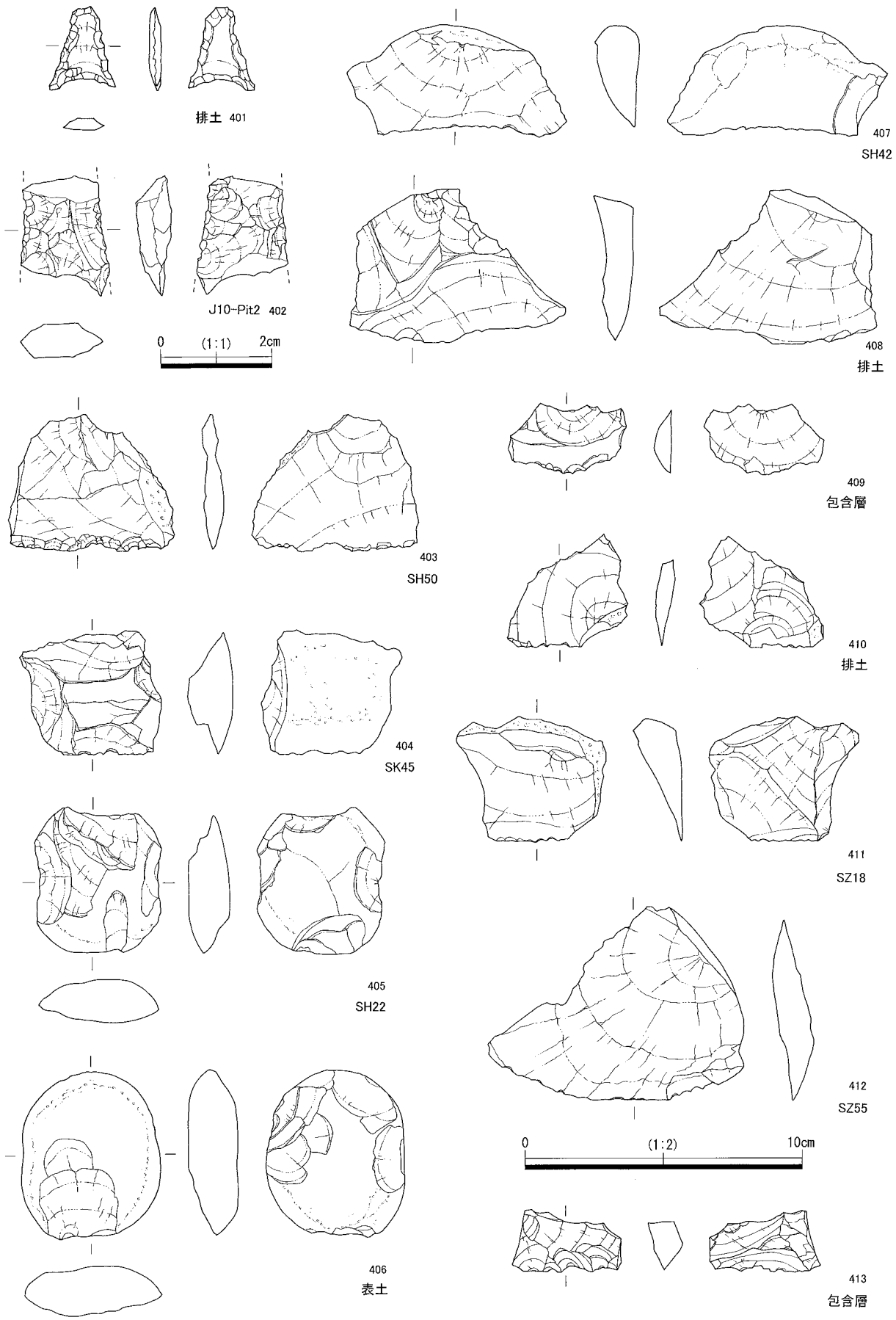
（17）堀木真美子氏の御教示による。また、田村陽一氏の御教示によれば、同種の白色系石材は松阪市粥見井尻遺跡など、伊勢湾西岸や志摩地域の旧石器、縄文時代遺跡で散見されるという。今後注意が必要となろう。

（18）鈴木康二「縄文石器研究の覚書－「器種分類」について考える－」『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会、2002年。

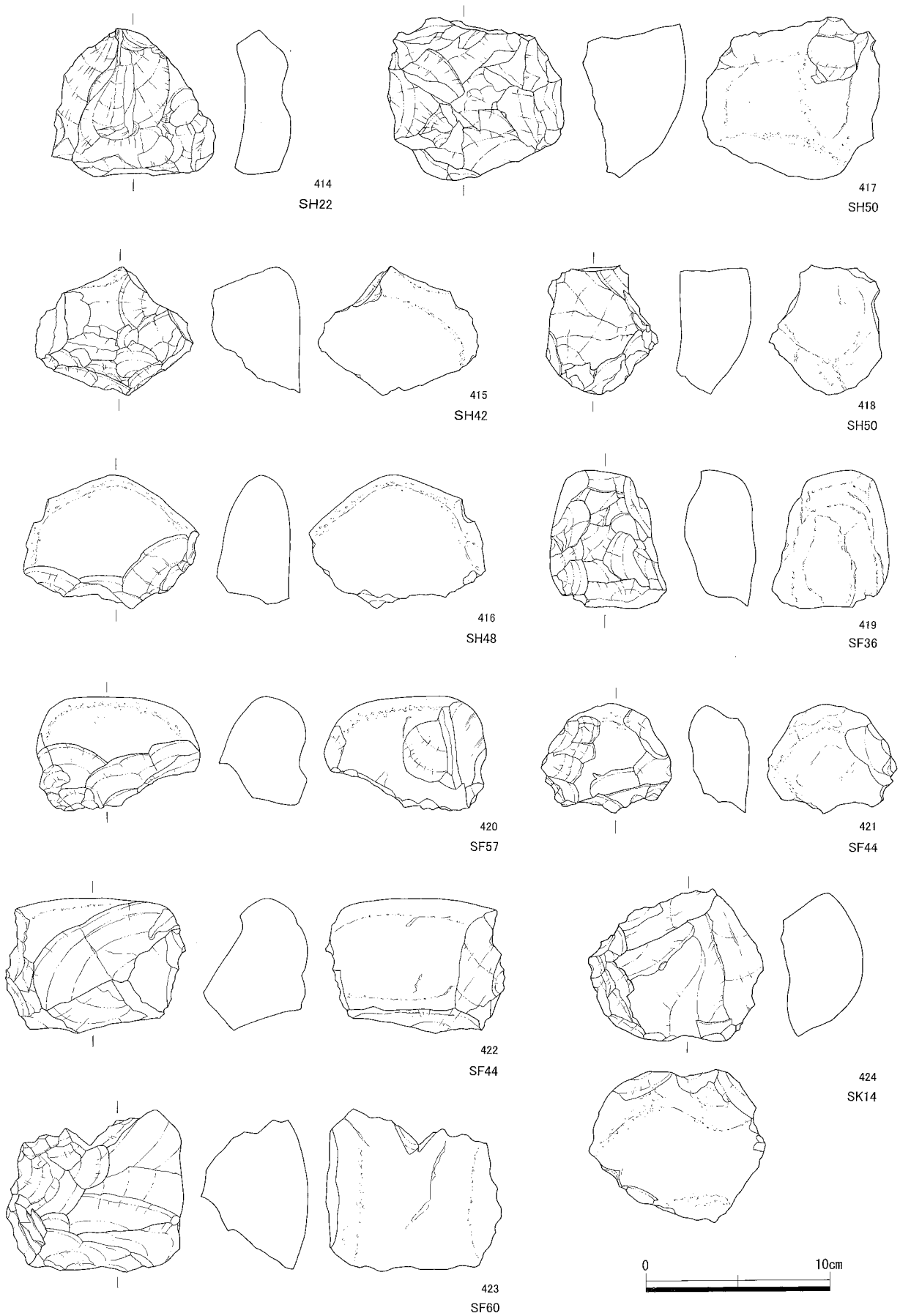
（19）萩幸二「縄文早期の大分平野出土の礫器に関する一考察」『利根川』24・25号、利根川同人会、2003年。

（20）池谷勝典「礫核石器の使用痕」『利根川』24・25号、利根川同人会、2003年。

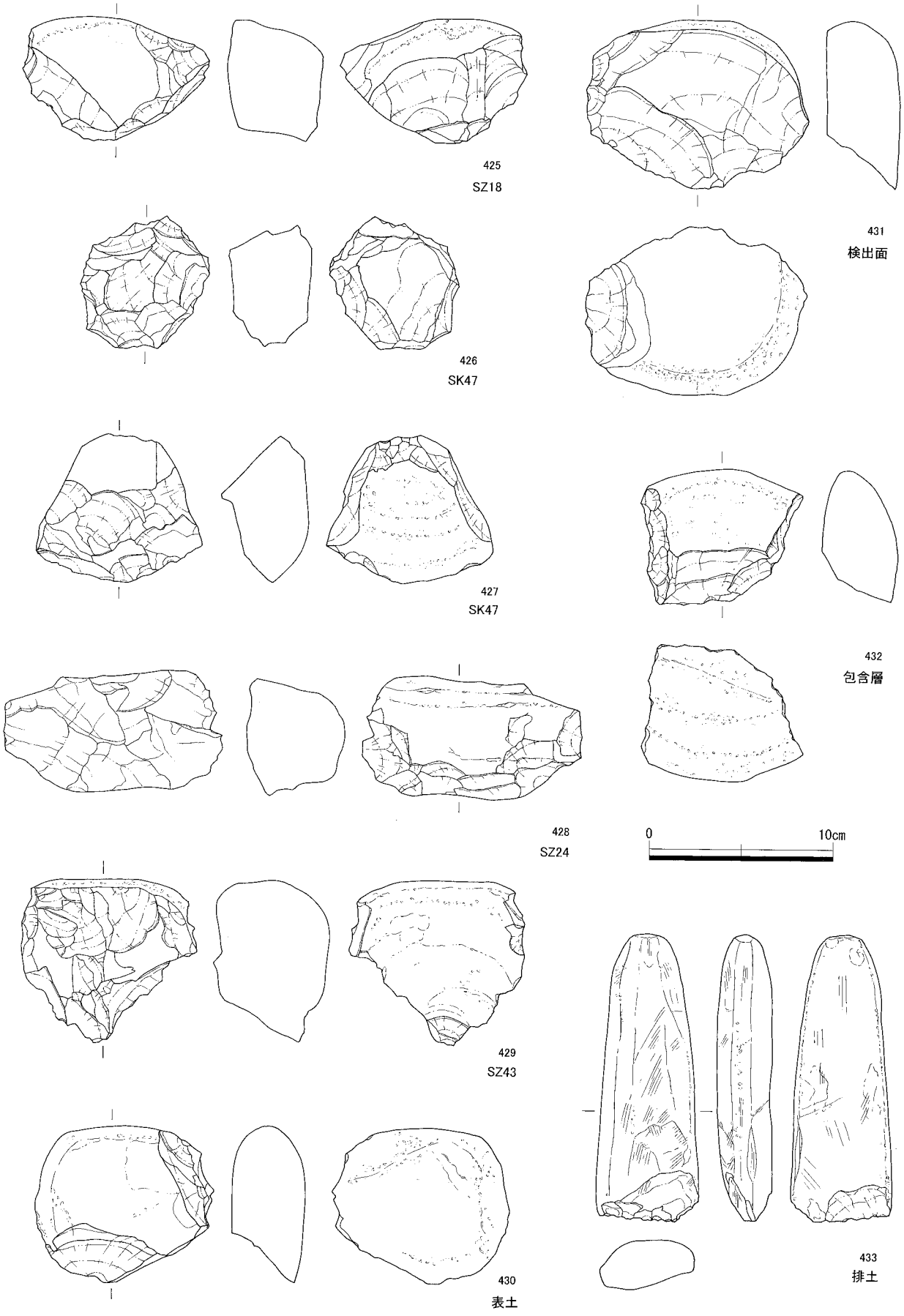
（21）註14前掲。



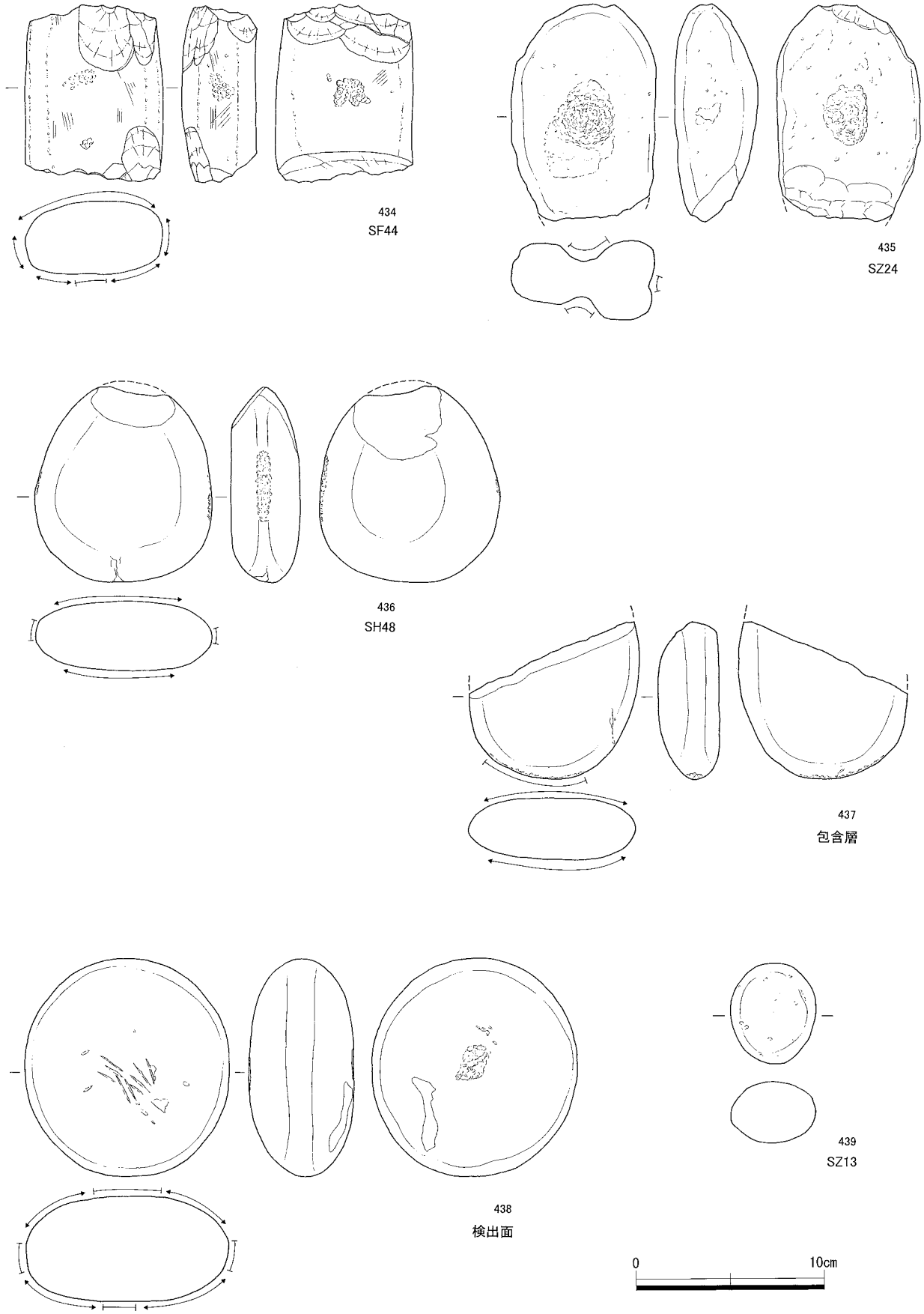
第 28 図　出土遺物実測図 10　石器①（401・402 は 1：1、その他 1：2）



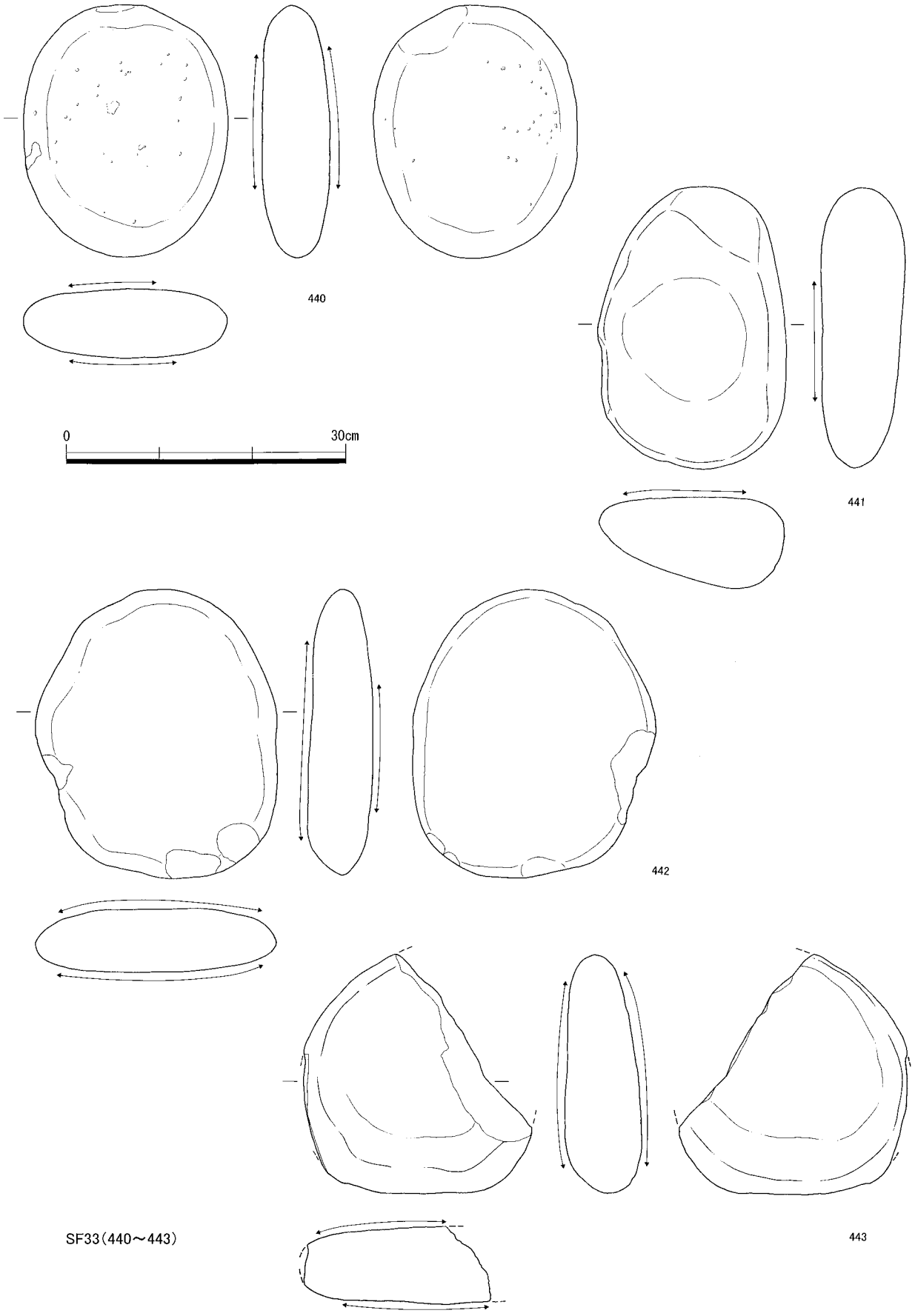
第 29 図　出土遺物実測図 11　石器② (1 : 3)



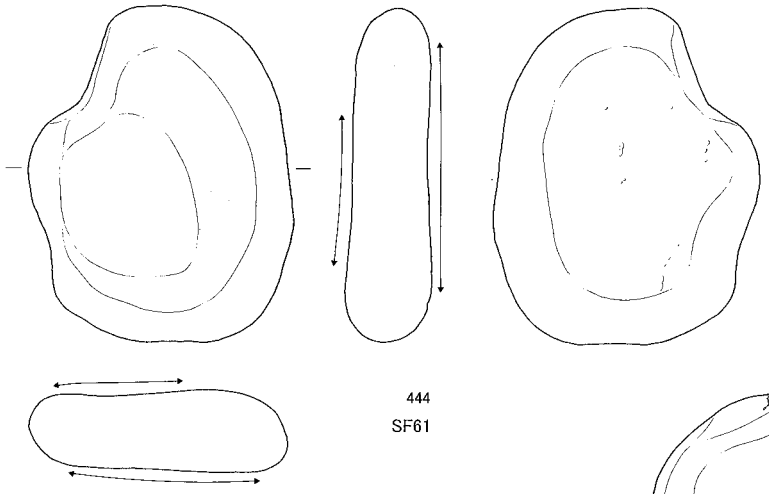
第 30 図　出土遺物実測図 12　石器③ (1 : 3)



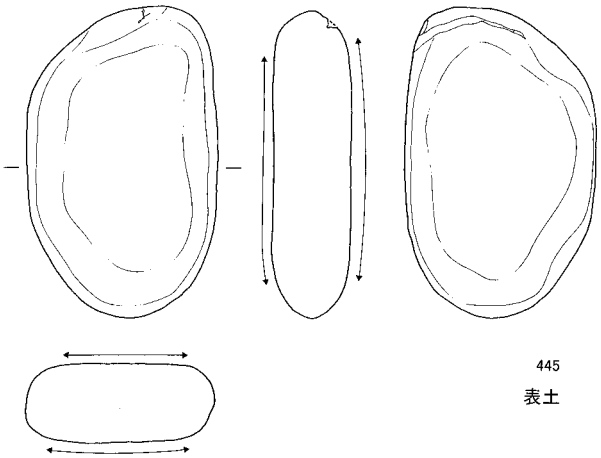
第 31 図　出土遺物実測図 13　石器④ (1 : 3)



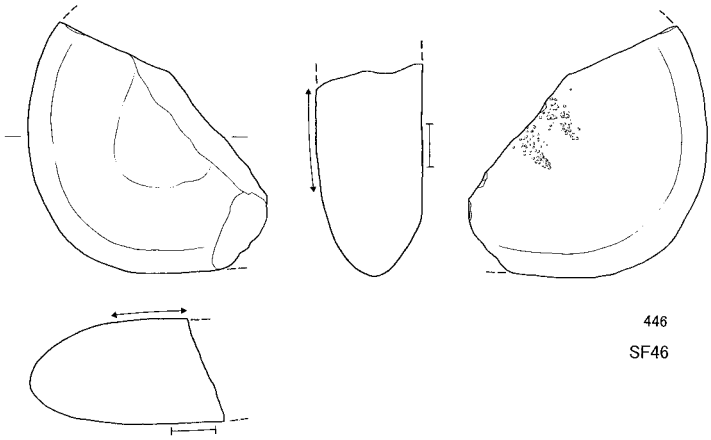
第 32 図　出土遺物実測図 14　石器⑤ (1：6)



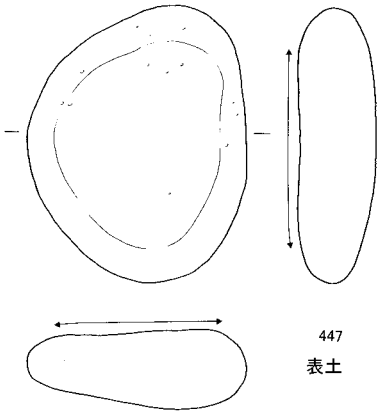
444
SF61



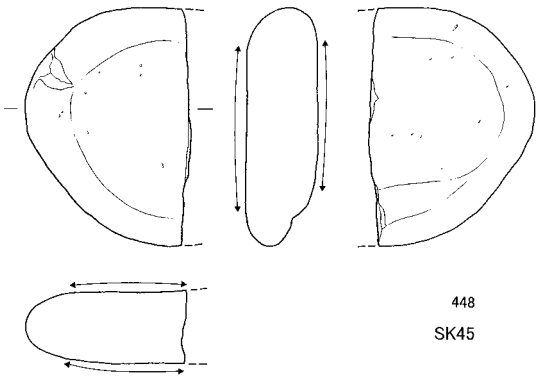
445
表土



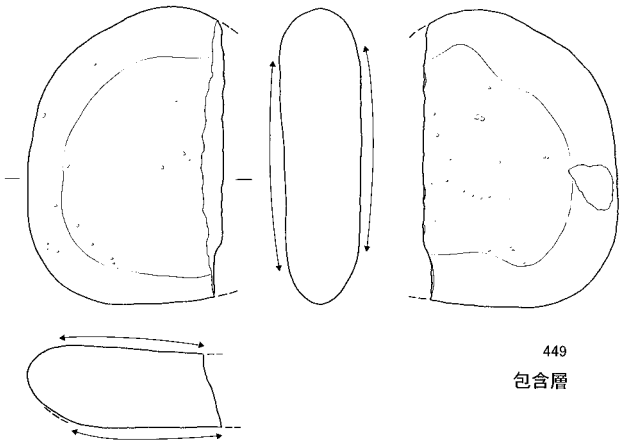
446
SF46



447
表土



448
SK45



449
包含層

第 33 図　出土遺物実測図 15　石器⑥ (1 : 6)

3．中・近世の遺物

遺物の時期は平安時代末～江戸時代後期まで及ぶが、室町時代のものが中心である。特に南伊勢系土師器や瀬戸産陶器が数多く見られた。以下に遺構種別ごとに報告する。

（1）石組遺構出土遺物（第 34 図）

ＳＫ１出土遺物（450 ～ 466）　450 ～ 455・459 は土師器鍋、456 ～ 458 が土師器羽釜、460 は土師器小皿、461 は土師器皿である。これらは南伊勢中世（以下、「中世」とする）Ⅱａ～Ⅲｂ期[1]のものであるが、遺構の時期は 15 世紀前半と考えられる。

462 ～ 464 は瀬戸産陶器の卸皿であり、古瀬戸後Ⅲ期のものである[2]。463・464 の見込みには格子状の卸目があり、底部外面には回転糸切痕が残る。

465 は鉄製釘。466 は鉄製品で形態は環状を呈し、断面は楕円形となる。

（2）井戸出土遺物（第 34・35 図）

ＳＥ 28 出土遺物（467 ～ 476）　473 は南伊勢系土師器鍋の中世Ⅲｂ期のものである。遺構の時期は 15 世紀前半頃と考えられる。

以下の遺物は混入品とみられる。467 は南伊勢系の土師器皿で、中世Ⅲ期のものである。468 ～ 471 は山茶碗で、468 は渥美型３ａ型式[3]、469・470 は渥美型３ｂ型式、471 は尾張型第６型式である[4]。472 は瀬戸産陶器の皿か。底部には回転糸切痕が残る。474・475 は常滑産陶器の甕で同一個体とみられる。口縁端部が欠損するが、外反するものとみられる。常滑窯編年４型式のものである[5]。476 は渥美産陶器の甕である。体部には格子目叩きがみられ、叩きを施した後にナデが行われている。

ＳＥ 34 出土遺物（477 ～ 501）　477・478 は土師器小皿、479 ～ 484 は土師器皿、485・486・497 ～ 500 は土師器鍋、501 は土師器羽釜である。いずれも南伊勢系で、中世Ⅲｂ期のものである。

487 ～ 490 は山茶碗でいずれも混入品である。487 は尾張型第６型式、488 は渥美型３ａ型式、489 は渥美型３ｂ～ｃ型式、490 は渥美型２ｂ型式である。

491 は瀬戸産陶器の皿か。外面底部には回転糸切痕が残り、内面には灰釉が刷毛塗りされる。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期のものである。494 は瀬戸産陶器の天目茶碗であり、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期のものである。492 は常滑産陶器の壺で、口縁端部が玉縁状になる。493 は青磁碗で 13 世紀代のものであろう。

495 は土師質の土錘である。496 は鉄製品で棒状を呈している。

遺構の時期は 14 世紀中葉～ 15 世紀初頭と考えられる。特に、479・481 ～ 483 の土師器皿、498 の土師器鍋はほぼ完形の状態で出土しており、井戸廃絶時に一括廃棄されたものと考えられる。

ＳＥ 95 出土遺物（502・503）　いずれも南伊勢系の土師器鍋で、中世Ⅲｂ期のものである。

（3）土坑出土遺物（第 35・36 図）

ＳＫ５出土遺物（504・505）　504 は南伊勢系の土師器小皿で、中世Ⅲ期のものである。505 は白磁碗である。

ＳＫ６出土遺物（506・507）　いずれも南伊勢系の土師器皿であり、中世Ⅲ期のものである。

ＳＫ９出土遺物（508 ～ 510）　508 は土師器小皿、509・510 は土師器皿であり、いずれも南伊勢系で中世Ⅲ期のものである。

ＳＫ 49 出土遺物（511・512）　いずれも南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅳｂ期のものである。

ＳＫ 52 出土遺物（513 ～ 516）　513 は土師器の茶釜蓋で、摘み部は欠損する。

514 は瀬戸産の刷毛目碗で登窯第９小期のものである。515・516 は肥前波佐見産の染付碗である。515 は 18 世紀後半～ 19 世紀初頭、516 は 18 世紀中葉～後半のものである[6]。

ＳＫ 56 出土遺物（517）　瀬戸美濃産陶器の擂鉢で、16 条１単位の擂目が認められる。内面底部には放射状擂目が施される。大窯第１～２段階のものである。

ＳＫ 68 出土遺物（518）　南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅳａ期のものである。なお、遺構の時期はこの他の出土遺物から近世と考えられる。

ＳＫ 69 出土遺物（519・520）　519 は山茶碗で渥美型 2b 型式とみられ混入品と考えられる。520 は南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅳｃ期のものである。

ＳＫ 73 出土遺物（521・522）　521 は土師器小皿、

522は土師器皿で、いずれも南伊勢系で中世Ⅲ期のものである。

ＳＫ74出土遺物（523）　南伊勢系の土師器皿であり、中世Ⅲｂ期のものである。

ＳＫ75出土遺物（524）　南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅲｂ期のものである。

ＳＫ76出土遺物（525～529）　525は山茶碗で渥美型３ａ型式か。526は土師器皿、527～529は土師器鍋であり、いずれも南伊勢系で中世Ⅲｂ期のもの。

ＳＫ77出土遺物（530）　南伊勢系の土師器皿であり、中世Ⅲ期のものである。

ＳＫ79出土遺物（531・532）　531は土師器皿、532は土師器鍋であり、いずれも南伊勢系で中世Ⅲａ期のものである。

ＳＫ83出土遺物（533）　南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅲｂ期後半のものである。

ＳＫ84出土遺物（534）　南伊勢系の土師器鍋であり、中世Ⅲｂ期のものである。

ＳＫ86出土遺物（535～538）　535・536は土師器鍋、537は土師器小皿、538は土師器皿である。いずれも南伊勢系で、中世Ⅲｂ期のものである。

ＳＫ87出土遺物（539）　南伊勢系の土師器皿であり、中世Ⅳ期前半のものである。

ＳＫ88出土遺物（540・541）　540は山茶碗で渥美型３ａ型式か。541は南伊勢系の土師器羽釜であり、中世Ⅲ期のものである。

（４）溝出土遺物（第36図）

ＳＤ３出土遺物（542～548）　542は土師器皿、543・544は土師器鍋、545は土師器羽釜であり、いずれも南伊勢系で中世Ⅲｂ期のものである。546・547は山茶碗で、渥美型２ａ～２ｂ期のものである。548は瀬戸産の擂鉢で、古瀬戸後Ⅳ期古段階のものである。

遺構の時期は15世紀前半～中葉と考えられる。

（５）ピット出土遺物（第36図）

土師器小皿・皿・鍋・羽釜はいずれも南伊勢系のものである。556は中世Ⅲｂ期、570は中世Ⅲｂ～Ⅳａ期である。551・553・560～563・565～568は中世Ⅲ期、564・571・572は中世Ⅳ期のものである。

555は山茶碗で尾張型第７型式のものである。569は山茶碗で渥美型２ｂ型式のものである。

550・557・559は瀬戸産陶器である。550は筒形香炉で登窯第７・８小期のものである。557は擂鉢で登窯第２小期のものである。内面底部に同心円状の擂目が見られる。559は丸碗で登窯第２段階のものである。558は美濃産陶器の片口碗で、内外面に黄釉を施すが、底部付近は露胎となる。登窯第７小期のものである。554は陶器の皿で産地は不明であるが、地元産の可能性が考えられる。19世紀のものとみられる。

549は鉄製釘であり、鍛打で頭部を形成する。

（６）その他（第37・38図）

遺構に伴わないものや、包含層出土のものを「その他」とした（573～609）。573･574は土師器小皿、575～582は土師器皿、591～603は土師器鍋、604～609は土師器羽釜である。いずれも南伊勢系で中世Ⅱｂ期～Ⅳａ期にかけてのものがある。583は青磁碗であり、体部から高台の一部が残存する。高台は削り出している。584～587は山茶碗で、584は渥美型３ｂ～３ｃ型式、585は尾張型第６型式、586は渥美型２ｂ型式、587は渥美型３ｂ型式にあたるものであろう。588は瀬戸産陶器の卸皿であり、格子状の卸目が残存する。589は板状鉄製品、590は鉄製鑿である。（小原）

註

（１）伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史資料編　考古』２、三重県、2008年。

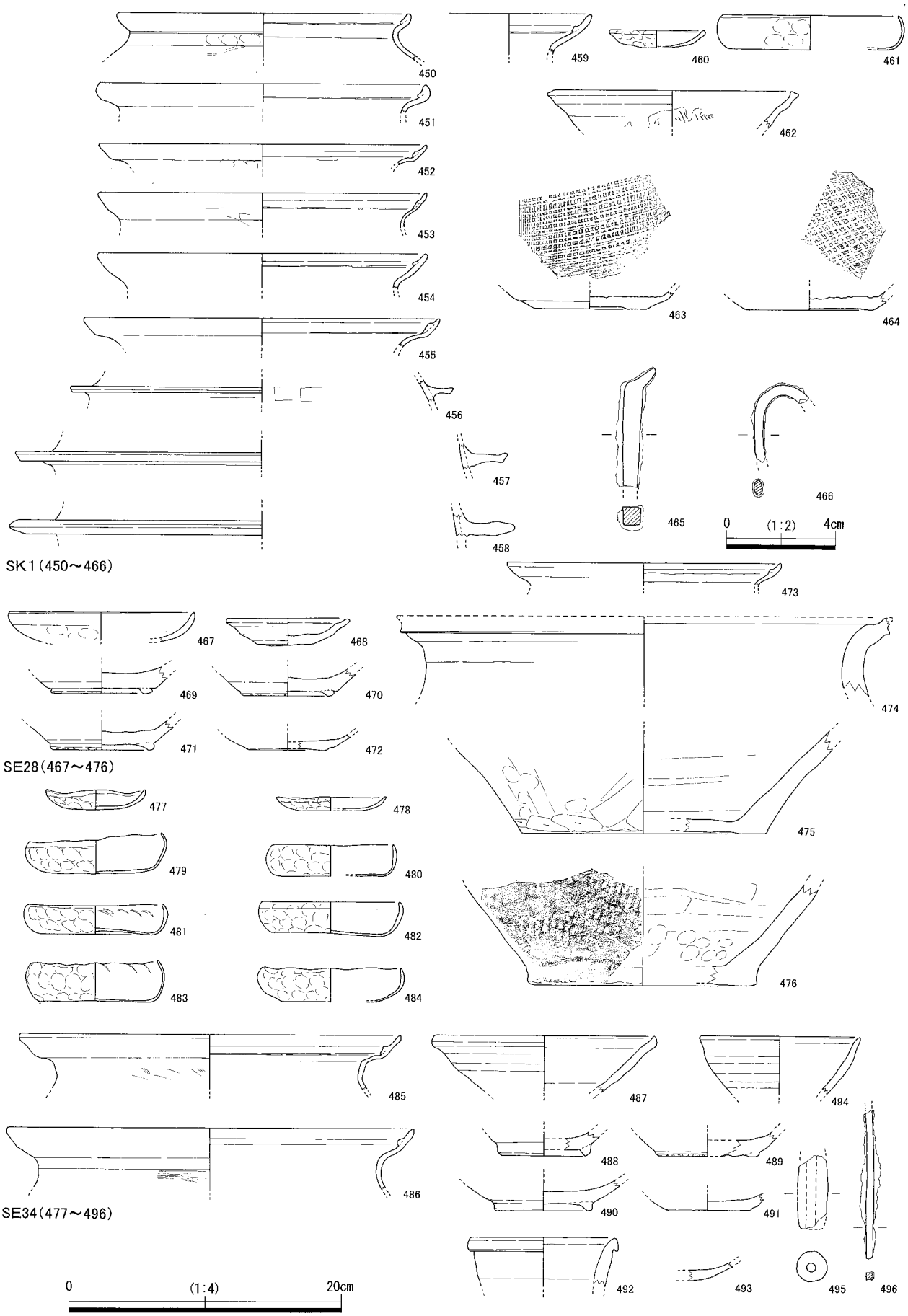
（２）藤澤良祐「総論」『愛知県史別編　窯業』２、愛知県、2007年。

（３）安井俊則「渥美窯」『愛知県史別編　窯業』３、愛知県、2012年。

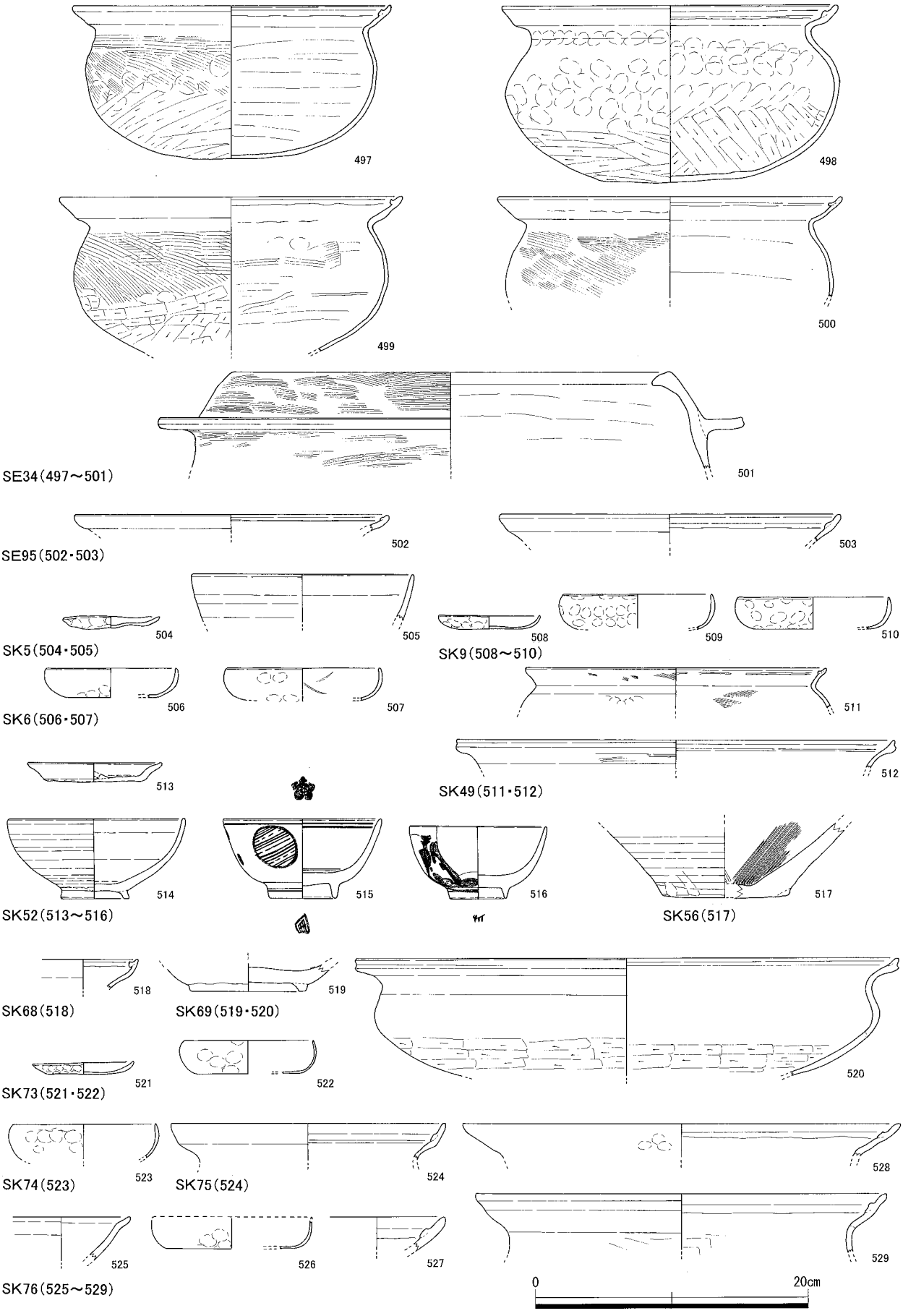
（４）藤澤良祐「山茶碗の型式編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ、瀬戸市歴史民俗資料館、1982年、および藤澤良祐「灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史別編　窯業』２、愛知県、2007年。

（５）中野晴久「常滑窯」『愛知県史別編　窯業』３、愛知県、2012年。

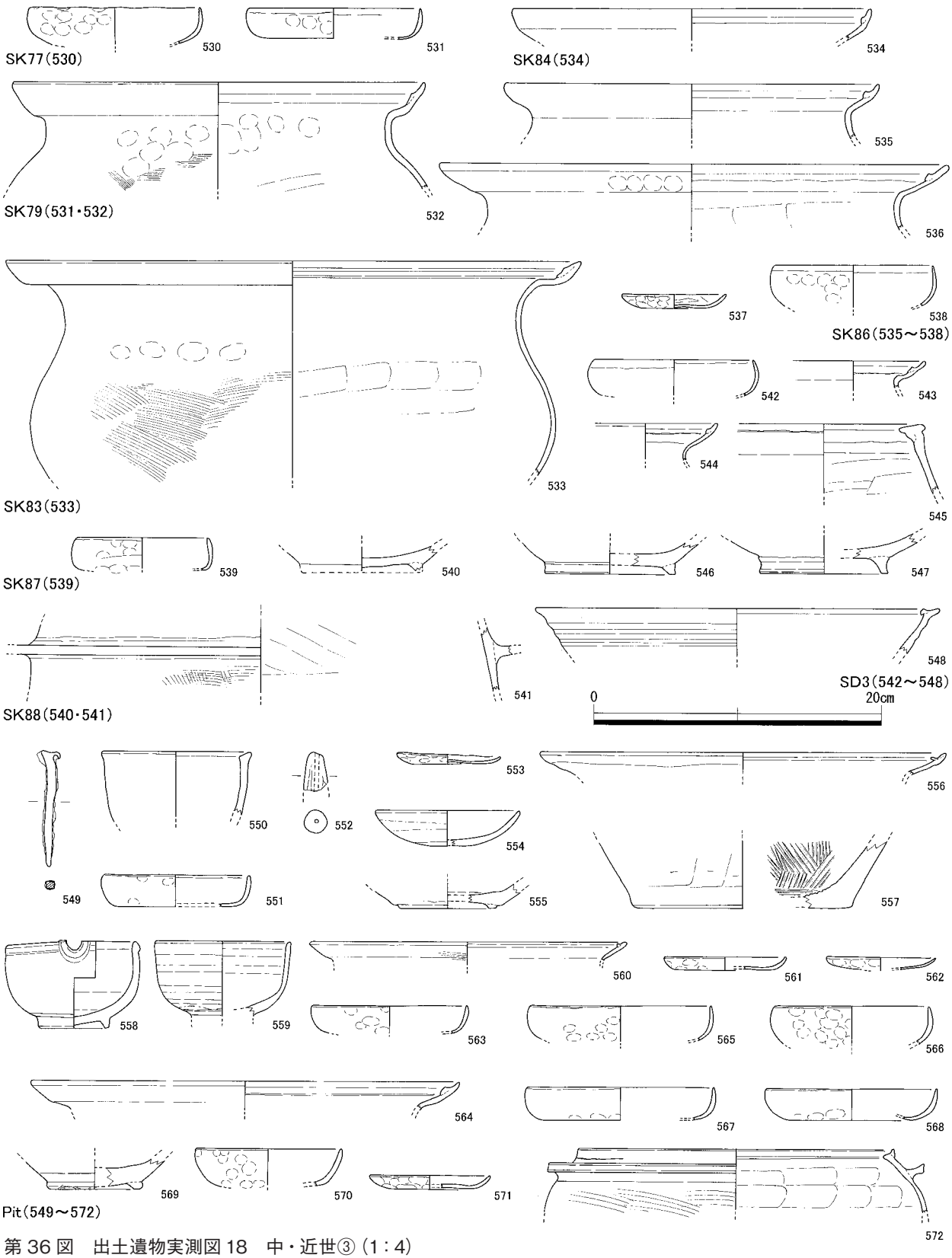
（６）九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000年。



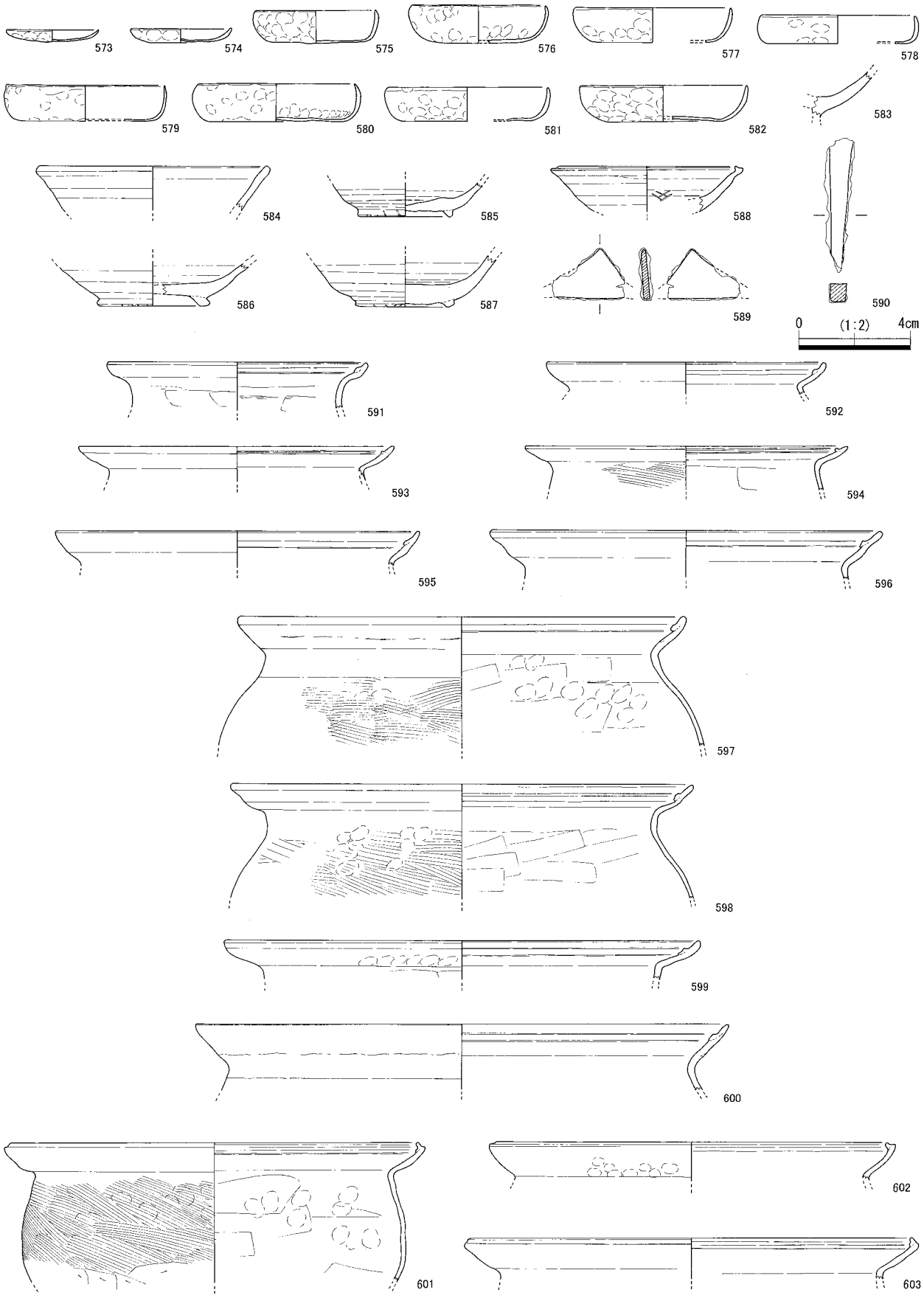
第 34 図　出土遺物実測図 16　中・近世①（465・466 は 1：2、その他 1：4）



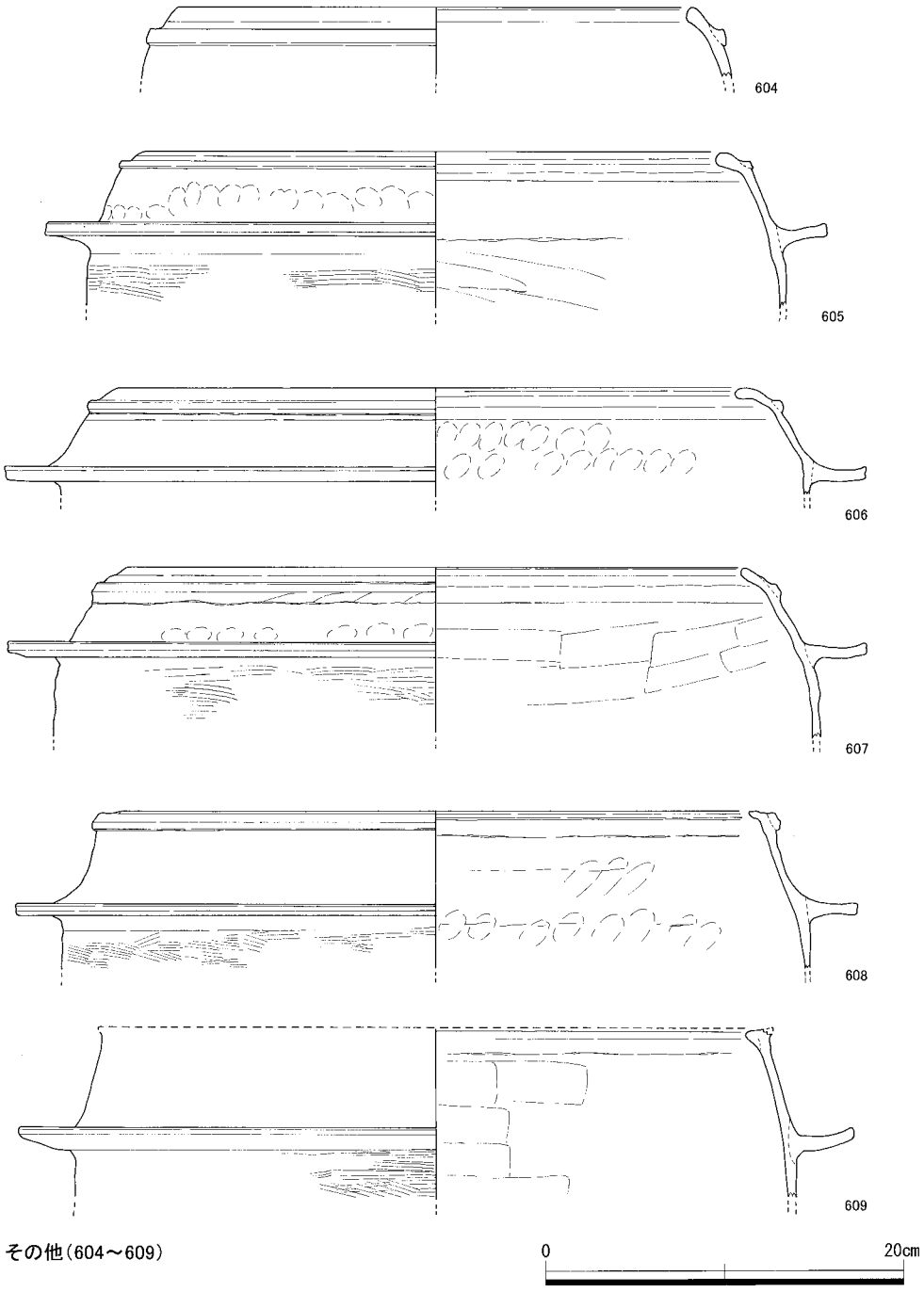
第 35 図　出土遺物実測図 17　中・近世② (1：4)



第 36 図　出土遺物実測図 18　中・近世③ (1：4)



第 37 図　出土遺物実測図 19　中・近世④ (589・590 は 1 : 2、その他 1 : 4)



第 38 図　出土遺物実測図 20　中・近世⑤（1：4）

第６表　遺物観察表（縄文時代）

縄文土器

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
1	49-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	K7,8	SH22	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状）	密		灰黄褐	
2	47-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	K7,8	SH22	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄橙	
3	49-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	K8	SH22	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		にぶい黄橙	
4	47-11	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	K7,8	SH22	口縁部：斜格子目文、頸部：刺突（円棒状）	密		黒褐	
5	47-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		黒褐	
6	47-2	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	頸部：刺突、胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
7	53-6	押型文土器	頸部片	中垣戸	K8	SH22Pit1	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密	雲母	褐灰	炭化物付着（MEMB-20）
8	50-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	K8	SH22	頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：斜格子文	やや密		浅黄	
9	47-7	押型文土器	胴下部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
10	47-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
11	47-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
12	47-12	押型文土器	胴下部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
13	49-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
14	47-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
15	47-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
16	47-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄褐	
17	49-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	K7,8	SH22	胴部：斜格子目文	密		灰黄褐	
18	49-6	押型文土器	底部片	中垣戸	K7,8	SH22	底部：市松文？	密		にぶい黄橙	
19	49-7	押型文土器	底部片	中垣戸	K7,8	SH22	底部：市松文？	密		にぶい黄橙	乳頭状
20	39-7	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部:刻み（D字形）、口縁部:市松文、頸部:刺突（竹管状）	やや密		黒褐	
21	40-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（ヘラ状）	密		灰黄褐	
22	40-5	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（ヘラ状）	密		褐	
23	43-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密	雲母	灰褐	
24	39-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	やや密		灰黄褐	
25	41-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み（D字形）、口縁部：刺突	密		にぶい黄褐	
26	42-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密	雲母	灰黄褐	
27	43-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み？、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄褐	
28	42-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：刺突（ヘラ状）	密	雲母	にぶい黄橙	42 と同一か
29	42-5	押型文土器	頸部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状、下方から）	密		褐	天地不明確
30	42-6	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J11	SH39	口縁部：市松文、頸部：刺突（円頭のヘラ状）	密	雲母	にぶい黄褐	
31	40-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁部：市松文	密		黒褐	
32	53-7	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J11	SH39	口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状）	密		褐灰	炭化物付着（MEMB-21）
33	42-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁部：市松文	密		にぶい黄褐	
34	39-6	押型文土器	頸部片？	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状）	やや密		灰黄褐	
35	41-2	押型文土器	頸部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状、浅い）	密		灰黄褐	
36	42-4	押型文土器	頸部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄橙	
37	42-11	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文または斜格子目文	密		灰黄褐	
38	43-5	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状、下方から）、胴部：市松文	密	雲母	褐	
39	42-9	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		黒褐	
40	40-6	押型文土器	口縁～胴部片	中垣戸	J11	SH39	口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰褐	
41	40-8	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J11	SH39	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰黄褐	
42	42-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SH39	口縁～頸部：刺突（ヘラ状）	密	雲母	にぶい黄橙	28・30 と同一か
43	43-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密	雲母	黒褐	
44	43-9	押型文土器	胴部片	中垣戸		SH39	胴部：市松文	密	雲母	灰褐	
45	43-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密	雲母	橙	
46	41-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
47	40-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		浅黄橙	
48	41-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		灰黄褐	
49	41-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
50	43-7	押型文土器	胴部片	中垣戸		SH39	胴部：市松文	密	雲母	灰黄褐	
51	42-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		灰褐	
52	43-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：方格子目文？	密	雲母	にぶい黄橙	
53	41-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		黒褐	
54	40-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
55	41-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
56	40-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		灰黄褐	
57	41-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		灰黄褐	炭化物付着
58	44-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
59	44-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
60	39-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	やや密	雲母	にぶい黄褐	
61	39-9	押型文土器	胴下部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	やや密	雲母	にぶい黄橙	
62	43-1	押型文土器	胴下部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
63	43-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：方格子目文？	密		灰黄褐	
64	42-12	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SH39	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
65	42-8	押型文土器	底部片	中垣戸	J11	SH39	底部：市松文	密		にぶい黄橙	
66	39-10	押型文土器	底部片	中垣戸	J11	SH39	底部：方格子目文？	やや密	雲母	にぶい黄橙	尖底状
67	49-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J10	SH42	口縁端部：刻み、口縁部：山形文	密		にぶい褐	
68	44-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SH42	胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
69	44-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SH42	胴部：方格子目文？	やや密		黒褐	
70	44-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SH42	胴部：市松文	やや密		黄褐	
71	49-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SH42	胴部：市松文？	密		にぶい黄橙	
72	44-6	押型文土器	胴～底部片	中垣戸	J9	SH42	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
73	48-6	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H15	SH50	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状、羽状）	密		にぶい黄褐	
74	48-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H15	SH50	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄橙	
75	48-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H14	SH50	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい褐	
76	54-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H14	SH50	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（竹管状）	密	雲母	黒褐	
77	48-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	H14	SH50	胴部：方格子目文？	密		にぶい褐	
78	48-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	H14	SH50	胴部：市松文？	密		灰黄褐	
79	48-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SH50	胴部：市松文	密		にぶい褐	
80	49-9	押型文土器	胴部片	中垣戸		SH50	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
81	49-11	押型文土器	胴部片	立会Ｃ		SH50	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
82	48-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SH50	胴部：市松文	密		にぶい橙	
83	48-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SH50	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
84	49-10	押型文土器	胴部片	立会Ｃ		SH50	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
85	48-7	押型文土器	胴下部片	中垣戸	H15	SH50	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
86	48-4	押型文土器	底部片	中垣戸	H14	SH50	底部：市松文？	密		にぶい褐	乳頭状
87	53-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I14	SH48	口縁端部：刻み（竹管状）、口縁部：刺突（竹管状）、胴部：市松文	密	雲母	黒褐	補修孔あり
88	44-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I14	SH48	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）、市松文	やや密		にぶい黄橙	
89	44-9	押型文土器	頸部片	中垣戸	I14	SH48	口縁部：市松文	やや密		黒褐	
90	46-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I14	SH48	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（竹管状）、市松文	密		灰黄褐	
91	44-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I14	SH48	口縁端部：刻み、口縁部：表面剥離のため不明	やや密	雲母	灰黄褐	
92	46-3	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I14	SH48	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰黄褐	
93	45-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	頸部：刺突（ヘラ状）	やや密	雲母	にぶい黄橙	97と同一か
94	44-10	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I14	SH48	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
95	45-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
96	46-9	押型文土器	頸部片	中垣戸	I14	SH48	頸部：刺突（竹管状）	密		灰黄褐	
97	45-1	押型文土器	頸部片	中垣戸		SH48	頸部：刺突（円棒状）	やや密	雲母	橙	93と同一か
98	44-11	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I14	SH48	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	やや密		灰黄褐	94と同一か
99	45-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
100	45-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	やや密		橙	炭化物付着
101	45-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
102	45-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	炭化物付着
103	46-10	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
104	46-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
105	46-7	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
106	46-2	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
107	46-6	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
108	46-11	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：方格子目文	密		にぶい褐	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
109	45-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	I14	SH48	胴部：方格子目文	やや密		にぶい黄褐	
110	46-4	押型文土器	底部片	中垣戸	I14	SH48	底部：市松文？	密		にぶい黄橙	尖底状
111	45-9	押型文土器	底部片	中垣戸	I14	SH48	底部：市松文	やや密		にぶい黄橙	尖底状
112	48-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SH64	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
113	48-12	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SH64	胴部：斜格子目文（施文ごく浅い）	密		灰黄褐	
114	32-1	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J9	SF33	口縁端部:刻み、口縁部:斜格子目文、頸部:刺突（円棒状）	やや密		にぶい黄褐	
115	70-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J9	SF33	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		にぶい黄褐	
116	70-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J9	SF33	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（竹管状、左から）	密		にぶい褐	
117	53-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J9	SF33	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密	雲母	灰褐	補修孔あり。炭化物付着（MEMB-19）
118	70-5	押型文土器	胴部下半片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		橙	
119	32-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J9	SF33	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		にぶい橙	
120	70-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J9	SF33	頸部：刺突（円棒状、下から）、胴部：市松文	密	雲母	黒褐	炭化物付着
121	70-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄橙	
122	69-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
123	54-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：斜格子目文	密	雲母	にぶい黄橙	
124	53-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		黒褐	炭化物付着（MEMB-25）
125	32-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密		明黄褐	
126	32-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密		にぶい黄褐	
127	32-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文、内面：工具状のナデ	やや密		褐灰	
128	32-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文　内面：工具状のナデ	やや密		にぶい黄	
129	70-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄	
130	70-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		にぶい褐	
131	32-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密	雲母	灰黄褐	
132	32-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密	雲母	灰黄褐	131と同一か
133	69-12	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		灰黄褐	
134	70-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		黒褐	
135	70-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密		橙	
136	70-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄褐	
137	32-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：方格子目文	やや密	雲母	にぶい黄褐	天地不明確
138	32-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密	雲母	にぶい黄橙	
139	32-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SF33	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
140	53-2	押型文土器	口縁部 3/12	中垣戸	J10	SF37	口縁端部:刻み（ユビオサエ）、口縁部:市松文、頸部:刺突（ユビオサエ）	密		灰褐	口径 33.0cm、炭化物付着（MEMB-16）
141	35-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J10	SF37	口縁端部:刻み、口縁部:刺突（竹管状、下･右下･下から）	密		にぶい褐	
142	54-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J10	SF36	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		明赤褐	
143	50-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J10	SF36	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	やや密		にぶい黄褐	
144	50-6	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J10	SF36	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状）	やや密		黒褐	
145	33-1	押型文土器	頸部片	中垣戸	J10	SF36	頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文？	やや密		にぶい黄褐	
146	33-3	押型文土器	頸部片	中垣戸	J10	SF36	頸部：刺突（竹管状）	やや密		明黄褐	
147	35-3	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J10	SF36	頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
148	33-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
149	35-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J10	SF36	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰黄褐	
150	33-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		明黄褐	
151	33-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		黒褐	天地不明確
152	33-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	天地不明確
153	33-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：斜格子目文？	やや密		にぶい黄橙	
154	33-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
155	35-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：方格子目文	密		にぶい橙	
156	50-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
157	50-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		にぶい黄	
158	33-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密	雲母	にぶい黄橙	
159	54-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄橙	
160	33-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
161	35-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF36	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
162	36-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H13	SF46	口縁端部：刻み、口縁部：斜格子目文	やや密		にぶい橙	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
163	36-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H13	SF46	口縁部：方格子目文	密		黒褐	あるいは擬口縁か
164	36-1	押型文土器	胴部片	立会 C		SF46	頸部：山形文、胴部：市松文	密		にぶい橙	
165	36-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	H13	SF46	胴部：市松文？	密		にぶい褐	
166	36-11	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I12,J12	SF44	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		灰褐	
167	53-1	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	I12,J12	SF44	口縁部：斜格子目文、頸部：刺突（ヘラ状、器壁に対し垂直）	密		黒褐	
168	54-3	押型文土器	頸部片	中垣戸	I12	SF44	頸部：刺突（円棒状、左から）、胴部：市松文	密		にぶい黄橙	天地不明確
169	50-9	押型文土器	頸部～胴部片	中垣戸	I12	SF44	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状、浅い）	やや密		黒褐	補修孔あり
170	35-9	押型文土器	胴上部片	中垣戸	J12	SF44	頸部：山形文？、胴部：斜格子目文	密		黒褐	
171	34-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	SF44	胴部：市松文	密		灰褐	炭化物付着
172	34-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	SF44	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
173	36-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12,J12	SF44	胴部：市松文	密		橙	
174	50-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SF44	胴部：市松文	やや密	雲母	にぶい黄褐	
175	35-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J12	SF44	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	天地不明確
176	36-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12,J12	SF44	胴部：市松文	密	雲母	灰黄褐	
177	34-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	SF44	胴部：市松文	密		にぶい褐	
178	34-10	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I13	SF44	胴部：方格子目文？	密		明黄褐	
179	54-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	SF44	胴部：市松文	密	雲母	褐	
180	53-4	縄文土器	胴部片	中垣戸	J12	SF44	縄文（単節）	密	雲母	にぶい黄橙	
181	34-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	H15	SF53	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文または斜格子目文	密	雲母	にぶい黄橙	炭化物付着（MEMB-18）
182	34-2	押型文土器	頸部片	中垣戸	H15	SF53	頸部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄褐	
183	34-6	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	H15	SF53	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
184	54-7	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	H15	SF53	頸部：刺突、胴部：市松文	密		黒褐	
185	34-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SF53	胴部：市松文	密		灰黄褐	
186	34-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SF53	胴部：市松文	密		灰黄褐	
187	54-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SF53	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
188	34-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SF53	胴部：市松文を帯状施文	密		灰黄褐	炭化物付着
189	37-6	押型文土器	底部片	中垣戸	I14	SF57	胴部：市松文	やや密		黄橙	
190	37-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SF59	口縁部：斜格子目文	密		にぶい橙	
191	35-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SF60	口縁端部：刻み	密		にぶい黄橙	
192	36-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SF60	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄橙	
193	36-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SF60	口縁端部：刻み	密		にぶい橙	
194	36-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SF60	胴部：方格子目文	密		にぶい橙	
195	36-12	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J8	SF60	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状、下から）	密		褐灰	
196	36-5	押型文土器	胴下部片	中垣戸	J8	SF60	胴部：方格子目文？	やや密		にぶい橙	
197	37-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SF60	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
198	37-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SF60	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
199	52-1	押型文土器	口縁～胴部	中垣戸	J8	SF60	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	やや密		灰黄褐	口径 31.2cm
200	37-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	H16	SF61	胴部：市松文	やや密		浅黄橙	
201	34-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	H16	SF61	胴部：市松文	密		橙	
202	37-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	H16	SF61	胴部：市松文	やや密		浅黄橙	
203	37-5	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I13	SF62	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰褐	
204	35-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SF63	胴部：方格子目文？	密	雲母	にぶい黄橙	
205	35-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J10	SF63	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄褐	
206	60-1	押型文土器	胴部片	立会 C		SF97	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
207	55-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	K4	SK14	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄褐	
208	55-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	I7	SK27	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
209	37-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	L2,3	SK16	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
210	54-11	押型文土器	底部片	中垣戸	I10	SK38	文様なし	密		橙	
211	50-1	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J8	SK29	頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：斜格子目文	やや密		にぶい黄橙	炭化物付着（MEMB-15）
212	50-2	押型文土器	底部小片	中垣戸	J8	SK30	底部：市松文？	やや密		暗灰黄	乳頭状
213	37-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I10	SK32	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		にぶい赤褐	
214	37-11	押型文土器	頸部？	中垣戸	I10	SK32	頸部：山形文	密		褐灰	
215	37-9	押型文土器	口縁～胴部片	中垣戸	I10	SK32	口縁端部：刻み、口縁部：無文、頸部：刺突（円棒状、下・右下から）	やや密	雲母	にぶい赤褐	
216	54-12	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SK40	口縁端部：刻み、口縁部：山形文	密	雲母	にぶい褐	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
217	38-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J11	SK40	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	炭化物付着
218	38-3	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	I11	SK41	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（ヘラ状）	やや密	雲母	にぶい黄橙	
219	38-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J11	SK41	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、内面：工具状のヨコナデ	やや密	雲母	橙	218と同一か
220	38-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	I11	SK41	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
221	38-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I11	SK41	胴部：市松文または斜格子目文	やや密		にぶい黄橙	
222	38-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	I11	SK41	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
223	38-7	押型文土器	胴下部片	中垣戸	I11	SK41	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
224	38-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J12	SK45	口縁端部:刻み（竹管状）、口縁部:刺突（円棒状、深い）	やや密	雲母	灰黄褐	
225	38-9	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J12	SK45	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	やや密		黒褐	
226	38-11	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J12	SK45	胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
227	38-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J12	SK45	口縁部：斜格子目文	やや密		黒褐	
228	39-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J12	SK45	胴部：市松文	やや密		にぶい黄褐	
229	54-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J12	SK45	胴部：市松文？	密		明黄褐	天地不明確
230	39-2	押型文土器	胴下部片	中垣戸	J12	SK45	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
231	54-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	H14	SK47	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
232	39-3	押型文土器	胴下部片	中垣戸	H13	SK47	胴部：市松文	やや密		明黄褐	233と同一
233	50-3	押型文土器	底部片	中垣戸	H13	SK47	底部：市松文	やや密		にぶい黄橙	尖底状、232と同一
234	39-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H16	SK54	口縁端部：刻み	やや密		にぶい黄褐	炭化物付着
235	53-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	H16	SK56	胴部：市松文	密	雲母	黒褐	炭化物付着(MEMB-22)
236	66-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L1	SZ10	口縁端部：刻み、口縁部：無文	密		にぶい黄褐	炭化物付着
237	65-12	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L1	SZ10	口縁部：無文	密		にぶい黄褐	
238	66-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L1	SZ10	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：市松文	密		にぶい褐	あるいは擬口縁か
239	65-11	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	L1	SZ10	胴部：市松文	密		灰褐	
240	65-2	押型文土器	頸部片	中垣戸	L1	SZ10	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密	雲母	黒褐	炭化物付着
241	65-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	L1	SZ10	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
242	65-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	L1	SZ10	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
243	65-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	L1	SZ10	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
244	65-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	L4	SZ13	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
245	65-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	K3	SZ13	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
246	55-2	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	K3	SZ13	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		褐灰	
247	55-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	K5	SZ7	胴部：方格子目文	密		にぶい橙	
248	65-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	K4	SZ17	口縁部：刺突（竹管状、左から）	密	雲母	にぶい褐	
249	65-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L5	SZ18	口縁端部：刻み、口縁部：端部直下に刺突（円棒状）、市松文	密		黒褐	
250	65-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L5	SZ18	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		褐灰	
251	67-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	K4,5	SZ18	口縁端部:刻み、口縁部:刺突（円棒状、左下から）	密		にぶい黄橙	
252	65-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L4,5	SZ18	口縁部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	密	雲母	黄褐	
253	67-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	k8	SZ23	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄橙	
254	67-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ23	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		灰褐	
255	67-7	押型文土器	口縁～胴部片	中垣戸	K8	SZ23	口縁部：市松文？、頸部：刺突（円棒状、浅い）、胴部：市松文	密		にぶい黄褐	265と同一か
256	67-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ23	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
257	67-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	K8	SZ23	胴部：斜格子目文	密		灰褐	
258	67-6	押型文土器	胴下部片	中垣戸	K8	SZ23	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
259	69-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		灰黄褐	
260	69-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
261	68-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：市松文	密		にぶい黄褐	
262	69-9	押型文土器	頸部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状）	密		灰黄褐	
263	68-9	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：無文	密		灰黄褐	
264	68-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：市松文、頸部：刺突（竹管状）	密		灰黄褐	
265	67-9	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J8	SZ24	頸部：刺突（円棒状、浅い）、胴部：市松文	密		にぶい黄褐	255と同一か
266	68-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：市松文	密		灰黄褐	
267	69-1	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	J8	SZ24	口縁部：市松文、頸部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄褐	
268	67-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
269	69-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		灰黄褐	
270	68-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
271	69-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	炭化物付着
272	69-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
273	69-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
274	68-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
275	68-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		灰黄褐	
276	68-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい褐	
277	69-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄褐	
278	69-5	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	J8	SZ24	頸部：刺突（円棒状）、胴部：斜格子目文	密		灰褐	
279	67-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい褐	
280	68-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
281	67-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：市松文	密		橙	
282	68-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	J8	SZ24	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄褐	
283	63-6	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I12	SZ43	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		灰黄褐	炭化物付着
284	63-2	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I9	SZ31	頸部：山形文、胴部：斜格子目文	やや密		灰黄褐	
285	66-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SZ31	胴部：市松文	密	雲母	褐灰	
286	66-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SZ31	胴部：市松文	密		橙	
287	53-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	SZ31	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	炭化物付着（MEMB-23）
288	63-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	SZ31	胴部：市松文	やや密		にぶい黄褐	
289	66-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J10	SZ31	胴部：市松文	密		灰褐	
290	66-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	SZ31	胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄褐	
291	66-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	SZ31	胴部：市松文	密		灰黄褐	
292	66-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	SZ31	胴部：市松文	密		橙	
293	66-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	SZ31	胴部：市松文	密		橙	
294	66-6	押型文土器	底部片	中垣戸	J9	SZ31	底部：市松文？	密	雲母	橙	
295	63-8	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸	I12	SZ43	口縁端部：刻み、口縁部：山形文、刺突（円棒状）	やや密		暗灰黄	
296	63-7	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I12	SZ43	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		にぶい黄橙	
297	63-3	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸		SZ43	口縁端部:刻み、口縁部:無文、頸部:刺突（円棒状、左下から）	やや密		にぶい黄褐	
298	63-5	押型文土器	頸部～胴部片	中垣戸	J12	SZ43	頸部：刺突（円棒状、上から）、胴部：市松文	やや密		灰黄褐	
299	63-9	押型文土器	頸部片	中垣戸	I13	SZ43	頸部：刺突（円棒状、右から）	やや密		にぶい黄橙	天地不明確
300	64-1	押型文土器	頸部片	中垣戸	I12	SZ43	頸部：刺突（竹管状）	やや密		にぶい黄褐	
301	64-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
302	64-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：市松文	やや密		明黄褐	
303	63-4	押型文土器	胴部片	中垣戸		SZ43	胴部：市松文	やや密		褐	
304	64-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	
305	53-10	押型文土器	胴部（下半）片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：方格子目文	密		橙	炭化物付着（MEMB-24）
306	64-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：市松文	やや密		橙	
307	64-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	SZ43	胴部：市松文	やや密		橙	
308	64-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	SZ43	胴部：市松文	やや密		にぶい黄褐	
309	60-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸		SZ51	口縁端部：刻み	密		にぶい褐	
310	60-3	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		SZ51	頸部：刺突（円棒状）、胴部：方格子目文	密		灰黄褐	
311	60-6	押型文土器	胴部片	中垣戸		SZ51	頸部：刺突、胴部：市松文	密		灰黄褐	
312	60-5	押型文土器	胴部片	中垣戸		SZ51	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
313	60-7	押型文土器	胴部片	中垣戸		SZ51	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
314	60-4	押型文土器	胴部片	中垣戸		SZ51	胴部：市松文	密		灰黄褐	
315	64-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SZ51	胴部：市松文？	やや密		黒褐	
316	64-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	H15	SZ51	胴部：市松文	やや密		にぶい黄橙	炭化物付着
317	60-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸		SZ55	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい褐	
318	61-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸	G17	Pit1	口縁端部：刻み（D字）、口縁部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄橙	
319	61-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	G17	Pit1	胴部：斜格子目文	密		褐	
320	62-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	H12	Pit2	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
321	62-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	H12	Pit2	胴部：市松文	密		にぶい赤褐	
322	62-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	H12	Pit2	胴部：斜格子目文	密		褐	
323	62-2	押型文土器	胴部片	中垣戸	H12	Pit2	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
324	62-1	押型文土器	胴上部片	中垣戸	H12	Pit2	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
325	61-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	Pit1	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
326	61-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I8	Pit1	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状、下から）	密		にぶい黄橙	
327	61-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I8	Pit1	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		にぶい黄橙	
328	61-5	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	Pit1	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
329	61-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	L2	Pit2	胴部：市松文	密		明赤褐	
330	61-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I13	Pit2	口縁端部：刻み（D字形）、口縁部：市松文	密		にぶい黄橙	
331	61-6	押型文土器	頸部片	中垣戸	I13	Pit1	頸部：刺突（円棒状）	密		黒褐	天地不明確
332	61-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	Pit1	胴部：市松文	密		にぶい褐	
333	61-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	I13	Pit1	胴部：斜格子目文	密		にぶい褐	
334	61-12	押型文土器	胴部片	中垣戸	K3	Pit3	胴部：市松文	密		褐	
335	62-11	押型文土器	口縁部片	立会Ｃ		Pit1	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状、右から）	密		黒褐	炭化物付着
336	62-10	押型文土器	胴部片	立会Ｃ		Pit1	胴部：市松文	密		にぶい橙	炭化物付着
337	59-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、胴部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄褐	
338	57-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H16	包含層	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密	雲母	褐灰	
339	56-1	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：市松文、頸部：刺突（円棒状、左上から）	密		橙	
340	58-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I9	包含層	口縁端部：刻み、口縁部：山形文？	密	雲母	にぶい橙	
341	55-7	押型文土器	口縁～胴部片	中垣戸	H13	包含層	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：山形文、頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	密	雲母	にぶい黄橙	
342	55-6	押型文土器	口縁部片	中垣戸	H13	包含層	口縁部：市松文	密		にぶい褐	
343	62-6	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	H12	検出面	頸部？：山形文、胴部：市松文	密		にぶい褐	
344	57-3	押型文土器	口縁部片	中垣戸	I12	包含層	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（竹管状）	密	雲母	にぶい橙	
345	57-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部:刻み、口縁部:刺突（円棒状）、胴部:市松文？	やや粗	雲母	にぶい橙	
346	62-9	押型文土器	口縁部片	中垣戸		検出面	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄橙	
347	57-2	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密	雲母	にぶい橙	
348	58-10	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	密		橙	
349	59-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：刺突	密		にぶい黄褐	
350	56-8	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み（ヘラ状）、口縁部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄橙	
351	58-11	押型文土器	口縁部片	中垣戸		包含層	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（竹管状、下から）	密	雲母	にぶい褐	
352	55-12	押型文土器	口縁部片	中垣戸	L2	包含層	口縁端部：刻み、口縁部：剥離のため不明	密		暗灰黄	未貫通の補修孔あり
353	62-7	押型文土器	頸部片	中垣戸	H12	検出面	頸部：刺突（円棒状、下から）	密		にぶい黄橙	
354	57-1	押型文土器	頸部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（円棒状）	密		にぶい黄橙	
355	56-7	押型文土器	頸部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（円棒状）	密		にぶい橙	
356	58-12	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（竹管状）、胴部：市松文？	密	雲母	灰黄褐	
357	56-9	押型文土器	頸部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（竹管状）	密		灰黄褐	
358	58-8	押型文土器	頸部片	中垣戸	I9	包含層	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		灰黄褐	
359	57-12	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	H16	包含層	頸部：刺突（竹管状）、胴部：市松文	密		にぶい褐	
360	56-6	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		にぶい橙	
361	56-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
362	56-5	押型文土器	頸部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（円棒状）	密		にぶい褐	
363	57-4	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		包含層	頸部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
364	58-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	包含層	胴部：市松文	密	雲母	にぶい褐	
365	62-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	H12	検出面	胴部：市松文	密		黒褐	
366	56-2	押型文土器	胴部片	中垣戸		包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
367	58-4	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
368	57-6	押型文土器	胴部片	中垣戸	L1	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
369	55-8	押型文土器	胴部片	中垣戸	I11	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
370	58-1	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	包含層	胴部：市松文	密		明黄褐	炭化物付着
371	57-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	包含層	胴部：市松文	密		黒褐	
372	58-9	押型文土器	胴部片	中垣戸		包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
373	57-8	押型文土器	胴下部片？	中垣戸		包含層	胴部：市松文	密		にぶい褐	
374	56-3	押型文土器	胴部片	中垣戸		包含層	胴部：市松文	密	雲母	褐	
375	56-10	押型文土器	胴部片	中垣戸		包含層	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
376	55-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	I17	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
377	58-3	押型文土器	胴部片	中垣戸	J9	包含層	胴部：市松文？	密		黒褐	
378	57-11	押型文土器	胴部片	中垣戸	I12	包含層	胴部：市松文	密		橙	

NO	実測番号	種類	部位・残存度	地区	グリッド	遺構・層位	文様・調整	胎土		色調(外面)	備考
								緻密さ	鉱物		
379	55-10	押型文土器	胴部片	中垣戸	I15	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
380	55-5	押型文土器	胴下部片	中垣戸	G16	包含層	重複のため文様不明	密		にぶい黄橙	
381	55-9	押型文土器	胴部片	中垣戸	I15	包含層	胴部：市松文	密		にぶい黄橙	
382	57-7	押型文土器	胴下部片	中垣戸		包含層	胴部：市松文	密		橙	
383	58-5	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸	I9	包含層	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄橙	
384	58-7	押型文土器	胴部片	中垣戸	I9	包含層	胴部：斜格子目文	密		にぶい黄褐	
385	51-7	押型文土器	頸部片	中垣戸		排土	刺突（円棒状）、縄文（単節 LR）	やや密	雲母	灰黄褐	大川 a 古か
386	59-6	押型文土器	口縁部片	中垣戸		表土	口縁端部：刻み、口縁部：市松文	密		にぶい褐	
387	51-1	押型文土器	口縁～胴部片	中垣戸		排土	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（ヘラ状）、胴部：市松文	やや密		浅黄	
388	51-2	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸		排土	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	やや密		黄褐	
389	51-3	押型文土器	口縁～頸部片	中垣戸		排土	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		にぶい黄橙	
390	51-4	押型文土器	口縁部片	中垣戸		排土	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		にぶい黄	
391	51-5	押型文土器	口縁部片	中垣戸		排土	口縁端部：刻み、口縁部：刺突（円棒状）	やや密		灰黄褐	
392	51-6	押型文土器	頸部片？	中垣戸		排土	頸部：刺突（ヘラ状）	やや密		にぶい黄橙	
393	59-1	押型文土器	頸部片	中垣戸		表土	頸部：刺突、胴部：市松文	密		にぶい橙	
394	59-11	押型文土器	頸部片	中垣戸		排土	口縁部：市松文、頸部：刺突（ヘラ状）	密		にぶい黄橙	
395	59-9	押型文土器	頸～胴部片	中垣戸		排土	胴部：市松文	密		灰黄褐	
396	59-2	押型文土器	胴部片	中垣戸		表土	胴部：市松文	密		にぶい黄褐	
397	59-3	押型文土器	胴部片	中垣戸		表土	胴部：市松文	密		灰黄褐	
398	59-8	押型文土器	胴部片	中垣戸		調査区南壁	胴部：方格子目文	密		にぶい黄橙	
399	59-7	押型文土器	胴部片	中垣戸		調査区南壁	頸部：刺突（円棒状）、胴部：市松文	密		にぶい褐	
400	59-10	押型文土器	胴部片	中垣戸		排土	胴部：市松文	密		灰黄褐	

石器

NO	実測番号	器種	地区	グリッド	遺構・層位	法量 (cm)			重量	石材	特記事項
						長	幅	厚さ	(g)		
401	104-2	石鏃	中垣戸		排土	1.5	1.2	0.2	0.3	サヌカイト	
402	123-1	石鏃	中垣戸	J10	Pit2	2.1	1.6	0.6	2.0	サヌカイト	
403	111-2	削器	立会 C		SH50	4.9	6.0	1.0	24.8	サヌカイト	
404	111-3	楔形石器	中垣戸	J12	SK45	4.4	5.1	1.6	37.4	泥岩 B	
405	101-2	楔形石器	中垣戸	K7.8	SH22	5.2	4.6	1.6	46.3	泥岩 B	
406	106-4	楔形石器	中垣戸		表土	6.0	5.0	1.8	73.7	泥岩 B	
407	123-7	UF	中垣戸	J9	SH42	3.9	7.9	1.7	41.8	泥岩 B	
408	123-6	UF	中垣戸		排土	5.5	7.8	1.4	49.2	緑色岩	
409	123-4	UF	中垣戸	I9	包含層	2.5	4.3	0.8	7.1	溶結凝灰岩	
410	123-2	UF	中垣戸		排土	4.0	4.4	1.1	11.6	チャート	
411	123-8	UF	中垣戸	K4.5	SZ18	4.5	5.4	1.8	30.4	泥岩 C	
412	123-5	UF	中垣戸		SZ55	7.0	9.2	1.7	80.5	砂岩 B	混入遺物
413	123-3	RF	中垣戸	I12	包含層	2.2	3.9	1.3	11.3	チャート	
414	101-4	礫器	中垣戸	K7.8	SH22	8.0	8.8	3.1	268	泥岩 C	
415	105-3	礫器	中垣戸		SH42	7.0	8.7	4.8	265	砂岩 B	
416	109-2	礫器	中垣戸	I14	SH48	7.2	9.5	4.0	345	砂岩 B	
417	102-2	礫器	中垣戸		SH50	8.8	9.6	6.0	495	泥岩 A	
418	110-2	礫器	中垣戸		SH50	6.8	6.1	4.2	214	泥岩 C	
419	106-3	礫器	中垣戸	J10	SF36	7.5	6.3	3.9	224	泥岩 C	
420	106-1	礫器	中垣戸	I14	SF57	6.1	8.7	8.8	314	泥岩 B	
421	106-2	礫器	中垣戸	J12	SF44	5.8	7.0	3.3	156	泥岩 B	
422	108-2	礫器	中垣戸	J12	SF44	7.3	9.7	6.3	542	泥岩 C	
423	107-1	礫器	中垣戸	J8	SF60	8.7	9.5	5.9	566	泥岩 B	
424	107-2	礫器	中垣戸	K4	SK14	8.3	9.5	4.6	426	砂岩 B	
425	105-2	礫器	中垣戸	K5	SZ18	6.8	10.1	5.7	470	砂岩 B	
426	110-1	礫器	中垣戸	H13	SK47	7.2	7.1	4.7	270	泥岩 A	
427	105-1	礫器	中垣戸	H13	SK47	8.0	9.0	4.7	371	砂岩 B	
428	101-3	礫器	中垣戸	J8	SZ24	11.7	6.7	5.6	448	砂岩 B	
429	102-1	礫器	中垣戸	I12	SZ43	9.0	9.5	6.2	560	泥岩 C	
430	109-1	礫器	中垣戸		表土	8.5	9.7	4.5	485	砂岩 B	
431	108-1	礫器	中垣戸		検出面	9.1	12.0	4.3	625	砂岩 B	
432	101-1	礫器	中垣戸		包含層	7.4	8.7	4.1	350	砂岩 B	
433	103-2	磨製石斧	中垣戸		排土	15.6	5.5	3.0	428	緑色岩	乳棒状
434	104-1	磨石	中垣戸	J12	SF44	9.4	7.3	4.0	440	砂岩 B	いわゆる石鹸形。敲石としても利用
435	103-1	凹石	中垣戸	J8	SZ24	11.5	7.7	4.4	365	花崗岩	
436	112-2	磨石	中垣戸	I14	SH48	10.4	9.5	3.7	500	花崗岩	敲石としても利用
437	110-3	磨石	中垣戸		包含層	8.3	9.0	3.3	300	砂岩 B	敲石としても利用
438	118-1	磨石	中垣戸		検出面	11.5	11.0	5.6	1000	砂岩 B	敲石としても利用
439	111-1	磨石	中垣戸	L4	SZ13	5.3	4.5	3.3	96.9	花崗岩	
440	121-1	石皿	中垣戸	S2	SF33	27.3	22.0	7.5	6100	花崗岩	
441	120-1	石皿	中垣戸	S3	SF33	30.5	20.3	10.3	8900	砂岩 B	
442	122-1	石皿	中垣戸	S1	SF33	31.2	26.2	7.0	8800	凝灰岩	
443	119-1	石皿	中垣戸	S5	SF33	25.9	23.8	8.8	7100	凝灰岩	
444	116-1	石皿	中垣戸		SF61	26.9	20.8	7.1	6300	砂岩 B	
445	115-1	石皿	中垣戸		表土	24.9	15.3	6.4	4200	砂岩 B	
446	124-1	石皿	立会 C		SF46	20.2	19.0	8.6	4960	砂岩 B	台石としても利用
447	114-1	石皿	中垣戸		表土	22.0	17.7	6.4	3200	花崗岩	
448	117-1	石皿	中垣戸	S2	SK45	14.1	13.1	5.9	1900	花崗岩	
449	113-1	石皿	中垣戸		包含層	23.8	15.6	6.5	3900	花崗岩	

第７表　遺物観察表（中世以降）

土器・陶磁器・土製品

法量の※印は残存計測値

NO	実測番号	種　類	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	法　量（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	色　調	備　考
							口径	底径	器高					
450	12-3	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	23.4	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや密	灰黄褐	外面煤付着
451	12-2	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	24.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	外面煤付着
452	13-2	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	24.0	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙	外面煤付着
453	12-5	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	24.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ	やや粗	灰白	
454	12-1	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	24.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	灰褐	外面煤付着
455	13-1	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	26.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ （内）ヨコナデ，ナデ	やや密	褐灰	外面煤付着
456	13-3	土師器	羽釜	中道Ｂ	B39・C39	SK1	（鍔）28.0	-	-	鍔部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ，工具ナデ	やや粗	淡黄	外面煤付着
457	13-5	土師器	羽釜	中道Ｂ	B39・C39	SK1	（鍔）36.0	-	-	鍔部 1/12	（外）ナデ （内）不明	やや粗	浅黄橙	内外面煤付着
458	13-4	土師器	羽釜	中道Ｂ	B39・C39	SK1	（鍔）37.0	-	-	鍔部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ナデ	やや粗	にぶい黄橙	
459	12-4	土師器	鍋	中道Ｂ	B39・C39	SK1	-	-	-	口縁部小片	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	褐灰	外面煤付着
460	11-6	土師器	小皿	中道Ｂ	B39・C39	SK1	7.0	-	1.3	口縁部 3/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	やや粗	にぶい黄橙	
461	11-7	土師器	皿	中道Ｂ	B39・C39	SK1	12.8	-	2.5	口縁部 1/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや密	灰白	
462	11-1	陶器（瀬戸）	卸皿	中道Ｂ	B39・C39	SK1	18.2	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ，灰釉 （内）ロクロナデ，灰釉	密	にぶい黄橙	
463	11-2	陶器（瀬戸）	卸皿	中道Ｂ	B39・C39	SK1	-	8.2	-	底部 7/12	（外）ロクロナデ，糸切痕，灰釉 （内）ロクロナデ，卸目	やや密	にぶい黄橙	
464	11-3	陶器（瀬戸）	卸皿	中道Ｂ	B39・C39	SK1	-	9.0	-	底部 4/12	（外）ロクロナデ，糸切痕，灰釉 （内）ロクロナデ，卸目	密	にぶい黄橙	
467	7-6	土師器	皿	中垣戸	I8	SE28	13.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ	密	浅黄橙	
468	7-5	山茶碗	皿	中垣戸	I8	SE28	9.0	4.3	1.9	底部 12/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ，ナデ	密	灰黄	
469	7-3	山茶碗	碗	中垣戸	I8	SE28	-	7.4	-	底部 5/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	黄灰	内面使用による磨滅
470	7-2	山茶碗	碗	中垣戸	I8	SE28	-	6.7	-	底部 5/12	（外）ロクロナデ，ナデ （内）ロクロナデ	密	褐灰	内面使用による磨滅
471	7-1	山茶碗	碗	中垣戸	I8	SE28	-	7.6	-	底部 12/12	（外）ロクロナデ，ヨコナデ，糸切痕，ナデ（内）ロクロナデ	密	灰黄	内面使用による磨滅
472	7-4	陶器（瀬戸）	皿	中垣戸	I8	SE28	-	5.6	-	底部 4/12	（外）ロクロナデ，糸切痕，灰釉 （内）ロクロナデ	密	灰黄	
473	8-4	土師器	鍋	中垣戸	I8	SE28	20.1	-	-	口縁部 1 /12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ，ナデ	密	にぶい黄橙	
474	8-1	陶器（常滑）	壺	中垣戸	I8	SE28	※ 36.0	-	-	底部 3/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	灰褐	475 と同一個体
475	8-1	陶器（常滑）	壺	中垣戸	I8	SE28	-	18.0	-	底部 3/12	（外）ナデ，ユビオサエ，ケズリ （内）ヨコナデ，ユビオサエ	密	灰	474 と同一個体 底部に砂圧痕
476	8-2	陶器（渥美）	壺	中垣戸	I10	SE28	-	16.8	-	底部 4/2	（外）タタキ後ナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ，ユビオサエ	密	オリーブ灰	
477	1-7	土師器	小皿	中垣戸	I10	SE34	7.2	-	1.5	口縁部 4/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	密	にぶい黄	歪みが大きい
478	1-8	土師器	小皿	中垣戸	I10	SE34	8.0	-	1.0	口縁部 4/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	密	橙	歪みが大きい
479	1-4	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	9.7	-	3.0	口縁部 11/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ，工具ナデ	やや粗	浅黄橙	歪みが大きい，外面に工具圧痕
480	1-5	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	8.4	-	2.3	口縁部 8/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	やや密	淡黄	外面煤付着
481	1-2	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	10.4	-	2.2	口縁部 11/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	やや粗	灰白	
482	1-1	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	10.6	-	2.5	口縁部 7/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	粗	にぶい黄橙	
483	1-3	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	9.6	-	3.1	完存	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ	粗	にぶい黄橙	歪みが大きい
484	1-6	土師器	皿	中垣戸	I10	SE34	10.2	-	2.5	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	やや密	灰白	歪みが大きい
485	4- 1	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	28.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，ナデ	密	灰黄	外面煤付着
486	3-2	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	29.8	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，ナデ	やや粗	褐灰	外面煤付着
487	2-2	山茶碗	碗	中垣戸	I10	SE34	16.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ロクロナデ （内）ロクロナデ	やや密	灰白	
488	2-6	山茶碗	碗	中垣戸	I10	SE34	-	6.7	-	底部 1/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰白	内面使用による磨滅
489	2-5	山茶碗	碗	中垣戸	I10	SE34	-	7.8	-	底部 2/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰白	
490	2-3	山茶碗	碗	中垣戸	I10	SE34	-	7.2	-	底部 1/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	やや密	黄灰	内面使用による磨滅
491	2-1	陶器（瀬戸）	皿	中垣戸	I10	SE34	-	6.1	-	底部 9/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）灰釉刷毛塗り	密	灰黄	内面に三叉トチンの痕跡

NO	実測番号	種　類	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	法　量（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	色　調	備　考
							口径	底径	器高					
492	2-4	陶器（常滑）	壺	中垣戸	I10	SE34	11.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ （内）ロクロナデ	やや密	灰赤	
493	8-3	青磁	碗	中垣戸	I10	SE34	-	-	-	底部 小片	（外）施釉（内）施釉	密	オリーブ灰	
494	7-7	陶器（瀬戸）	天目茶碗	中垣戸	I10	SE34	11.8	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロケズリ，鉄釉 （内）鉄釉	密	灰褐	
495	7-8	土師器	土錘	中垣戸	I10	SE34	（長）※ 5.4	（幅）2.2	-		ナデ	密	にぶい黄橙	孔径 0.7㎝重さ 24. 4 g
497	5-2	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	23.4	-	-	口縁部 5/12	（外）ヨコナデ，ハケメ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，工具ナデ	密	にぶい黄褐	外面煤付着
498	6-1	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	24.6	-	12.8	口縁部 10/12	（外）ヨコナデ，ユビオサエ，ケズリ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ，ケズリ	密	にぶい褐	内外面煤付着
499	3-1	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	25.0	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ハケ，ユビオサエ，ケズリ（内）ヨコナデ，ハケ	やや密	淡黄	外面煤付着
500	4-2	土師器	鍋	中垣戸	I10	SE34	25.0	-	-	口縁部 3/12	（外）ヨコナデ，ハケ，ユビオサエ，ケズリ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ，ケズリ	密	灰白	外面煤付着
501	5-1	土師器	羽釜	中垣戸	I10	SE34	32.0	-	-	口縁部 3/12	（外）ヨコナデ，ナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ，工具ナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
502	15-7	土師器	鍋	立会Ａ	-	SE95	23.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
503	15-8	土師器	鍋	立会Ａ	-	SE95	25.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	灰褐	外面煤付着
504	17-2	土師器	小皿	中道Ｂ	C37	SK5	7.0	-	1.0	口縁部 6/12	（外）ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ	密	浅黄橙	歪みが大きい
505	17-1	白磁	碗	中道Ｂ	C37	SK5	16.1	-	-	口縁部 1/12	（外）施釉 （内）施釉	密	灰白	
506	17-4	土師器	皿	中道Ｂ	B36	SK6	9.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	にぶい黄橙	
507	17-3	土師器	皿	中道Ｂ	B36	SK6	11.2	-	-	口縁部 1/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	にぶい黄橙	
508	17-5	土師器	小皿	中道Ｂ	C37	SK9	7.4	-	※ 1.2	口縁部 5/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
509	17-7	土師器	皿	中道Ｂ	C37	SK9	10.8	-	-	口縁部 5/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	灰白	
510	17-6	土師器	皿	中道Ｂ	C37	SK9	11.0	-	2.3	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ（内）ナデ	密	浅黄橙	
511	9-2	土師器	鍋	中垣戸	H14	SK49	22.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ（内）ナデ，ハケ	やや密	にぶい黄橙	外面煤付着
512	9-1	土師器	鍋	中垣戸	G14	SK49	32.0	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，ナデ	やや密	暗灰黄	外面煤付着
513	9-6	土師器	茶釜蓋	中垣戸	I15	SK52	9.8	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ユビオサエ	やや密	にぶい橙	把手部貼り付け
514	9-5	陶器（瀬戸）	刷毛目碗	中垣戸	I15	SK52	14.0	4.9	5.8	底部 12/12	（外）ロクロナデ，灰釉 （内）ロクロナデ，灰釉	密	浅黄	貼付高台
515	9-3	陶器（波佐見）	碗	中垣戸	I15	SK52	11.6	4.8	5.8	底部 8/12	（外）施釉，呉須絵　丸文 （内）施釉，コンニャク印判	密	灰白	削出高台 高台に砂が付着
516	9-4	陶器（波佐見）	碗	中垣戸	I15	SK52	10.0	4.2	5.2	底部 3/12	（外）施釉，呉須絵　梅花文（ 内）施釉	密	灰白	削出高台
517	10-1	陶器（瀬戸美濃）	擂鉢	中垣戸	H16	SK56	-	9.2	-	底部 3/12	（外）ロクロナデ （内）ロクロナデ	やや密	にぶい黄橙	内面底部にスリ目
518	26-1	土師器	鍋	中道Ａ	F24	SK68	-	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや密	淡黄	
519	26-2	山茶碗	碗	中道Ａ	E26	SK69	-	8.4	-	底部 3/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	やや密	灰白	
520	29-1	土師器	鍋	中道Ａ	E26	SK69	39.7	-	-	口縁部 5/12	（外）ヨコナデ，ナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ，ナデ，ケズリ	密	にぶい褐	外面煤付着
521	26-4	土師器	小皿	中道Ａ	E30	SK73	7.5	-	0.9	完存	（外）ユビオサエ （内）ナデ	やや密	灰黄	
522	26-3	土師器	皿	中道Ａ	E30	SK73	9.5	-	2.4	口縁部 1/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	やや密	浅黄橙	
523	26-5	土師器	皿	中道Ａ	E29	SK74	11.0	-	-	口縁部 3/12	（外）ヨコナデ，ユビオサエ （内）ナデ	やや密	灰白	
524	26-6	土師器	鍋	中道Ａ	D30	SK75	20.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	灰白	
525	26-9	山茶碗	碗	中道Ａ	D32	SK76	-	-	-	口縁部 小片	（外）ロクロナデ （内）ロクロナデ	密	灰白	
526	26-8	土師器	皿	中道Ａ	D32	SK76	※ 11.7	-	※ 2.3	口縁部 小片	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	密	浅黄橙	
527	26-7	土師器	鍋	中道Ａ	D32	SK76	-	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙	
528	28-4	土師器	鍋	中道Ａ	D32	SK76	32.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	やや粗	浅黄橙	
529	28-2	土師器	鍋	中道Ａ	D32	SK76	30.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ，工具ナデ	やや密	にぶい黄橙	
530	26-10	土師器	皿	中道Ａ	E29	SK77	12.2	-	-	口縁部 2/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや粗	灰白	
531	27-1	土師器	皿	中道Ａ	D31	SK79	12.2	-	2.1	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，ナデ	やや密	浅黄橙	
532	29-2	土師器	鍋	中道Ａ	D31	SK79	28.7	-	-	口縁部 3/12	（外）ヨコナデ，ハケ，ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ	密	浅黄橙	外面煤付着

NO	実測番号	種　類	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	法　量（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	色　調	備　考
							口径	底径	器高					
533	30-1	土師器	鍋	中道A	D32	SK83	39.9	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ハケ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，ナデ	密	灰白	外面煤付着
534	27-6	土師器	鍋	中道A	D31	SK84	25.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	灰白	
535	28-1	土師器	鍋	中道A	D34	SK86	26.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ （内）ナデ	やや粗	黄灰	
536	27-7	土師器	鍋	中道A	D34	SK86	35.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，工具ナデ	やや密	黒	外面煤付着
537	27-3	土師器	小皿	中道A	D34	SK86	7.2	-	1.0	口縁部 6/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや密	浅黄橙	
538	27-2	土師器	皿	中道A	D34	SK86	11.4	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，ナデ	やや密	灰白	
539	27-4	土師器	皿	中道A	D33	SK87	9.4	-	-	口縁部 2/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	やや密	灰白	
540	27-5	山茶碗	碗	中道A	D33	SK88	-	※ 8.5	-	底部 1/12	（外）ロクロナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰黄	
541	28-3	土師器	羽釜	中道A	D33	SK88	-	-	-	鍔部 小片	（外）ナデ，ハケ （内）工具ナデ	やや粗	灰黄	外面煤付着
542	14-5	土師器	皿	中道B	C36	SD3	-	-	-	口縁部 2/12	（外）ナデ （内）ナデ	密	灰黄褐	
543	14-3	土師器	羽釜	中道B	C36	SD3	-	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	浅黄橙	外面煤付着
544	14-4	土師器	鍋	中道B	C36	SD3	-	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	やや粗	灰黄褐	外面煤付着
545	14-2	土師器	羽釜	中道B	C36	SD3	-	-	-	口縁部 小片	（外）ヨコナデ，ナデ （内）ヨコナデ，工具ナデ	やや粗	灰白	
546	11-4	山茶碗	碗	中道B	C36	SD3	-	9.1	-	底部 1/12	（外）ロクロナデ，ナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	やや密	黄灰	
547	11-5	山茶碗	碗	中道B	C36	SD3	-	8.8	-	底部 1/12	（外）ロクロナデ，ナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰白	
548	14-1	陶器（瀬戸）	擂鉢	中道B	C36	SD3	28.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ，ロクロケズリ （内）ロクロナデ	やや密	にぶい褐	
550	31-2	陶器（瀬戸）	筒形香炉	中道A	C33	Pit2	10.4	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ，灰釉 （内）ロクロナデ，灰釉	密	灰白	
551	30-3	土師器	皿	中道A	D33	Pit9	10.2	-	2.2	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
552	30-5	土師器	土錘	中道A	E31	Pit4	（長）※ 2.7	（幅）	-		ナデ	密	にぶい黄橙	孔径 0.3cm 重さ 5.95g
553	30-2	土師器	小皿	中道A	E32	Pit1	7.2	1.6	0.7	口縁部 8/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	灰白	
554	31-3	陶器	皿	中道A	F23	Pit2	10.1	-	2.4	底部 4/12	（外）ロクロナデ，ロクロケズリ，白泥釉（内）ロクロナデ，灰釉	密	灰白	
555	30-4	山茶碗	碗	中道A	F24	Pit1	-	3.2	-	底部 3/12	（外）ロクロナデ，ナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰白	
556	29-3	土師器	鍋	中道A	F26	Pit1	28.2	16.7	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	浅黄橙	
557	31-1	陶器（瀬戸）	擂鉢	中道A	G23	Pit1	-	-	-	底部 1/12	（外）ナデ，ケズリ，糸切痕 （内）摺目	密	にぶい黄橙	
558	31-4	陶器（美濃）	片口碗	中道A	G23	Pit2	9.3	15.2	6.0	口縁部 9/12	（外）ロクロナデ，ロクロケズリ，黄釉（内）ロクロナデ，黄釉	密	灰白	削出高台
559	17-8	陶器（瀬戸）	丸碗	中道B	A44	Pit3	9.3	-	-	口縁部 3/12	（外）ロクロナデ，ロクロケズリ，鉄釉（内）ロクロナデ，鉄釉	密	灰白	
560	18-7	土師器	鍋	中道B	A44	Pit2	22.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ	密	にぶい黄橙	
561	18-4	土師器	皿	中道B	B37	Pit2	8.4	-	0.9	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
562	18-2	土師器	小皿	中道B	B37	Pit3	7.6	-	0.9	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
563	18-3	土師器	皿	中道B	B37	Pit3	10.7	-	1.9	口縁部 1/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	灰白	
564	18-1	土師器	鍋	中道B	B38	Pit4	29.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	灰白	外面煤付着
565	18-5	土師器	皿	中道B	B37	Pit6	12.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
566	18-6	土師器	皿	中道B	C37	Pit1	10.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	灰白	
567	15-2	土師器	皿	立会A	b	Pit10	12.0	-	2.2	口縁部 1/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
568	15-1	土師器	皿	立会A	c	Pit10	13.0	-	2.3	口縁部 4/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	にぶい黄橙	
569	15-3	山茶碗	碗	立会A	c	Pit7	-	-	-	底部 3/12	（外）ロクロナデ，ナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰	
570	15-5	土師器	皿	立会A	d	Pit2	9.0	6.6	-	口縁部 1/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	にぶい黄橙	
571	15-6	土師器	小皿	立会A	d	Pit6	8.4	-	0.9	口縁部 4/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	灰白	
572	15-4	土師器	羽釜	立会A	d	Pit11	21.8	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，工具ハケ	密	浅黄橙	外面煤付着
573	19-3	土師器	小皿	中道B	B 37	包含層	6.6	-	0.9	口縁部 3/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	

NO	実測番号	種　類	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	法　量（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	色　調	備　考
							口径	底径	器高					
574	18-8	土師器	小皿	中道Ｂ	-	包含層	7.0	-	1.0	口縁部 3/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
575	16-2	土師器	皿	立会Ａ	-	表土	8.6	-	2.4	口縁部 10/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	密	浅黄橙	
576	25-4	土師器	皿	中道Ａ	-	表土	9.6	-	-	口縁部 3/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや密	にぶい黄橙	
577	22-4	土師器	皿	中道Ｂ	-	表土	11.4	-	2.5	口縁部 3/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
578	19-2	土師器	皿	中道Ｂ	B37	包含層	11.0	-	2.0	口縁部 1/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	浅黄橙	
579	25-3	土師器	皿	中道Ａ	-	表土	11.4	-	-	口縁部 4/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや密	浅黄	
580	25-2	土師器	皿	中道Ａ	-	表土	11.2	-	-	口縁部 5/12	（外）ナデ，ユビオサエ （内）ナデ，ユビオサエ	やや密	浅黄橙	
581	18-9	土師器	皿	中道Ｂ	B37	包含層	11.4	-	-	口縁部 2/12	（外）ユビオサエ （内）ナデ	密	にぶい黄橙	
582	16-1	土師器	皿	立会Ａ	-	包含層	12.0	-	2.6	口縁部 4/12	（外）ユビオサエ （内）ヨコナデ，ナデ	密	灰白	
583	15-9	青磁	碗	立会Ａ	-	包含層	-	-	-	底部 小片	（外）施釉 （内）施釉	密	灰白	
584	19-4	山茶碗	碗	中道Ｂ	B37	包含層	16.2	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ （内）ロクロナデ	密	黄灰	
585	10-2	山茶碗	碗	中垣戸	-	表土	-	6.6	-	底部 9/12	（外）ロクロナデ，ナデ，糸切痕 （内）ロクロナデ	密	灰黄	
586	25-6	山茶碗	碗	中道Ａ	32 ～ 34	包含層	-	8.0	-	底部 3/12	（外）ロクロナデ，ナデ （内）ロクロナデ	密	灰	内面使用による磨滅
587	10-3	山茶碗	碗	中垣戸	Ｊ７	包含層	-	6.0	-	底部 12/12	（外）ロクロナデ，ナデ （内）ロクロナデ	密	灰黄	内面煤付着
588	25-5	陶器（瀬戸）	卸皿	中道Ａ	-	表土	13.7	-	-	口縁部 1/12	（外）ロクロナデ，ロクロケズリ，灰釉（内）ロクロナデ，灰釉	密	灰黄	
591	16-3	土師器	鍋	中道	-	表土	18.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，工具ナデ （内）ヨコナデ，ハケ	密	灰白	
592	16-4	土師器	鍋	中道	-	表土	20.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
593	19-5	土師器	鍋	中道Ｂ	B38	包含層	22.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
594	16-7	土師器	鍋	中道Ｂ	-	表土	23.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，ナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
595	16-5	土師器	鍋	中道	-	表土	26.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	浅黄橙	外面煤付着
596	16-6	土師器	鍋	中道Ｂ	-	表土	28.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	灰白	外面煤付着
597	20-2	土師器	鍋	立会Ａ	-	包含層	31.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ（内）ヨコナデ，工具ナデ，ユビオサエ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
598	21-1	土師器	鍋	中道Ｂ	-	表土	33.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，工具ナデ	密	灰白	外面煤付着
599	19-1	土師器	鍋	中道Ｂ	B37	包含層	34.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，ナデ	密	にぶい黄橙	外面煤付着
600	25-1	土師器	鍋	中道Ａ	-	表土	38.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ（内）ヨコナデ，ナデ，、ユビオサエ	やや密	淡黄	
601	20-1	土師器	鍋	立会Ａ	-	包含層	29.0	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ハケ（内）ヨコナデ，工具ナデ，ユビオサエ	密	灰黄褐	内外面煤付着
602	22-2	土師器	鍋	中道Ｂ	-	表土	29.0	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ユビオサエ （内）ヨコナデ	密	浅黄橙	外面煤付着
603	22-3	土師器	鍋	中道Ｂ	-	表土	31.6	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	にぶい黄褐	外面煤付着
604	22-1	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	28.6	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ （内）ヨコナデ	密	にぶい橙	
605	23-1	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	32.2	-	-	口縁部 2/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ハケ，ユビオサエ（内）ヨコナデ，工具ナデ	密	浅黄橙	外面煤付着
606	24-2	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	35.2	-	-	口縁部 4/12	（外）ヨコナデ，ナデ（内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ	密	淡黄	外面煤付着
607	24-1	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	34.4	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ハケ （内）ヨコナデ，工具ナデ	密	浅黄橙	
608	23-2	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	34.1	-	-	口縁部 5/12	（外）ヨコナデ，ナデ，ハケ （内）ヨコナデ，ナデ，ユビオサエ	密	灰白	
609	21-2	土師器	羽釜	中道Ｂ	-	表土	37.5	-	-	口縁部 1/12	（外）ヨコナデ，ハケ （内）ヨコナデ，工具ナデ	密	灰白	外面煤付着

鉄製品　　法量の※印は残存計測値

NO	実測番号	器種	地区	グリッド	遺構･層位	法量（cm）			特記事項
						長	幅	厚	
465	101-3	釘	中道Ｂ	B39・C39	SK1	※4.4	0.6	0.6	
466	101-4	不明	中道Ｂ	B39・C39	SK1	※2.8	0.3	0.5	
496	101-2	不明	中垣戸	I10	SE34	※10.9	0.5	0.5	
549	101-1	釘	中道Ｂ	B37	Pit1	8.0	0.6	0.5	
589	101-6	不明	中道Ｂ	B36	包含層	3.5	※5.2	0.4	鋳造品
590	101-5	鏨	中道Ａ	28～30	包含層	※4.6	0.5	0.6	

Ⅴ　総　括

1．縄文早期の野添大辻遺跡

（1）縄文早期集落の規模と構成

①遺跡の立地環境

遺跡は宮川右岸の段丘上に位置する。この段丘は、後背の山地から宮川へ流入する小河川や開析谷で短冊状ないし舌状に区切られている。近隣の縄文遺跡である樋ノ谷遺跡(1)は小河川のそば、野手遺跡(2)は、宮川に接した舌状の台地に立地しており、野添大辻遺跡もまた、水資源の利便性の高い河川そばを選地しているのであろう。

現状の地形はほぼ平坦であるが、微地形はやや複雑である。範囲確認調査やその後の第２次調査の成果によれば、旧地形は起伏が激しく、所々に黒ボク土の埋没谷が認められた。このことから、中・近世遺構面の平坦な地形は、縄文早期以後に進行した、黒ボク土の分厚い堆積により形成されたとみられる。

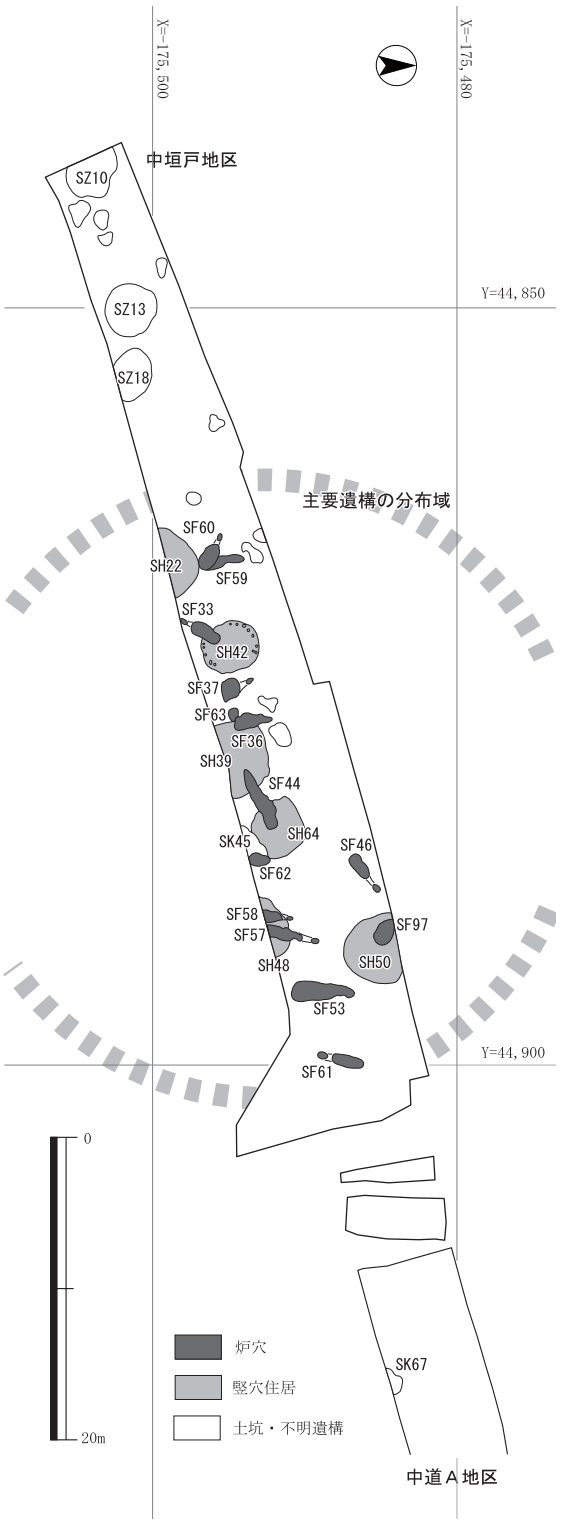
縄文遺構が集中する中垣戸地区は、こうした埋没谷や開析谷によって短冊状に区切られた平坦地であり、居住に適した場所であっただろう。

②遺構・遺物の分布域と集落構成

竪穴住居・炉穴など、主要な遺構の分布は、直径約 40 ｍの範囲に収まる（第 39 図）。また、遺物の分布範囲は、遺構の分布範囲と重なっており、中垣戸地区と中道Ａ地区の一部以外の場所では縄文時代の遺物は得られていない。中垣戸地区内でも、ＳＨ 22 より西側は遺構・遺物ともに希薄となる。

なお、平成 25 年度には本次調査の約 70 ｍ東側で第２次調査を実施したが、縄文時代の遺構は確認できなかった。これらの状況から、縄文早期の遺構は、本調査地の一部に限定される可能性が高い。

こうした集落の規模は、県内の縄文早期集落と概ね一致する。亀山市大鼻遺跡(3)では、竪穴住居を中心とした、径 10 ～ 15 ｍほどの遺構群が基本的なユニットとなる。１～２棟の住居が建て替えられながら並存し、付近に炉穴が形成されるのが、基本的な生活の最小単位であろう。四日市市中野山遺跡(4)では、炉穴は広範囲に分布するが、竪穴住居は同様のあり方を示す。



第 39 図　縄文時代主要遺構分布図（1：500）

一方、津市美里町西出遺跡(5)は少なくとも４つのユニットで構成され、居住域は径40mほどにおよぶ。松阪市鴻ノ木遺跡(6)では、竪穴住居がさらに散在的にみられる。

野添大辻遺跡は、遺構の分布域・規模とも、西出遺跡の例に近い。遺構は重複しない６棟の竪穴住居と、その付近に炉穴が集中する状況から、数棟程度の竪穴住居群を中心に、その近辺に炉穴を掘削する様子がうかがえる。土器型式の幅が小さく、本調査区内で重複する竪穴住居がないことも特筆されよう。

③主要遺構の特徴

縄文早期の遺構は、県内の事例と概ね共通する特徴を備えている。改めてその様相をまとめたい。

竪穴住居　いずれも直径４～５ｍの不整円形または楕円形で、底面は浅い皿状を呈する。ＳＨ42は壁際に垂木穴が環状に認められる。明確な屋内施設や貼床をもつものはないが、ＳＨ64では住居中央から南側（出入口か）の機能面が硬化していた。

炉穴　煙道付炉穴は、開口部（焚口）に比して小さな煙道（煙出部）が付くもので、三重県南勢地方に一般的な「東海型」である(7)。集石炉は確実なものがない。煙道付炉穴の主軸や開口方向に特に傾向はないが、近接する炉穴は同一の主軸をとる。

炉穴の構築には、先行する竪穴住居や炉穴の掘方を利用し、省力化を図ることが指摘されている(8)。長大なＳＦ44やＳＦ53は､既存の炉穴を煙道側（奥側）へ拡張進展した可能性が高い。一方、竪穴住居に接する炉穴のうち、ＳＦ33、ＳＦ44、ＳＦ57は住居埋没後に掘削された炉穴であった。本遺跡では、必ずしも上記の炉穴構築過程は採用されておらず、住居群に近接して炉穴が構築されるという、空間構成上の一般的な特徴を指摘するに留めておきたい。

炉内には特に施設は認められない。ただし、ＳＦ60は煙道部下に若干の礫敷きが認められた。

炉内の被熱状況は、焚口と、煙道天井の手前側が強く被熱する。埋土には炭化物はあまり残らない。このことから、煙道付炉穴は空気の恒常的な供給を要し、燃料が完全燃焼する性格のものであることが追認できた。またこのためか、種子などの動植物遺体は得られなかった。

炉穴の廃絶にあたり、煙道部を閉塞するように礫を充填するものや、焚口に石皿等を廃棄するものが複数認められた。炉穴の廃絶に関わる、何らかの儀礼的行為をうかがわせるものである。

（２）押型文土器をめぐる問題

①出土土器の大別（第40図）

まず、本遺跡の土器を、器形・文様の組み合わせによって２群に大別し、その位置づけを行いたい。なお、属性の組み合わせは排他的なものではなく、あくまで大まかな傾向として捉えられる。

１群：口縁部以下を多段の文様構成とし、独立した区分文様としての頸部文様帯を持つもの。器形f1（口縁部r1）＋文様構成c1＋円棒状工具を多用。

２群：口縁部以下を刺突文で充填し、頸部文様帯を持たないもの。器形f2（口縁部r2）＋文様構成c2・c3＋ヘラ状工具を多用。

②土器の時間的位置づけ

本遺跡の押型文土器は、大鼻式や神宮寺式を伴わない、大川式単純の資料である。主体となるのは山田編年の大川ａ新の土器であろう(9)。しかし、鴻ノ木遺跡における大川ａ新の標識資料に比べると、以下の要素がより濃く認められる。

・１群・２群とも器壁がやや薄手である。
・口縁部・頸部の文様帯がやや幅広くなり、文様帯間に狭い無文帯を挟む例がある。
・頸部以上がやや長く、外反も緩やかとなる。
・ヘラ状工具が多用される。

このうち、器形の変化や器壁の薄手化、ヘラ状工具の多用といった要素は２群の方により顕著に現れている。鴻ノ木遺跡の報告書では、２群に相当する資料の一部を大川ｂ式に位置付けているが、これらの点をより重視したものであろう。また、１群においても、口縁端部が外傾したり、やや特異な刺突と山形文・斜格子目文を組み合わせるもの（167・295･341）などは､時期が下る可能性がある。しかし、これらに伴う市松文は、原体軸に対して横長のものが主体であり、かつ斜傾する格子目文や船形沈文は皆無であることから(10)、大川式の古相に留めておきたい。

野添大辻遺跡、鴻ノ木遺跡ともに、１・２群の土器が同一遺構内で混在しており、２群のみを時期を

下げて考えることは難しい。よって、大きく１・２群を同時期のものと捉え、大川ａ式新の中でもやや新相に位置付けておくことにしたい。ただし、２群において新出の要素がより強く認められることは注意が必要であろう。

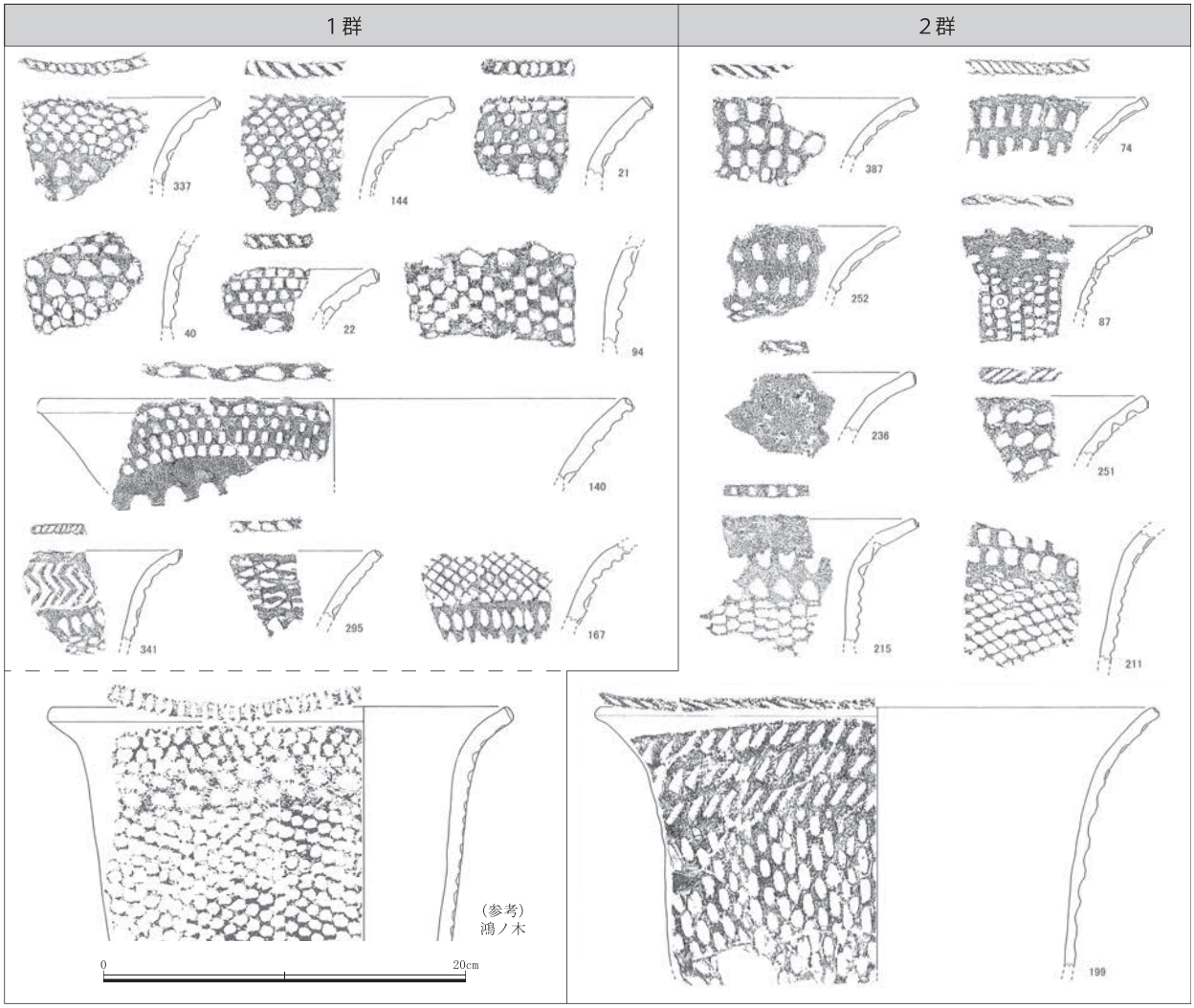
三重県内では、大川ｂ式古相の良好な資料がなく、型式設定には奈良県大川遺跡の資料に多くを拠っているのが現状である。本資料により、当該期の土器編年がより充実することを期待したい。

②大川式の地域性

本遺跡の押型文土器の大きな特徴は、２群（文様構成 c2 類）の多さである。このような傾向は、すでに矢野健一氏が「三重県では口縁部直下に刺突を加える例が比較的多い」として、大川式古段階の地域性として指摘している(11)。鴻ノ木遺跡や鐘突遺跡においても一定量が出土していたが、小片が多かった。今回、ＳＦ 60 出土土器（199）によって、その全容が明らかになり、かつ、宮川流域にもこうした土器が確認されたことは意義深い。

三重県内では、２群の土器は櫛田川流域に集中している。近畿～東海地方では、滋賀県、岐阜県、愛知県にはない(12)が、奈良県鵜山遺跡(13)で一定量出土している。現状では、２群は高見山地周辺（櫛田川・宮川流域）から大和高原（名張川流域）に特徴的な土器であるといえよう。しかし、津市美里町西出遺跡に少なく、伊賀市青山町花代遺跡(14)には見られないなど、上記の両地域に接する布引山地周辺に少ない点は不可解であり、時期差などの要因が反映されているかも知れない。当地域における今後の資料の増加が待たれる。

さて、大鼻式から神宮寺式に至る押型文土器の編年においては、頸部文様帯の成立とその消滅が重視されてきた経緯がある(15)。言い換えれば、１群土器の動向が、押型文土器前半期の編年の根幹部分をな



第 40 図　押型文土器分類図（1：4）

しているのである。一方で、頸部以上を刺突文、胴部を市松文で施文する文様構成は大鼻式の一部にも認められ、また大川ｂ式の標識遺跡である松阪市射原垣内Ａ遺跡では、文様構成 c2 類をとる口縁部片が存在するが、このような文様構成の系譜や地域性の動態は、資料の少なさもあって十分に明らかにされているとはいいがたい。

仮に、大川式において２群が卓越する南勢地域の地域性が、前後の時期にも認められるとすれば、文様帯の変遷を指標とした編年にも影響が生じよう。こうした地域性と、押型文土器全体の変遷の関連については、今後検討をすすめていきたい。

（３）野添大辻遺跡の石器組成と生業

①石器組成の特徴

本遺跡の石器組成は、剥片石器がごく少なく、礫器や磨石・石皿等の礫石器が主体となること、なかでも礫器が最も多いことが特徴である。

縄文早期は、石器組成に占める礫石器類の比率が上昇する時代であるが、近畿・東海西部で礫器が組成中で高率を占める遺跡は、和歌山県高山寺貝塚や鴻ノ木遺跡などごく限られていた(16)。ところが近年、四日市市中野山遺跡で、押型文前半期の煙道付炉穴や集石炉から多くの礫器が確認された。中野山遺跡では石鏃等の剥片石器が少なく、本遺跡と非常に似通った組成をとる点も注目されよう。県内ではこのような遺跡が、今後も増加する可能性が高い。

遊動性・回帰性の高い縄文早期の生活では、可搬性の高い小型の石器や搬入石材などは、持ち去られたり、他所から持ち込まれる可能性がある。そうした方法的限界はあるものの、石器組成が集落居住者の生業を反映するものと単純に解すれば、野添大辻遺跡では、弓矢猟や削器による解体を要しない植物質食料や宮川の水生資源の利用の比重が高かった可能性が考えられる。

この点は、本遺跡における煙道付炉穴の用途を考える上でも重要で、植物質食料の調理や、魚等の燻製に用いられたと想定しておきたい。しかしながら、こうした想定を裏付ける具体的な材料はなく、動植物遺体の検出や植物性食料の特定といった多角的な検討が欠かせない。今後の課題である。

②石材や使用痕からみた礫器の性格

野添大辻遺跡では、多量の礫器とともに、礫器の製作に関連する剥片が一定量認められた。こうした礫器製作関連遺物は、近畿地方において、鴻ノ木遺跡と本遺跡でのみ抽出されているものである。三重県では、剥片石器の石材はチャート・サヌカイトにほぼ限定され、砂岩などの堆積岩が用いられることは基本的にないが、この点は、削器と礫器が同石材の石器製作体系に包摂される、関東の撚糸文期とは大きく異なる。礫器関連の剥片は不定形で、二次加工を受けるものは少なく、明確な使用痕もない。

本遺跡の礫器は、以下の特徴を有している。

・用いる石材の質は様々であり、礫器の形状の多様性を生む。刃部の硬軟・鋭さはさほど重要視されていない。

・肉眼観察による限り、使用痕が認められない。加工対象が軟質であったか、きわめて短期的・即時的な使用によるものであった可能性が高い。

これらは、本遺跡の礫器がきわめて「便宜的」な性格の強い石器であることを示唆するもので、剥片石器や磨製石斧が石材を厳密に選択し、定型的な製作技法を有し、廃棄に至るまで転用や補修を受ける「管理的」(17) な石器であることとは対照的である。おそらく、必要に応じて礫を持ち込み、使用の場で刃部を作り、使用が終われば即、廃棄されるような性格の道具であっただろう。本遺跡における礫器の多さは、こうした製作から廃棄に至る行動パターンを反映したものと考えたい。

礫器の機能は、使用痕から明らかにできなかったが、打撃・圧削をこなす万能かつ即時的な道具として、縄文早期の生業を支えたものと推測される。

③早期集落における礫利用の問題

Ⅲ章で述べたように、中垣戸地区の縄文遺構群の周辺に限り、使用痕や加工痕の認められない礫が多く出土した。前述した礫器の製作と廃棄に関わる行動パターンと合わせて考えれば、こうした礫のなかには礫器のほか、敲石や磨石の原材が含まれよう。

一方で、礫器と認定できない分割礫も多くみられた。同様の事象はすでに鴻ノ木遺跡において確認されており、集落内に礫を持ち込み、盛んに打ち割るという様子が、野添大辻遺跡においても窺えた。石器の製作に帰することができない礫の利用については、残念ながら十分な解釈を与えることができてい

ない。礫の空間分布に留意するなど、有効な調査方法を今後確立していきたい。　（櫻井）

註

（1）三重県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告（樋ノ谷遺跡）』1983年。

（2）大宮町史編集委員会『大宮町史』歴史編、1987年。

（3）三重県埋蔵文化財センター『大鼻遺跡』1994年。

（4）三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012年。以下、中野山遺跡については本書に拠る。

（5）三重県埋蔵文化財センター『西出遺跡・井之広遺跡』1990年。以下、西出遺跡については本書に拠る。

（6）三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡（下層編）』1998年。以下、鴻ノ木遺跡については本書に拠る。

（7）小濱学「炉穴とその機能」『縄文時代の考古学』５、同成社、2007年。

（8）註7前掲書。

（9）山田猛「押型文土器の型式学的再検討」『三重県史研究』４、1988年、および山田猛「大鼻式･大川式の再検討」『研究紀要』２、三重県埋蔵文化財センター、1993年。

(10) 矢野健一「押型文系土器（大川式･神宮寺式土器）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、2008年。

(11) 矢野健一「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌』78－4、日本考古学会、1993年。

(12) 文様構成の地域性については、関西縄文文化研究会編『押型文土器期の諸相』（第12回研究集会発表要旨集）の土器集成を参考とした。

(13) 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『鵜山遺跡』2006年。

(14) 青山町教育委員会『花代遺跡（Ａ・Ｂ地区）発掘調査報告書（遺物編）』2000年。

(15) 註9前掲。

(16) 大下明「近畿地方と東海地方西部における押型紋土器期の石器群について」『縄文時代の石器―関西の縄文草創期・早期―』関西縄文文化研究会、2002年。

(17) 阿子島香「「管理的」石器と「便宜的」石器」『石器の使用痕』ニューサイエンス社、1989年。

２．中世の野添大辻遺跡

（１）中世集落の時期

野添大辻遺跡第１次調査では、南伊勢中世Ⅲ期[1]、すなわち室町時代を中心に中世Ⅳ期（戦国時代）にかけての遺構が確認できた。ただし、遺構に伴わない出土遺物には中世Ⅰｂ～Ⅱ期（平安時代末期～鎌倉時代）のものがある。中世Ⅰ期よりも古い遺物は確認されていないので、野添大辻遺跡の中世集落は中世Ⅰ期にはじまり、時期による濃淡はあっても、ほぼ中世を通じて存在していると考えてよいであろう。

これまでに確認されている旧伊勢国域の中世集落遺跡は、同地点で全時期を通して継続する事例は極めて少ない。時期毎の諸環境により地点移動があるためと考えられる。しかし、宮川上流域の野添地区は、丘陵と川に挟まれ、人の居住可能範囲は自ずと限定される。そのため、エリア内での集落展開動向を追求できる可能性がある。

出土遺物から、第１次調査区近隣に中世Ⅲ期以外の時期の集落が展開している可能性が考えられる。当遺跡の調査進展に即して、中世集落の時間的変遷という点からの追求が必要である。

（２）集落構成

野添大辻遺跡第１次調査で確認できた中世遺構は、ピット群から想定される掘立柱建物、井戸、土坑、区画溝などである。井戸は中垣戸地区で２基、中道Ｂ地区（立会）で１基確認されている。調査区の制限があるが、ひとまとまりの掘立柱建物群に１基の井戸が伴うというスタイルだったと考えられる。

石組を伴うＳＫ１は、多気北畠氏遺跡土井沖地区（津市美杉町）[2]、東沖遺跡（松阪市）[3]などで確認されており、概ね中世Ⅲ期を中心とした中世後期に見られる。平野部ではなく、比較的山間部にある遺跡でこのような遺構が認められる傾向があることにも今後注意が必要である。　（伊藤）

註

（1）伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２、2008年。

（2）三重県埋蔵文化財センター『多気遺跡群発掘調査報告』1993年。

（3）三重県埋蔵文化財センター『下茅原遺跡（第１次・第２次）、東沖遺跡発掘調査報告』2009年。

3．今後の課題と展望

本書で触れられなかった事項に、遺跡周辺の古環境の問題がある。本書の作成と並行して、年代測定をはじめとする自然科学分析を進めている。この成果については、別の機会に報告するが、主にこの点について記し、今後の課題と展望を示したい。

（1）縄文時代早期の年代

土器付着炭化物の ^{14}C 年代測定と、炉穴底面から採取した炭化材の ^{14}C 年代測定を実施した。ともに平成 25 年 12 月現在で測定結果が得られたので速報を示すが、正式なデータは次年度以降に刊行予定の第２次調査報告書を参照されたい。

①土器付着物の年代測定

遠部慎氏（徳島大学埋蔵文化財調査室、当時）に試料の採取・測定を依頼し、うち２点で測定結果が得られた。土器 235（分析番号 MEMB22）は 9,615 ± 15BP(-26.40 ± 0.37‰)、土器 305(MEMB24)は 9,790 ± 30BP（-19.66 ± 0.33‰）であった。ただし、後者は測定値が -20‰以下と低く、何らかの影響を受けている可能性が高いという。

②炉穴出土炭化材の年代測定

煙道付炉穴 11 基を対象として、各炉穴の底面付近より採取した炭化材１点ずつを分析した。その結果、^{14}C 年代で 9,658 ± 31BP（-26.80 ± 0.11‰）～ 9,491BP ± 30BP（-27.94 ± 0.11‰）の測定値が得られた。9,500BP 前後のものが７点と最も多い。

③測定値の評価

三重県における大川式関連の年代測定例（ＡＭＳ法普及前）には鴻ノ木遺跡の炉穴出土炭化材・種子の測定例があり、^{14}C 年代で 10,000BP を中心とする測定値が得られている（1）。また明和町コドノＢ遺跡（大川～神宮寺式）で 9,630 ± 100BP･8,830 ± 120BP（2）の測定例がある。

ＡＭＳ法普及後は、鈴鹿市東庄内Ａ遺跡の炉穴出土炭化材（9,574 ± 45BP ～ 9,388 ± 46BP）のほか（3）、鴻ノ木遺跡等の土器付着物の分析で、9,590 ～ 9,430 ± 50BP の測定結果が得られている（4）。

今回実施した野添大辻遺跡の測定データはこれらと大きな齟齬はなく、かつ炉穴相互で大きな測定値の差は見られない。野添大辻遺跡は、土器の出土量も多く、三重県南勢地域の炉穴出土炭化材の示準的な年代測定例となりうるものである。

（2）古環境の復元

古環境復元のため、炉穴出土炭化材の樹種同定や土壌（黒ボク土）の分析を実施中である。

段丘上に広くみられる黒ボク土は、縄文時代以降に形成されたと推測されるが、黒ボク土はススキ等の草本類の腐食によって生じること、その形成過程において森林環境から草原環境への変化が広域的に生じたことが、植物珪酸体の分析などから明らかにされている（5）。今回の調査では、黒ボク土下で縄文早期の遺構が確認され、当該期以後に黒ボク土が急激に形成されたと推測された。県内では黒ボク土の分析例が少なく、事例を増やしていく必要がある。

鴻ノ木遺跡などで確認されてきた炭化種子などの微細遺物については、調査期間の制約もあり検出できなかった。今後の課題である。また、磨石・石皿類の残存デンプン粒分析は、全国はもとより、県内の遺跡においても、その有効性が示されつつある。本遺跡でも今後分析を行いたい。　　（櫻井）

註

（１）三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡（下層編）』1998 年。

（２）三重県埋蔵文化財センター『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』1990 年。当分析の詳細は未報告。測定は学習院大学年代学研究室による。参考に、分析番号・^{14}C 年代（数値は丸め後）、δ^{13}C 値を示す。

SF88…GaK-20230：9,630 ± 100BP（δ^{13}C=-28.5）

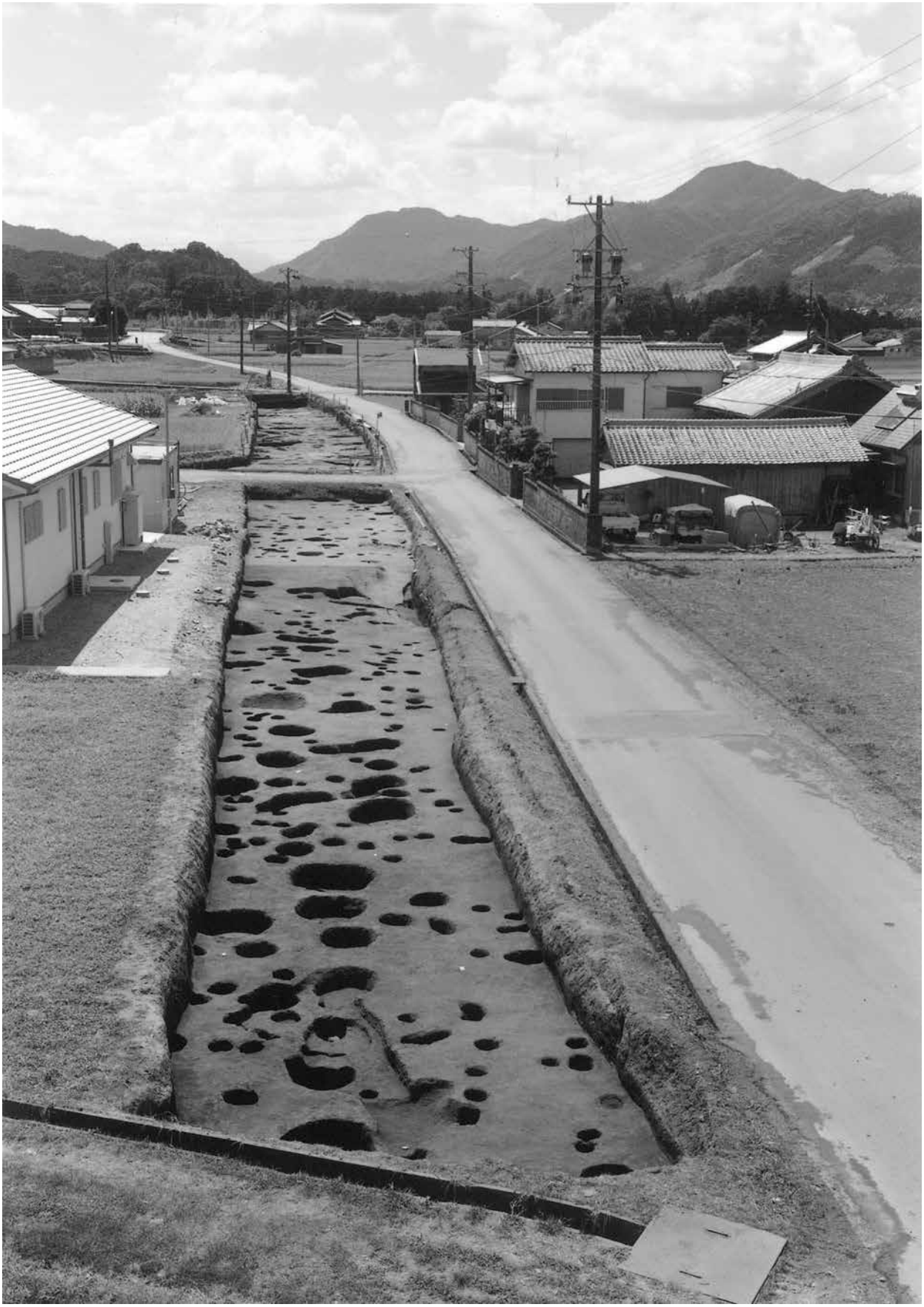
SF32…GaK-20229：8,830 ± 120BP（δ^{13}C=-27.5）

（３）三重県埋蔵文化財センター『東庄内Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告』2009 年。遺物包含層の土器から大川式のものと解されている。

（４）遠部慎・宮田佳樹「三重県における縄文時代早期土器付着炭化物の炭素 14 年代測定」『研究紀要』18-1、三重県埋蔵文化財センター、2009 年 / 遠部慎「西日本における押型文土器群の年代とその環境」『押型文土器期の諸相』関西縄文文化研究会、2011 年。

（５）加藤芳朗「黒ボク土」『アーバンクボタ』13、株式会社クボタ、1976 年。

写　真　図　版



調査区近景（東から）

中垣戸地区近景（東から）

中道Ａ地区全景（西から）

中道Ｂ地区全景（西から）

立会Ａ地区全景（東から）

中垣戸地区縄文遺構面（西から）

ＳＨ 42（北から）

SH 39（東から）

SH 39（北から）

SH 48（西から）

SH 48（北から）

SH 50（南から）

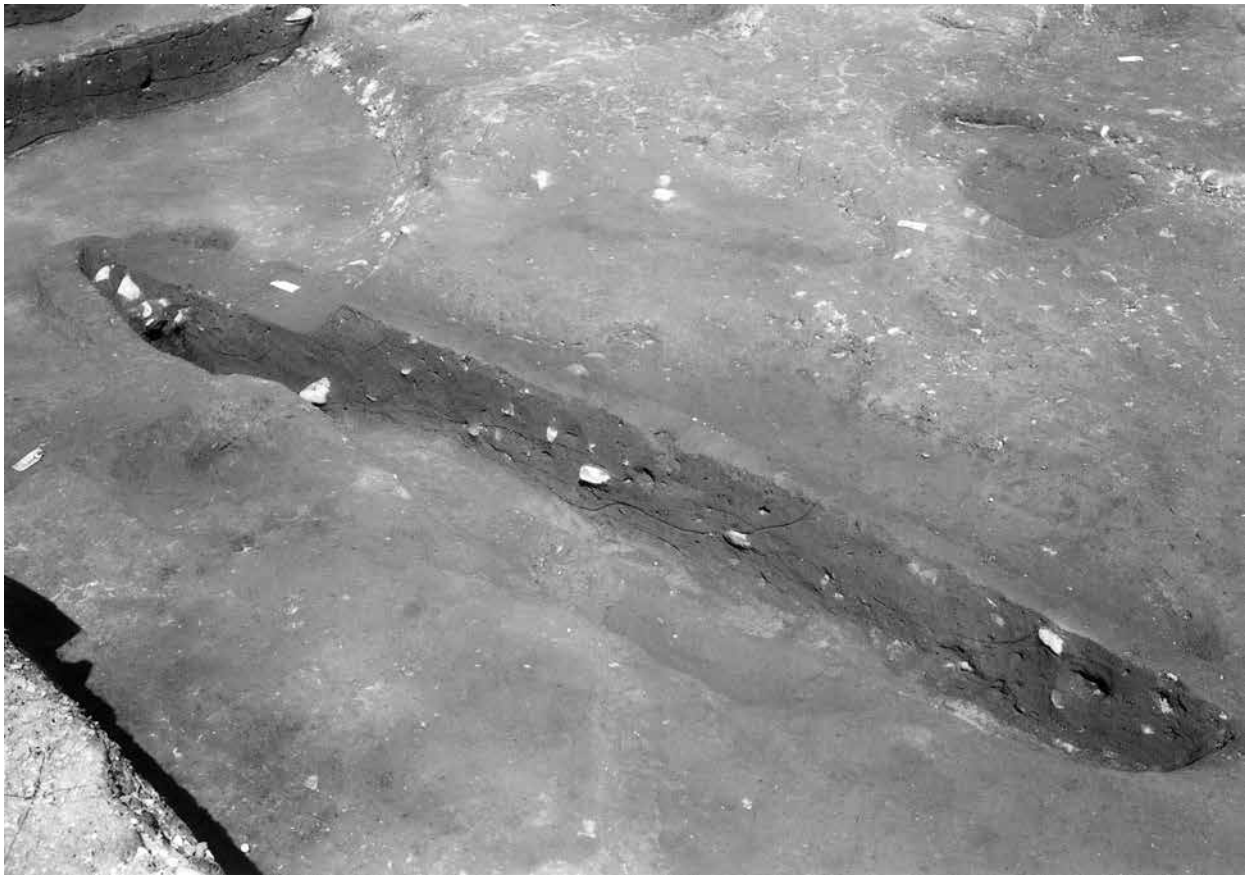
SF 33 礫群（北から）

SF 33 完掘（北から）

SF 36・37・63（南から）

ＳＦ 36（南から）

ＳＦ 37（南から）



ＳＦ 44（南から）

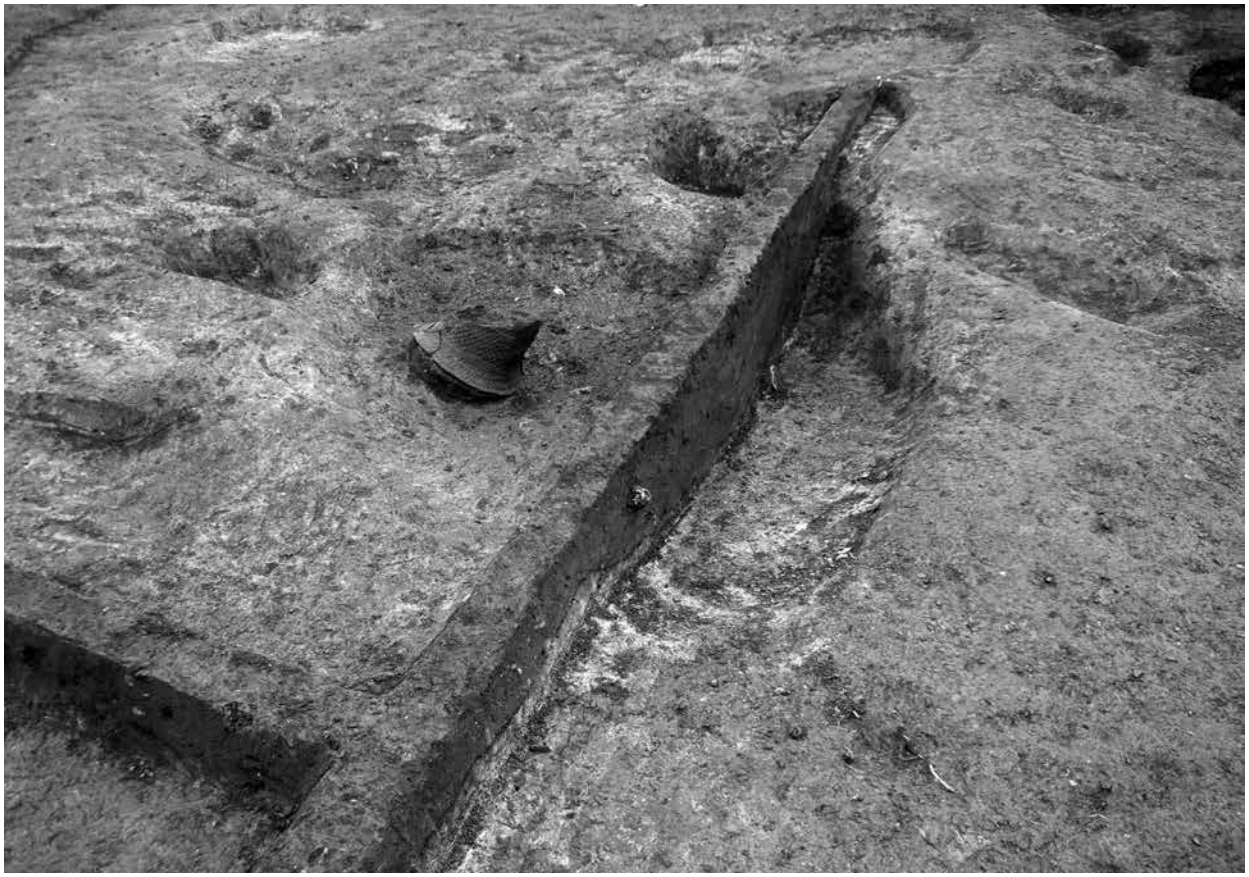
ＳＦ 46（東から）

ＳＦ 53（南西から）

ＳＦ 57 断ち割り状況（西から）

ＳＦ 59・60（南東から）

ＳＦ 60（東から）

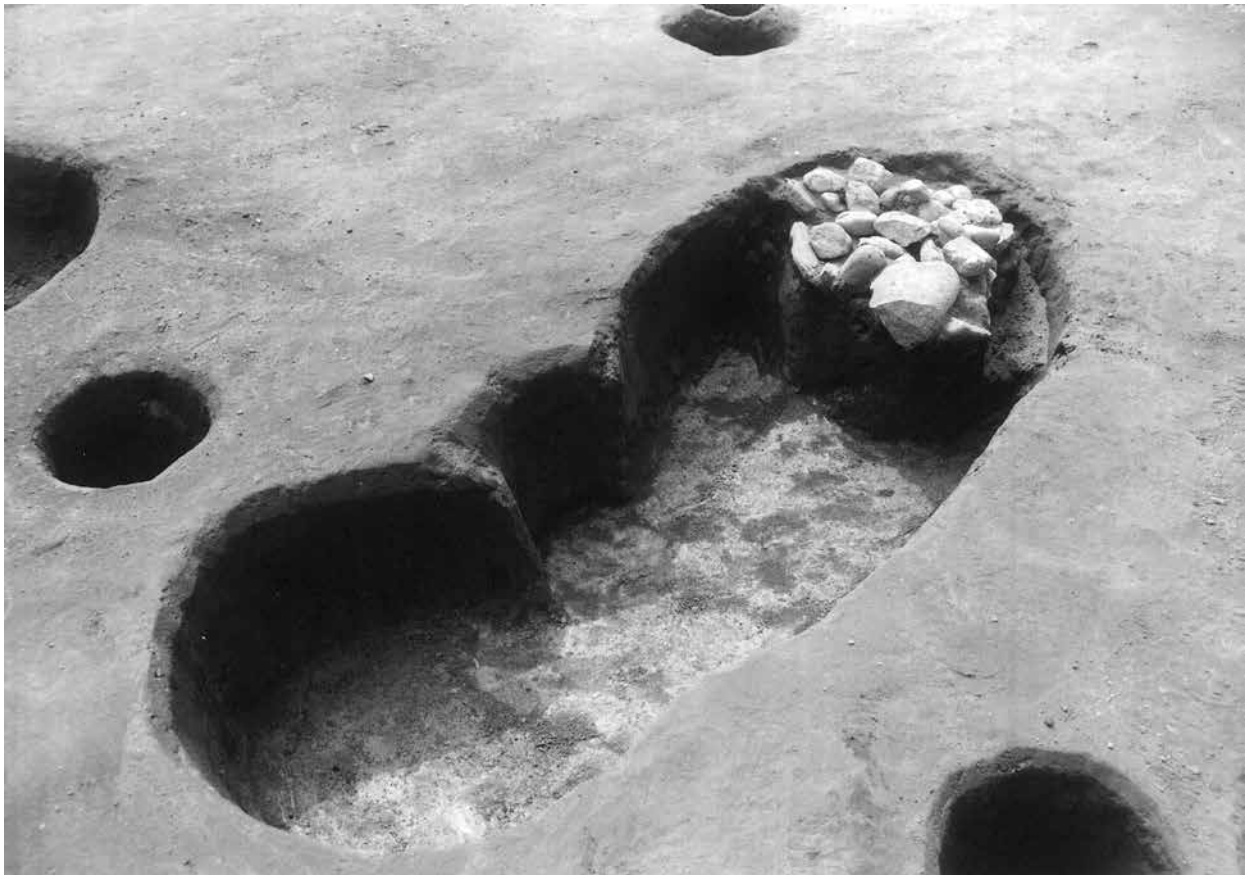


ＳＦ 60 上部押型文土器出土状況（南東から）

ＳＦ 60 上部押型文土器出土状況（南から）

ＳＦ 61（北東から）

ＳＫ 45・ＳＦ 62（西から）

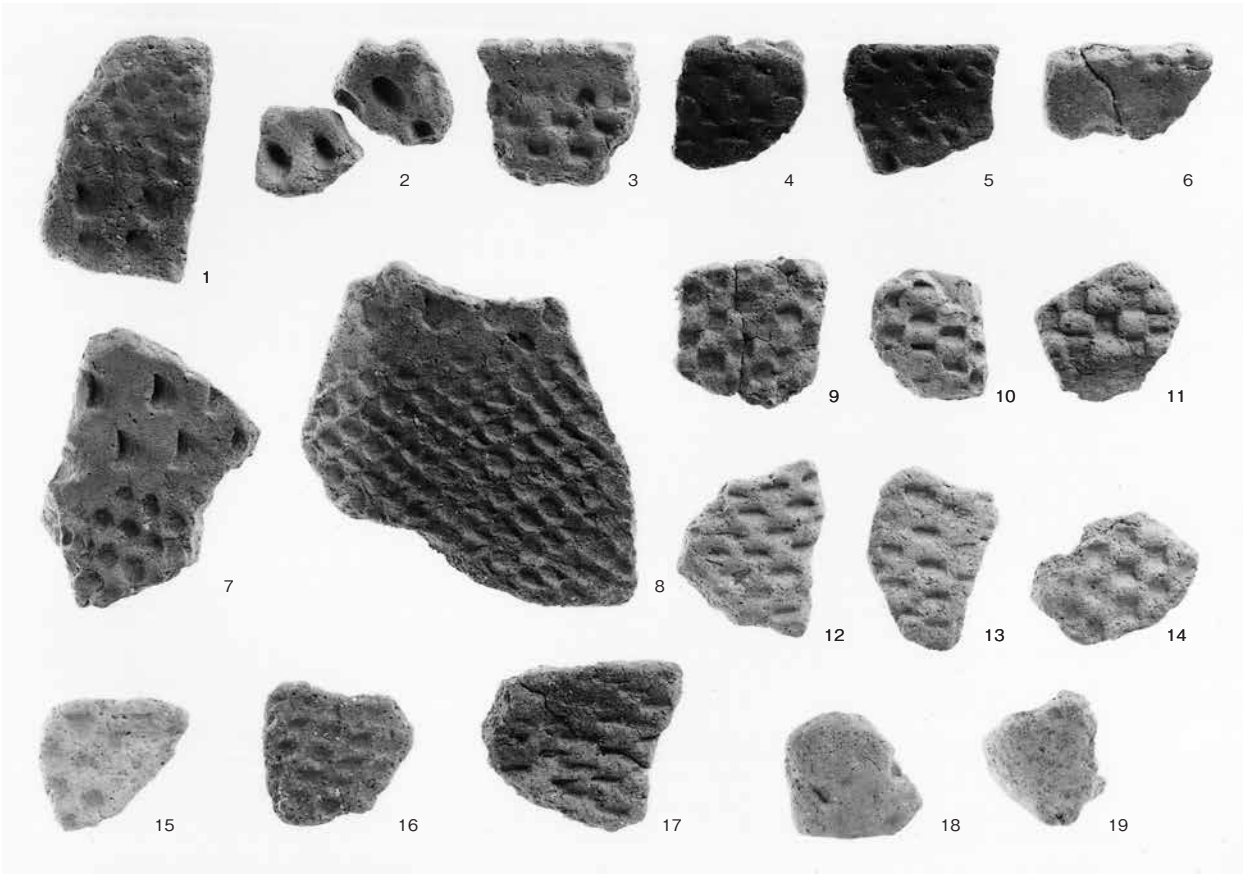


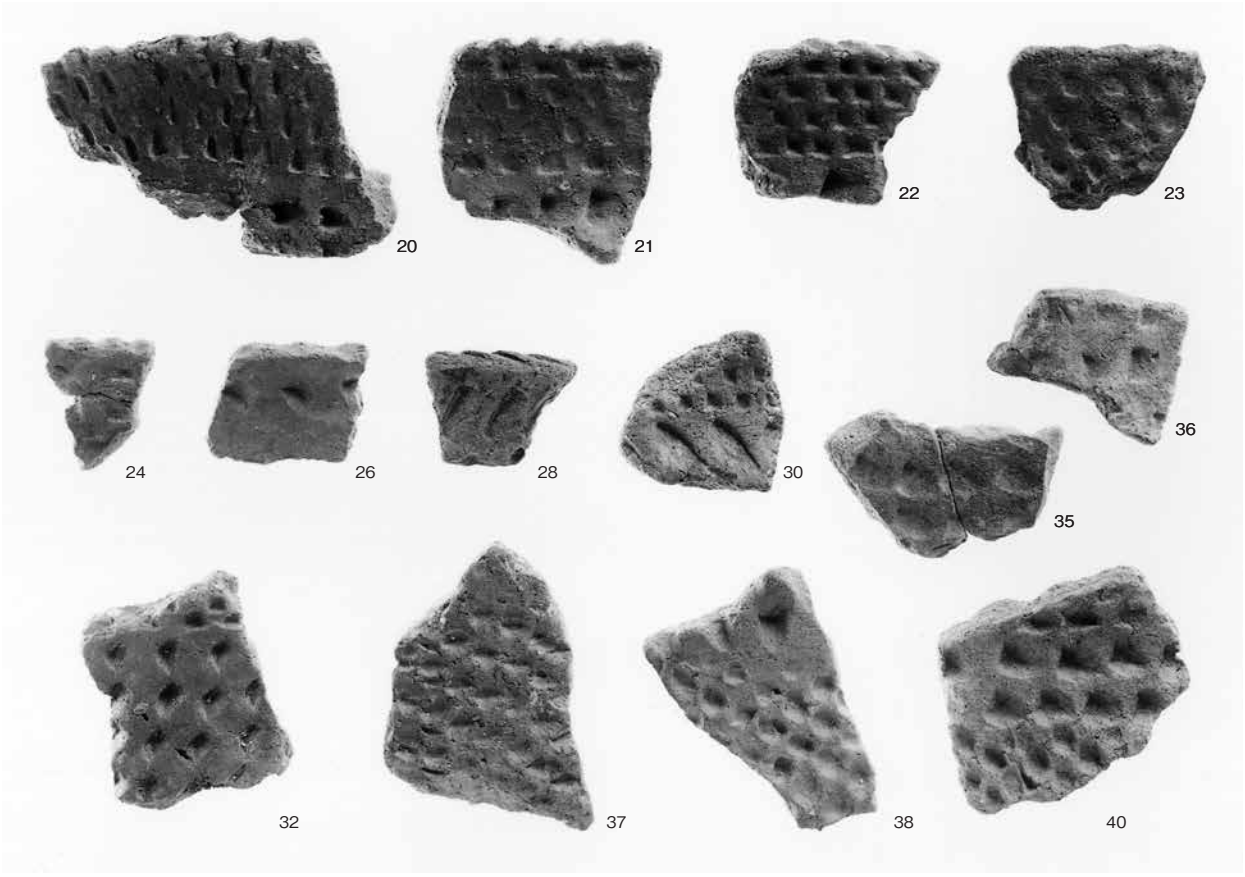
SK 75（中道A地区、東から）

SK 76（中道A地区、東から）

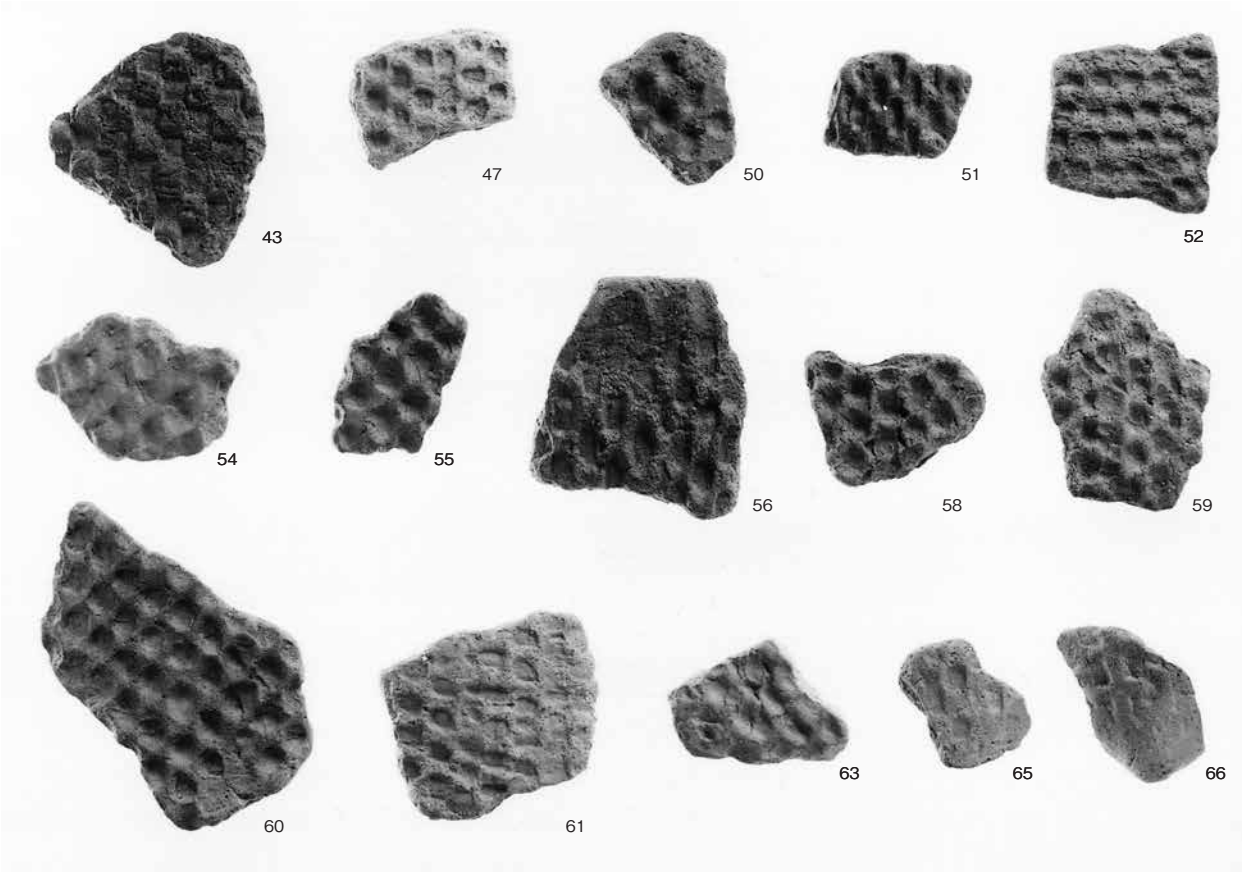
ＳＥ 28（中垣戸地区、北から）

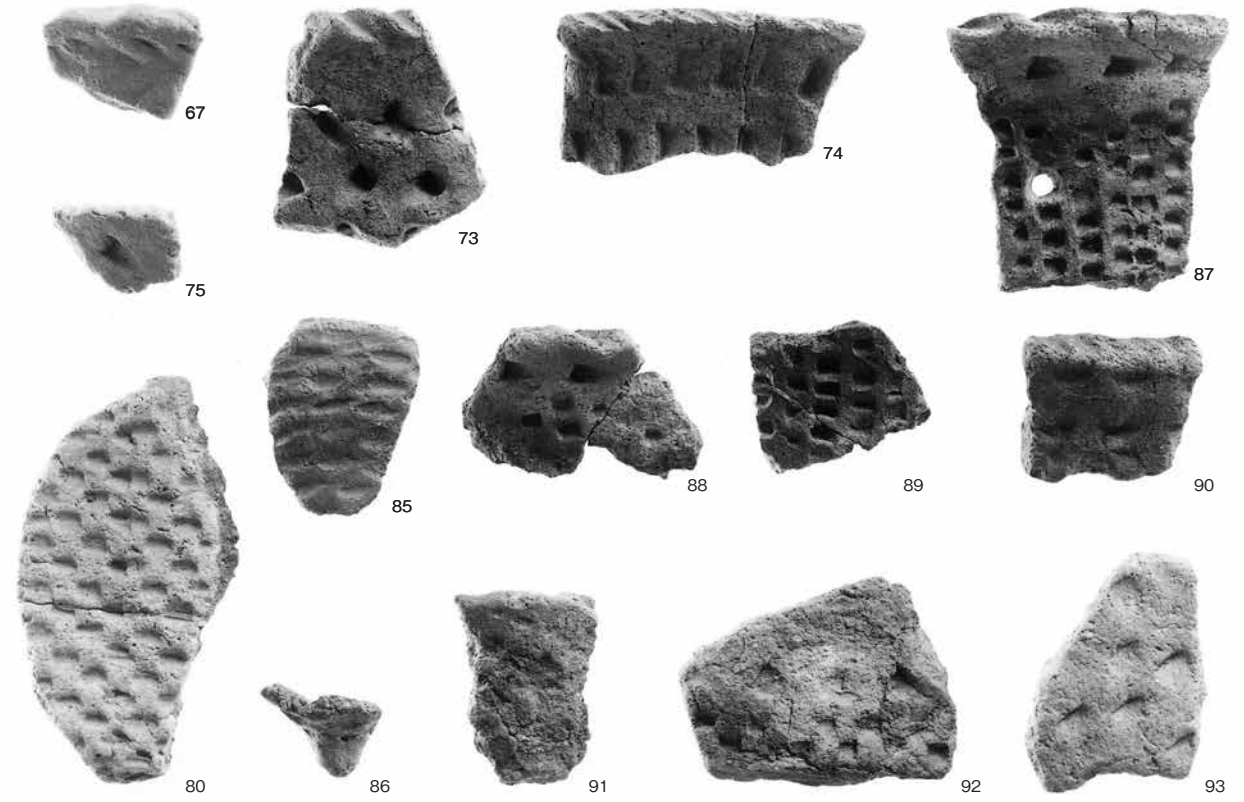
ＳＫ1（中道Ｂ地区、東から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19

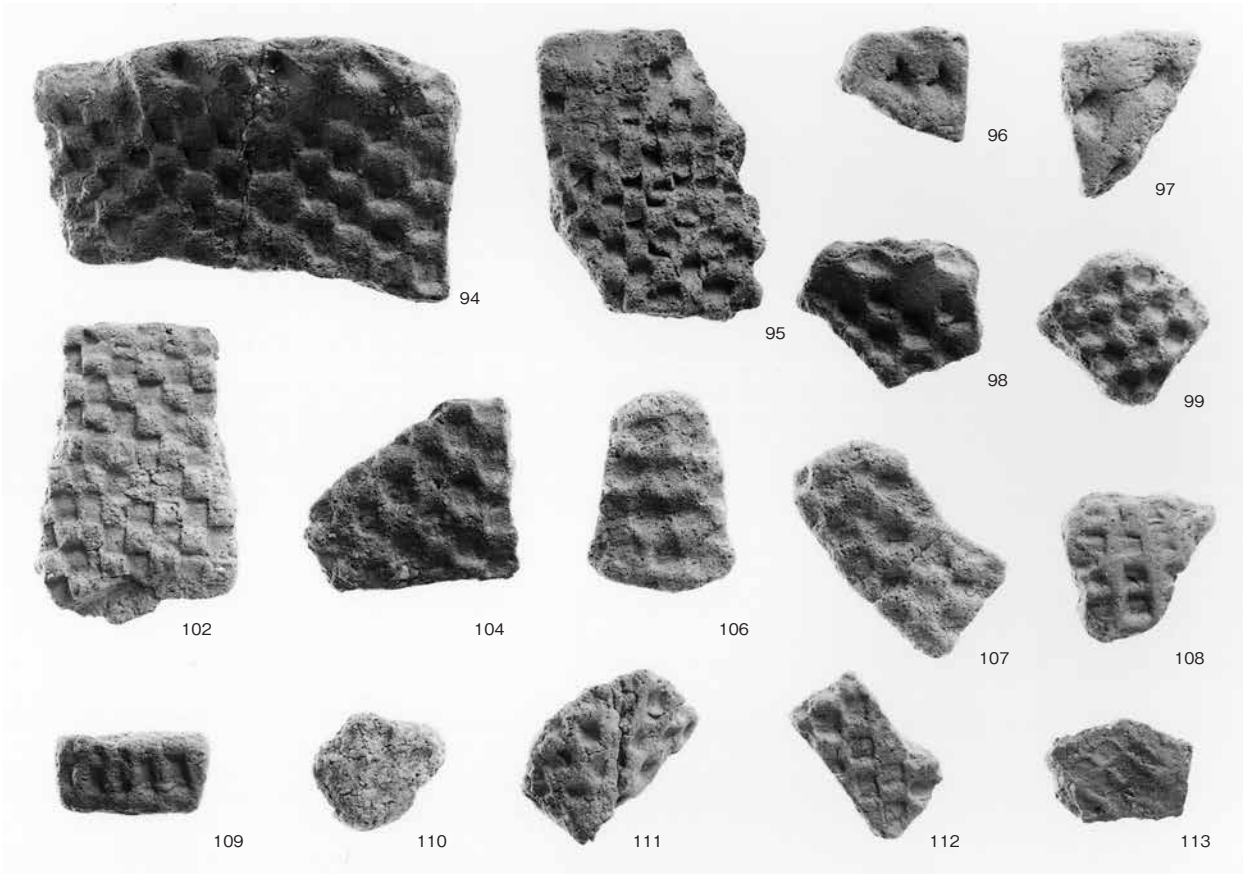

20
21
22
23
24
26
28
30
35
36
32
37
38
40

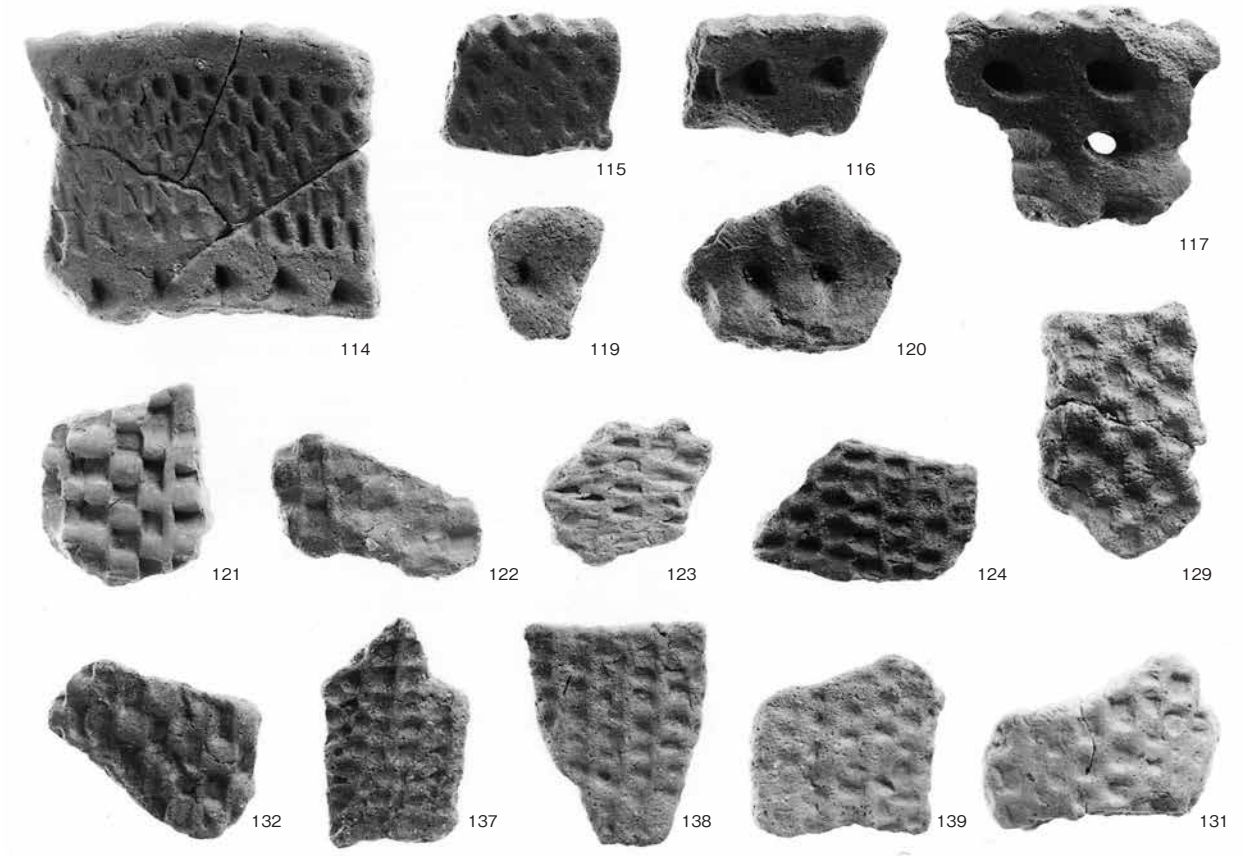
遺物　1～40


43
47
50
51
52
54
55
56
58
59
60
61
63
65
66

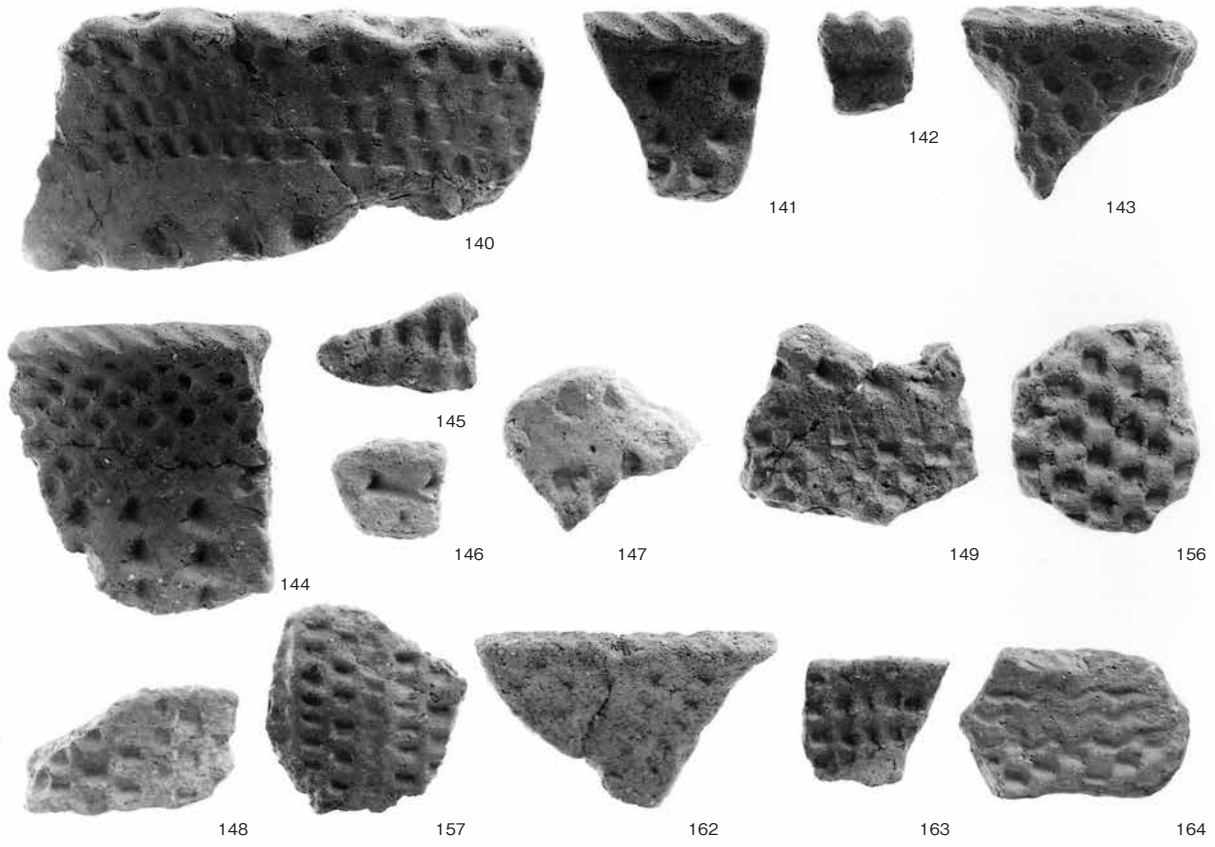

67
73
74
87
75
85
88
89
90
80
86
91
92
93

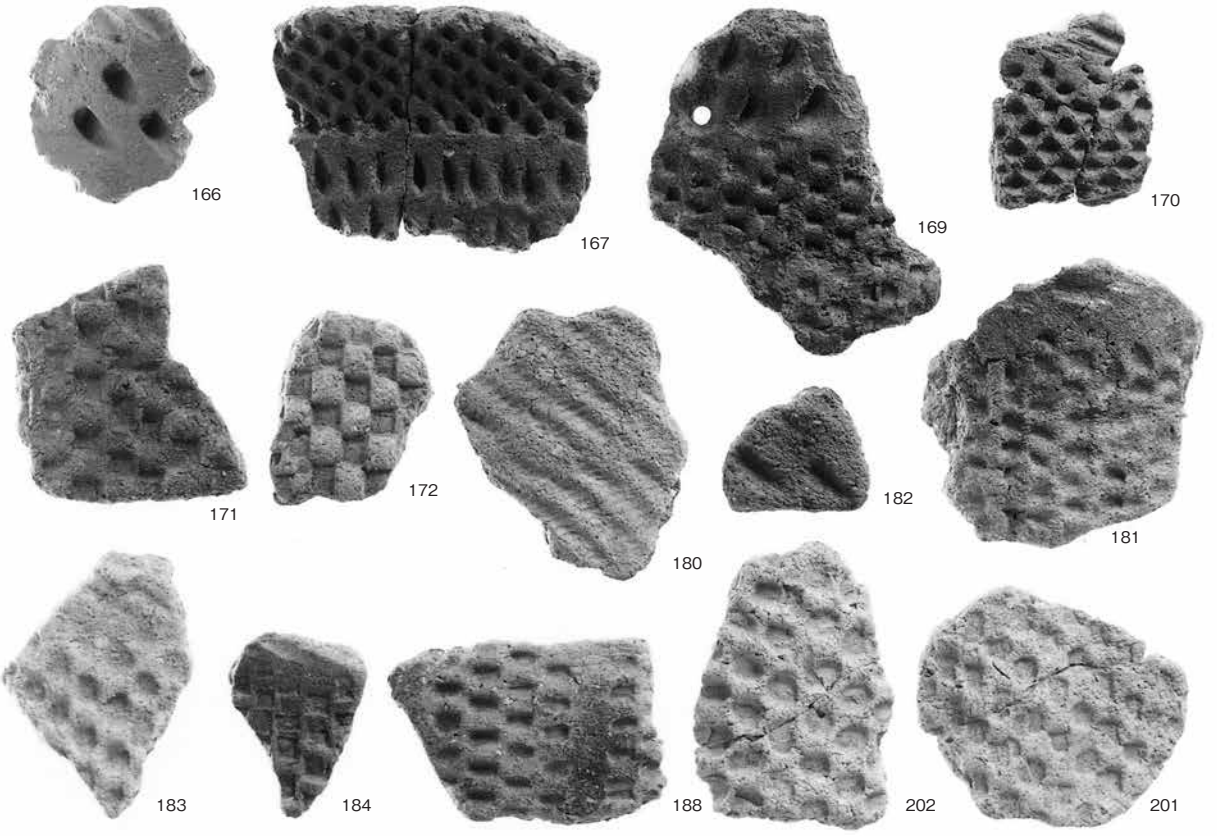
遺物　43～93


94
95
96
97
98
99
102
104
106
107
108
109
110
111
112
113


114
115
116
117
119
120
121
122
123
124
129
132
137
138
139
131

遺物　94～139


140
141
142
143
144
145
146
147
149
156
148
157
162
163
164


166
167
169
170
171
172
180
182
181
183
184
188
202
201

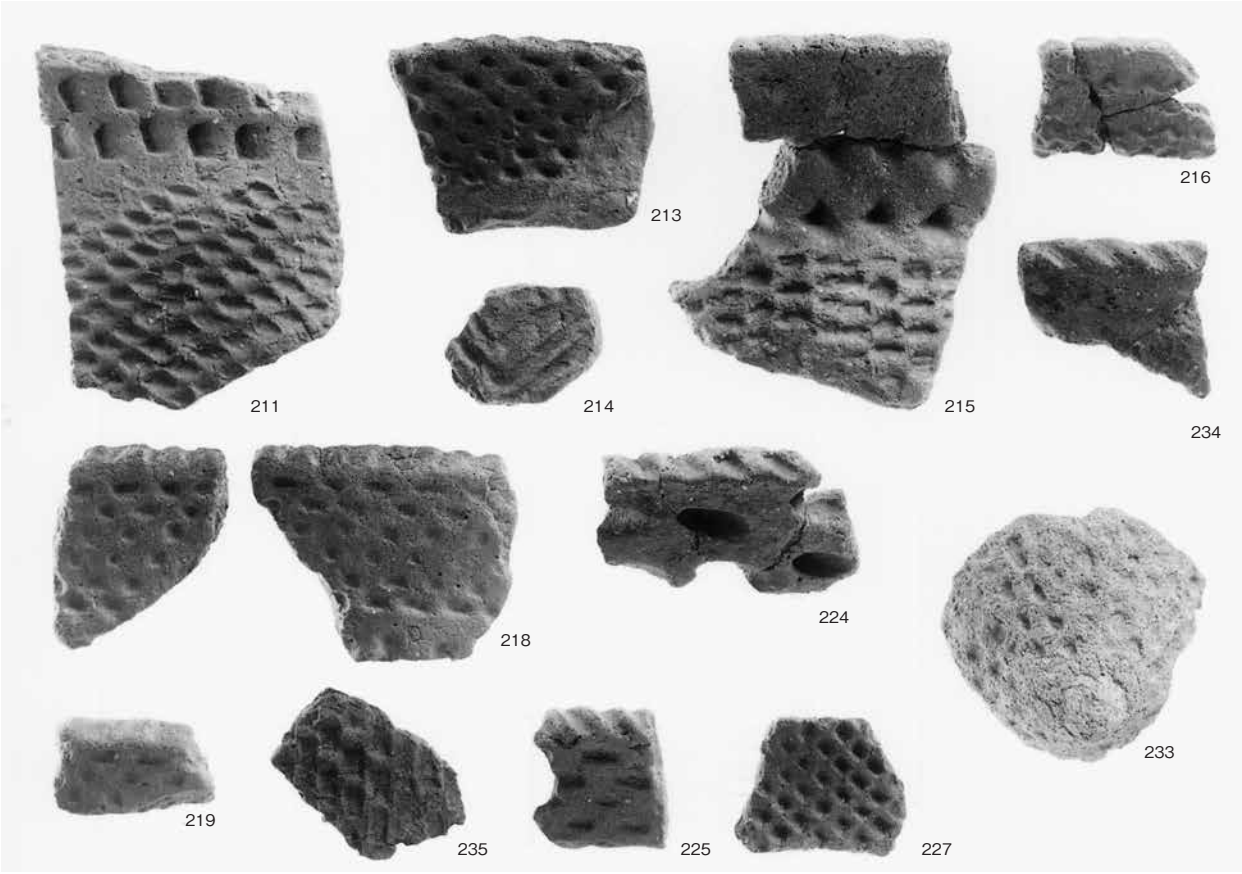
遺物　140 ～ 202

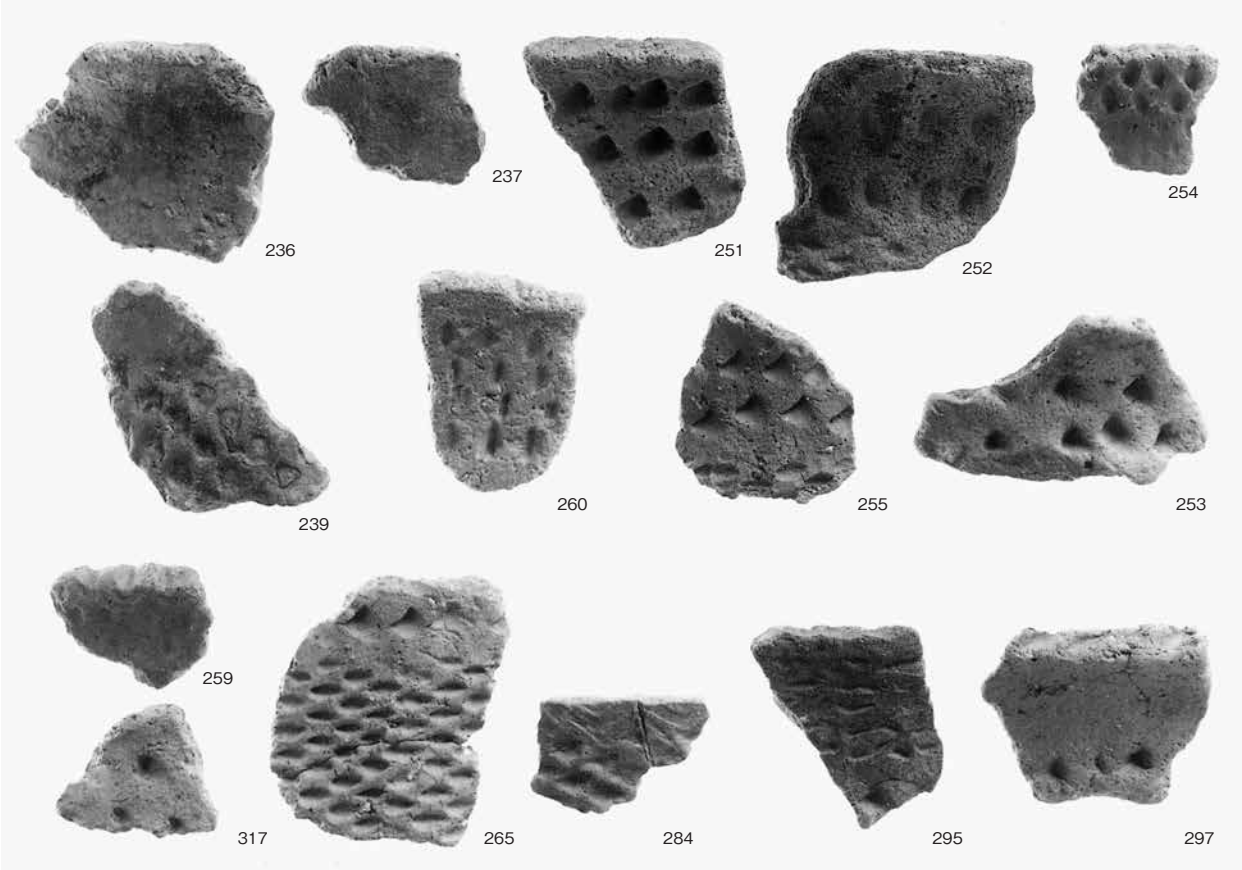
遺物　199

同、口縁端部の刻み

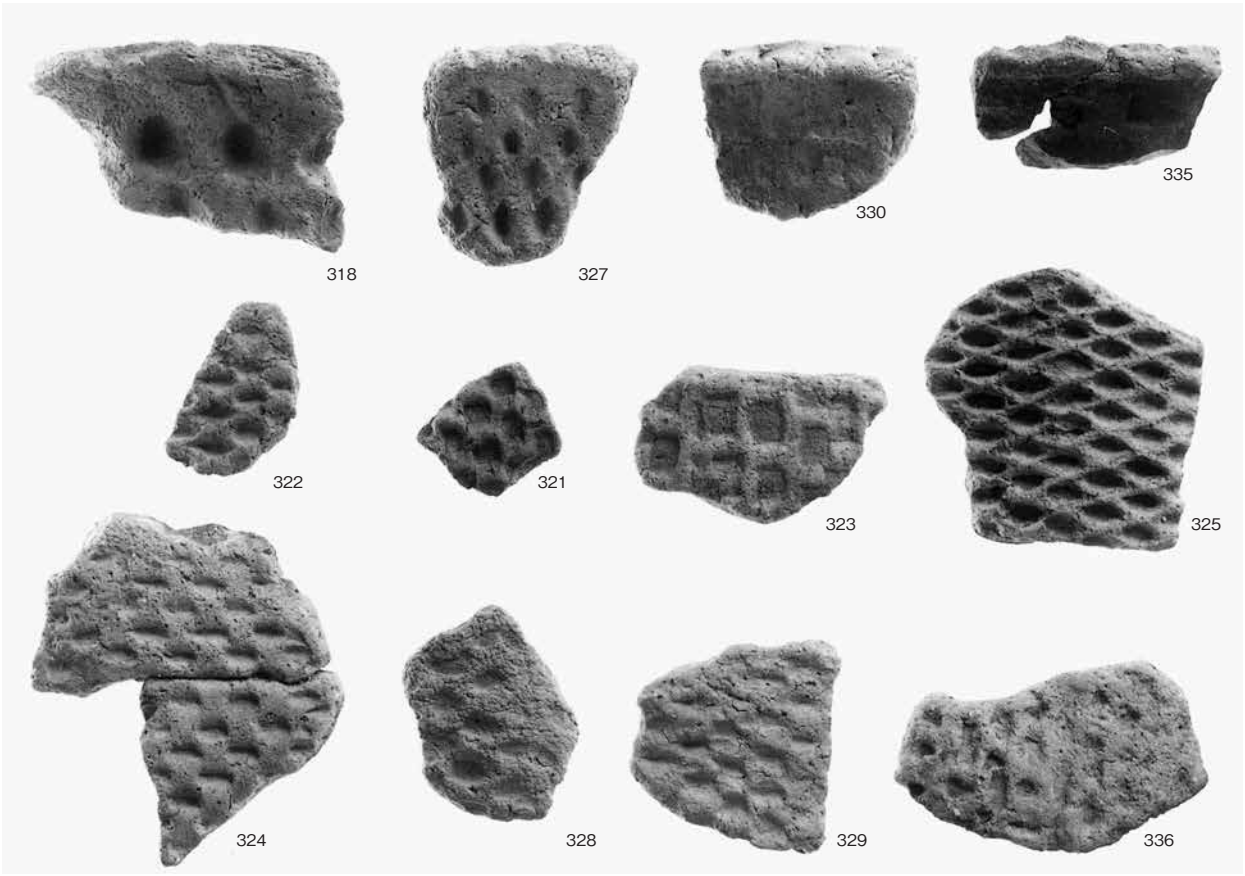
同、口縁部の刺突

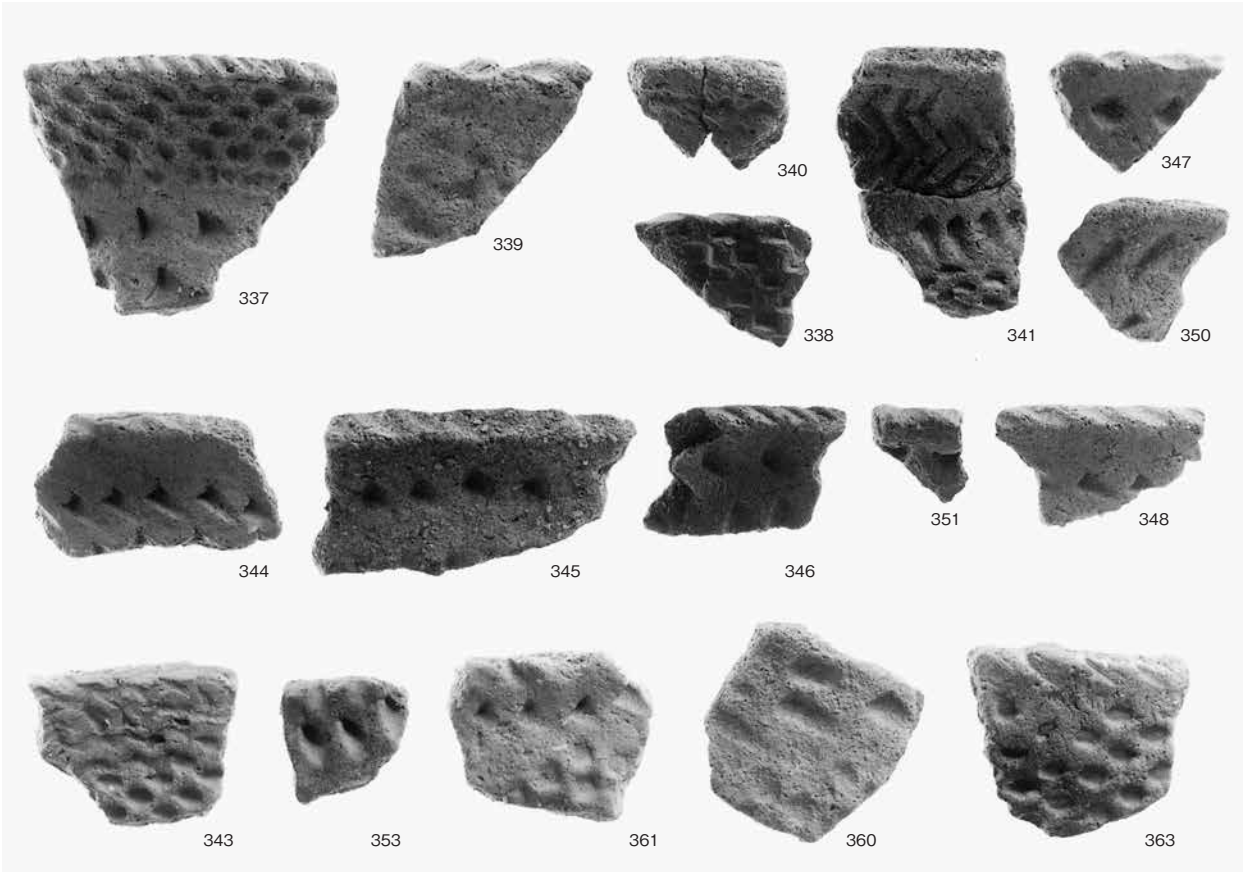
同、胴部の押型文


211
213
214
215
216
234
218
224
233
219
235
225
227

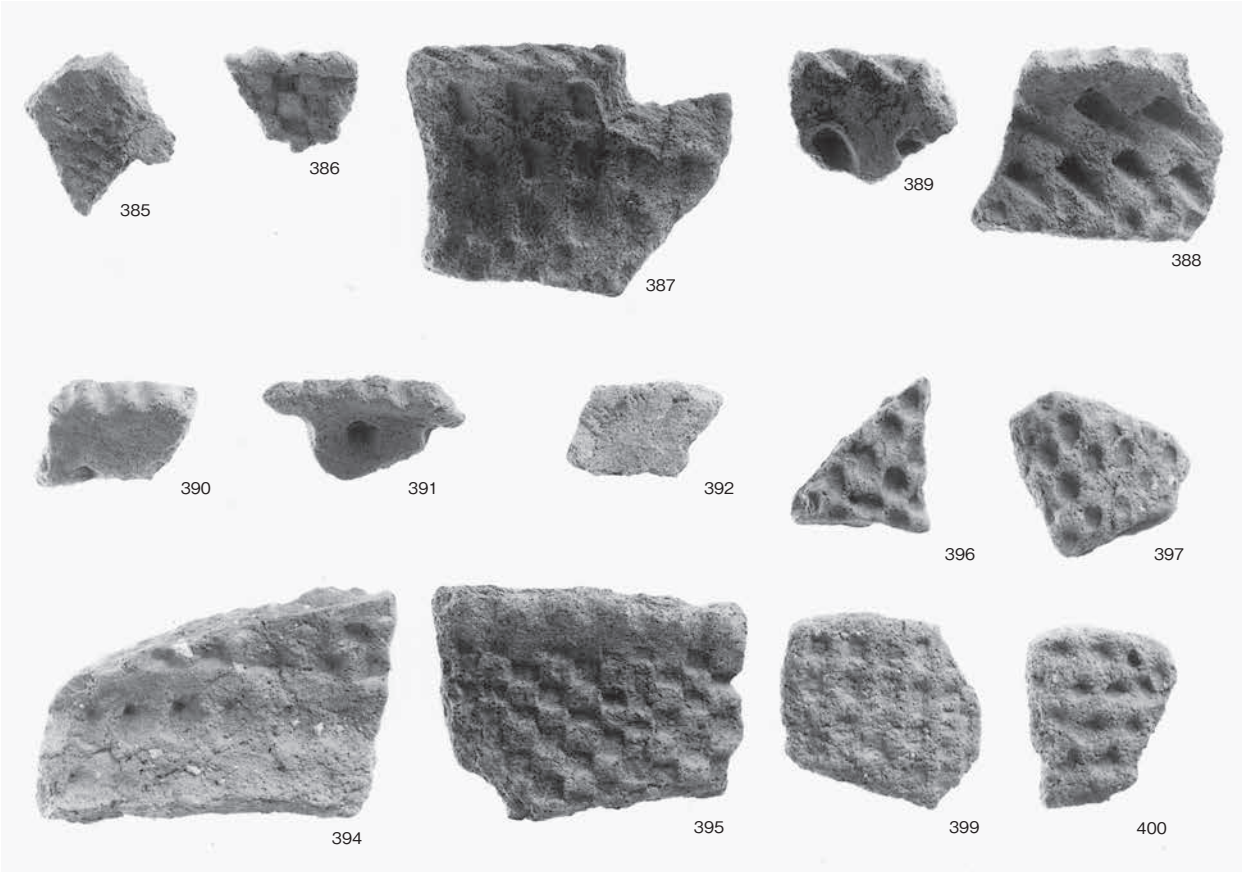

236
237
251
252
254
239
260
255
253
259
317
265
284
295
297

遺物　211～317

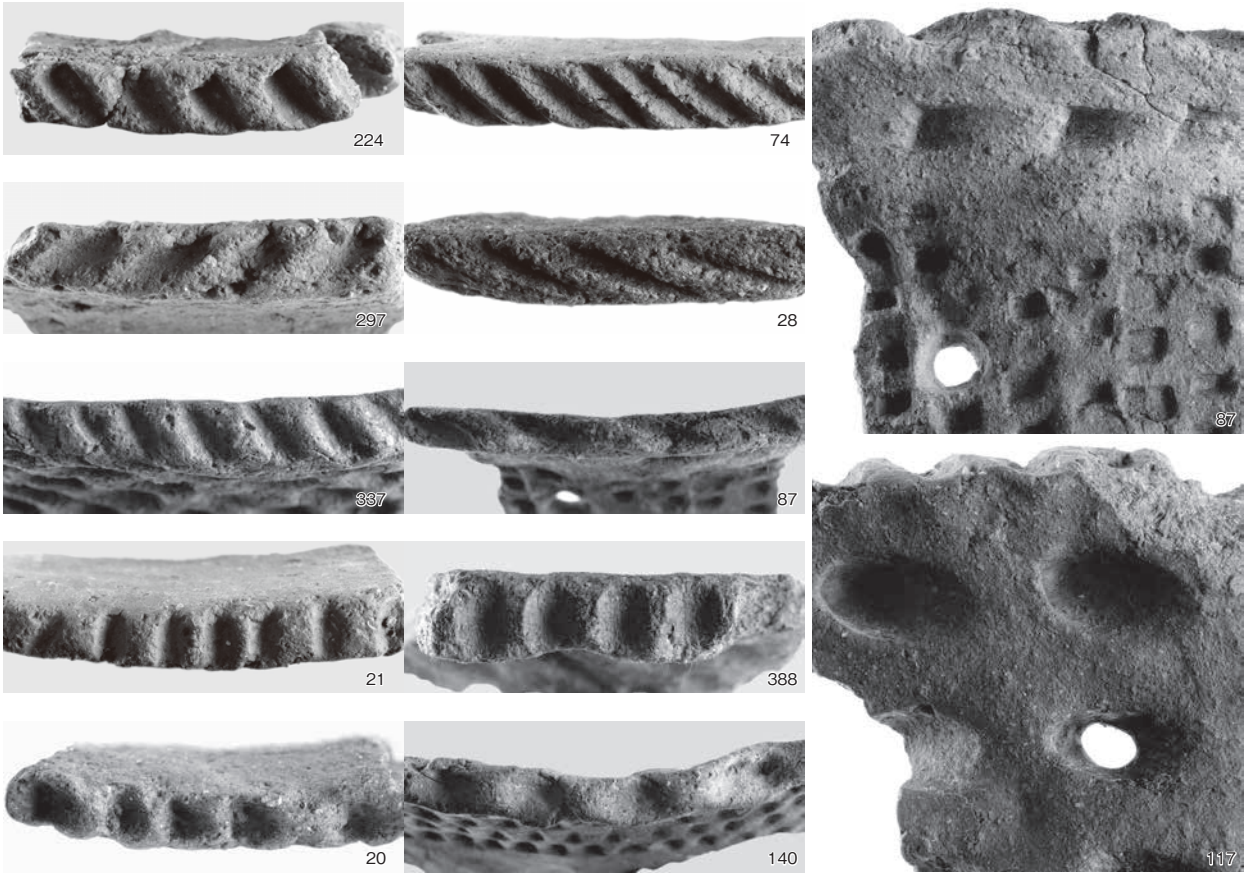

318
327
330
335
322
321
323
325
324
328
329
336


337
339
340
347
338
341
350
344
345
346
351
348
343
353
361
360
363

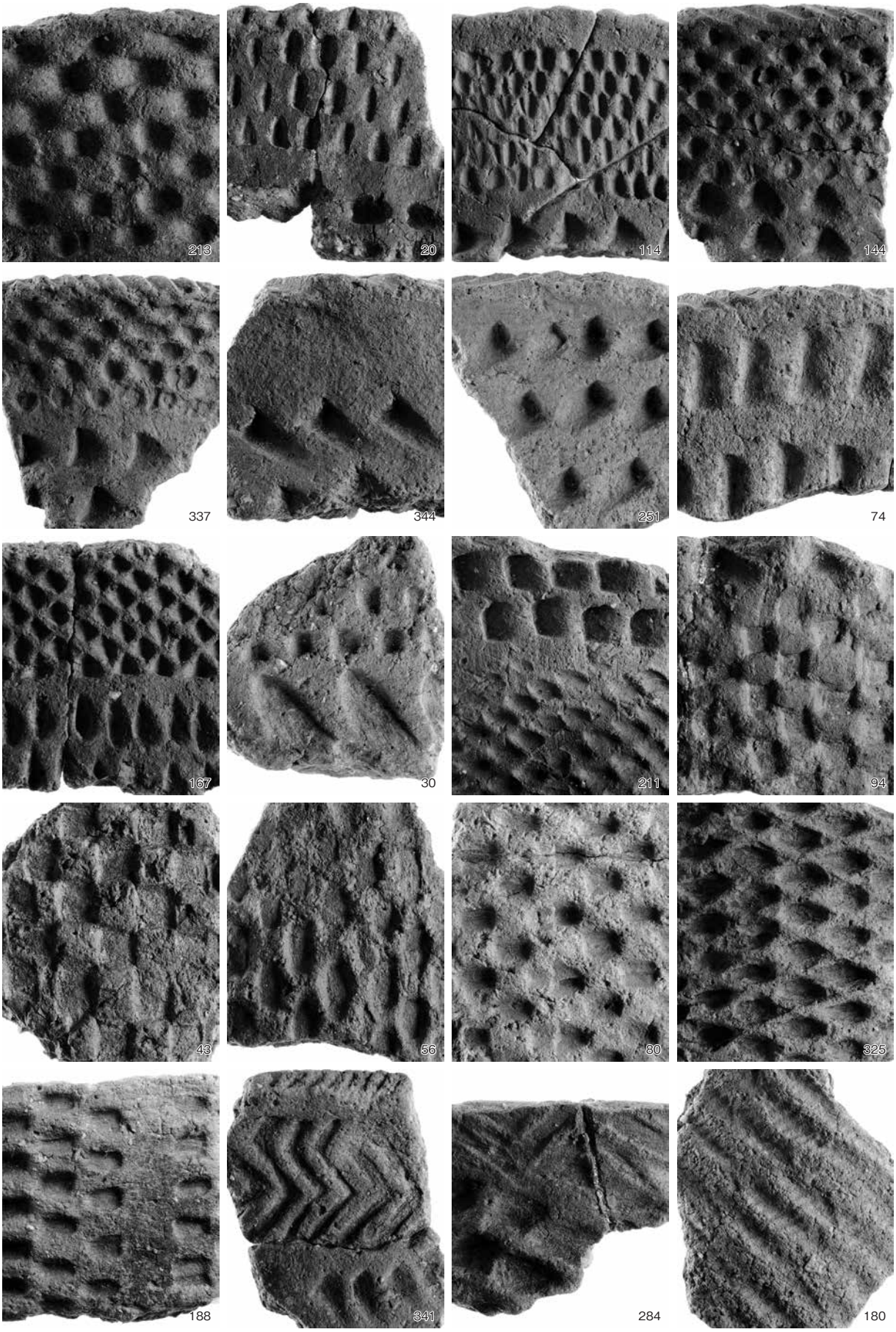
遺物　318 ～ 363



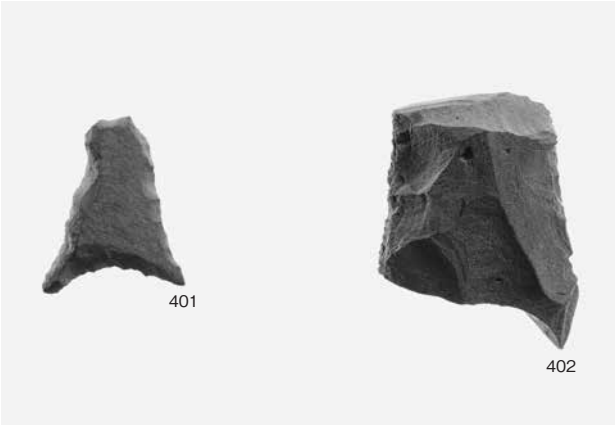
遺物　385～400



口縁端部細部（刻み）　　補修孔



文様細部（刺突・押型文・縄文）

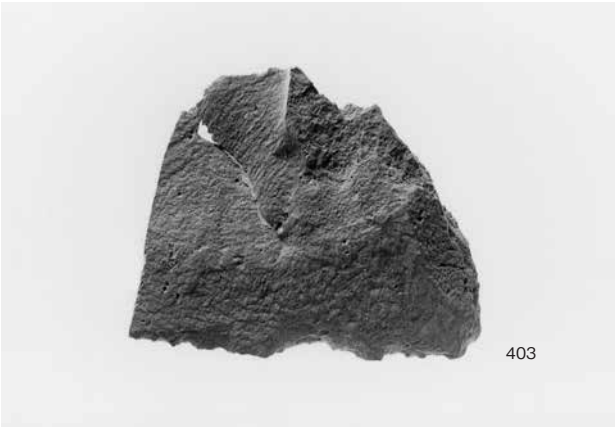

401

402

405

406

404


403

433

413

411

407

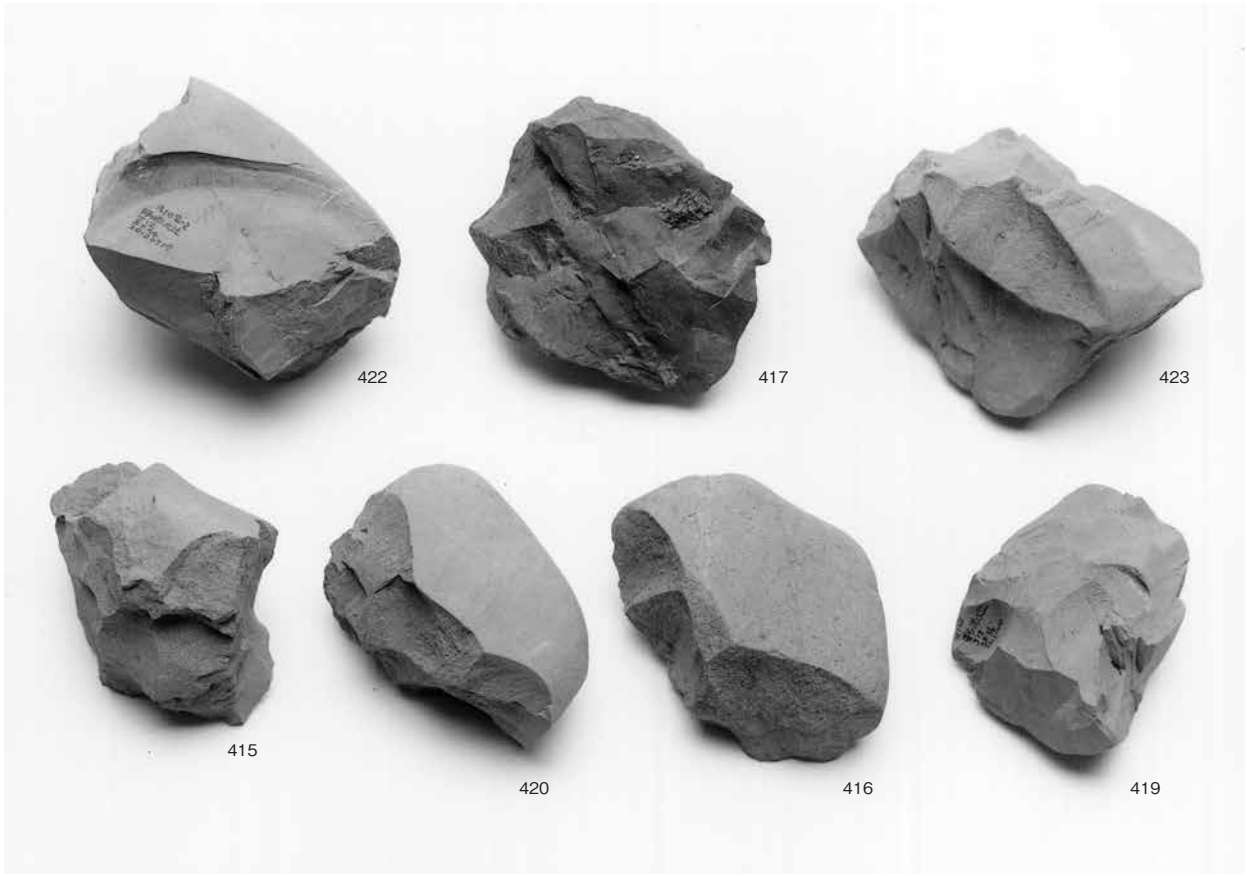
409

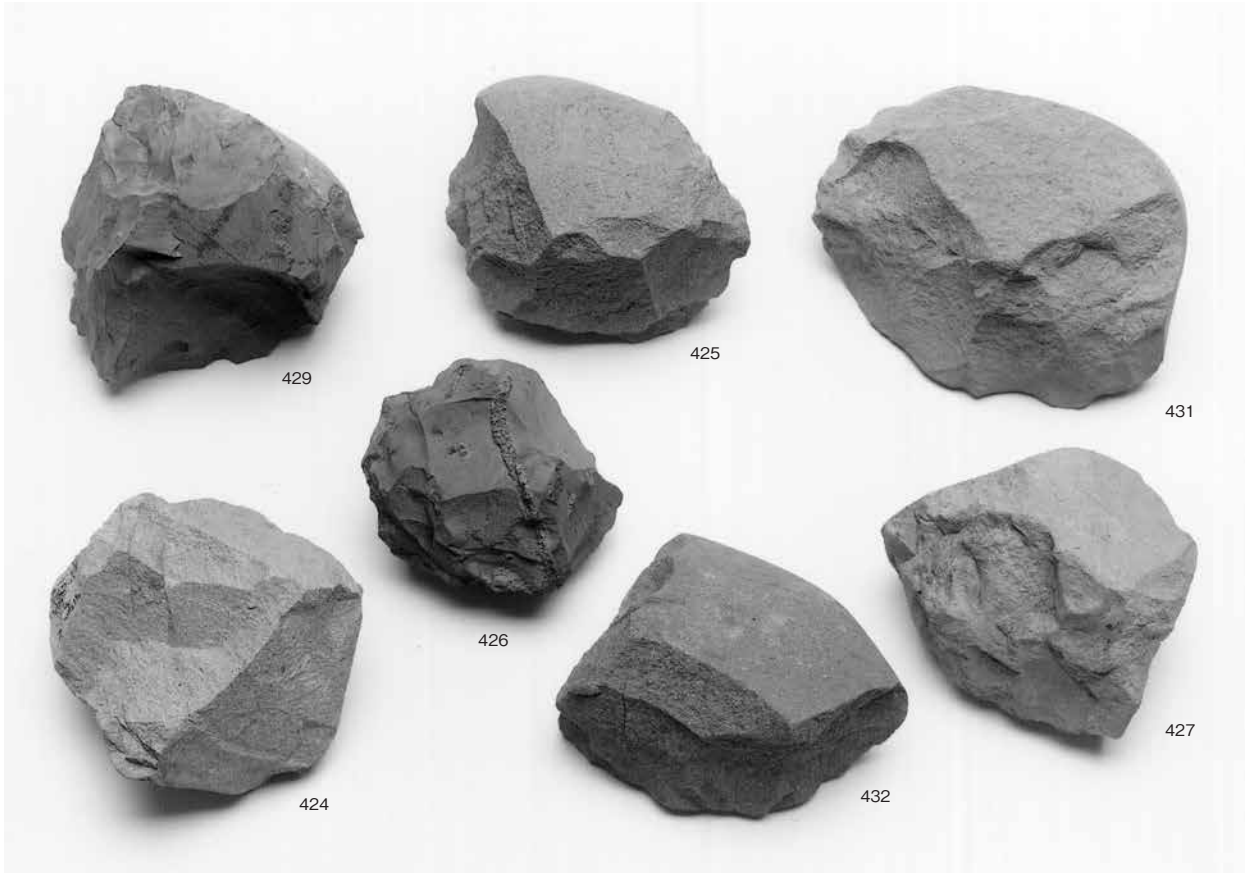
410

408

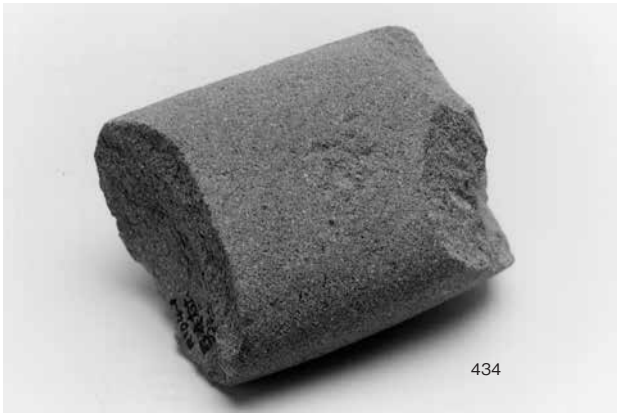
412

遺物　401～413・433





遺物　415 ～ 432

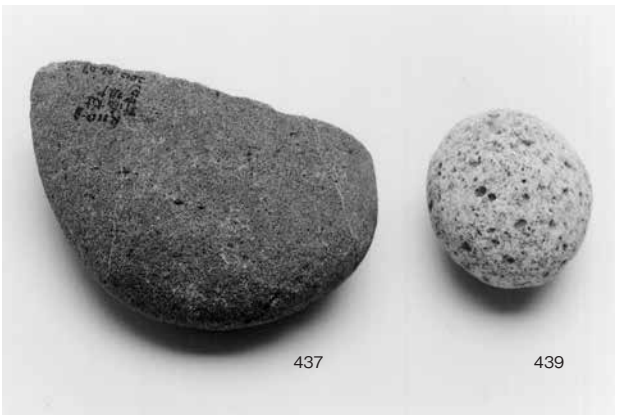

434

435

438

435 裏

436


437　439

440

441

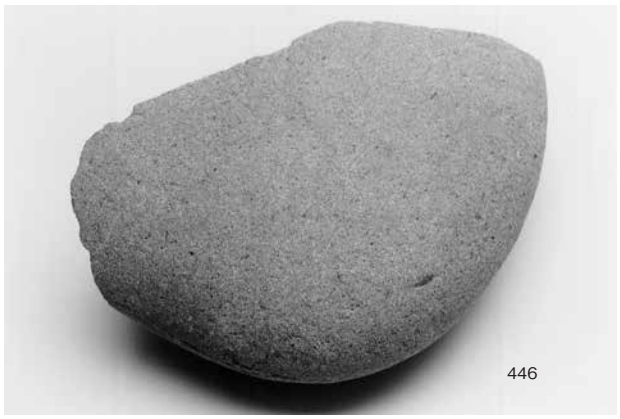
遺物　434 ～ 441

442

443

444

445


446

447

448

449

遺物　442～449

468

483

497

498

501

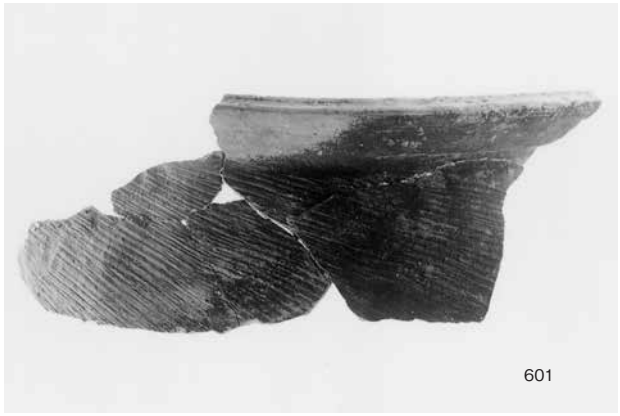
476

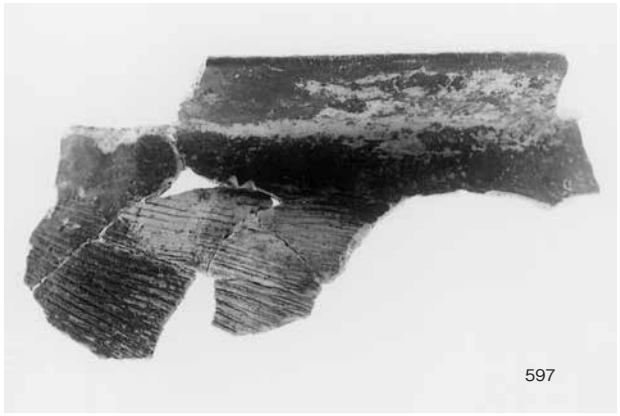
520

532

遺物　468・476・483・497・498・501・520・532

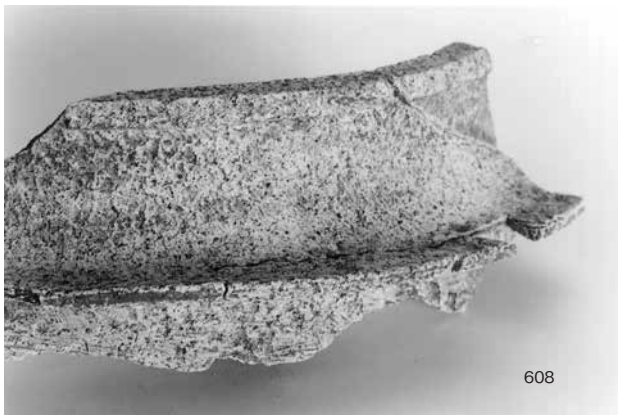
558

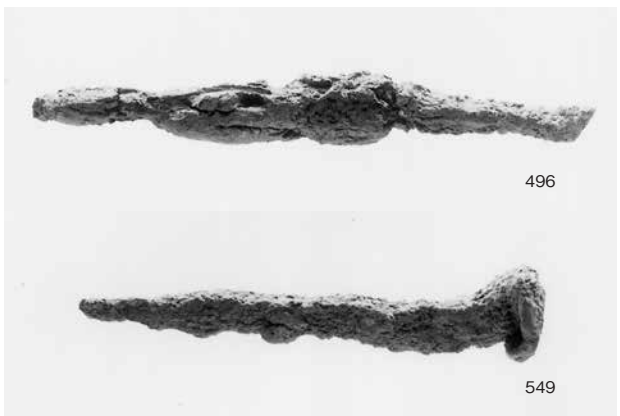

601


597

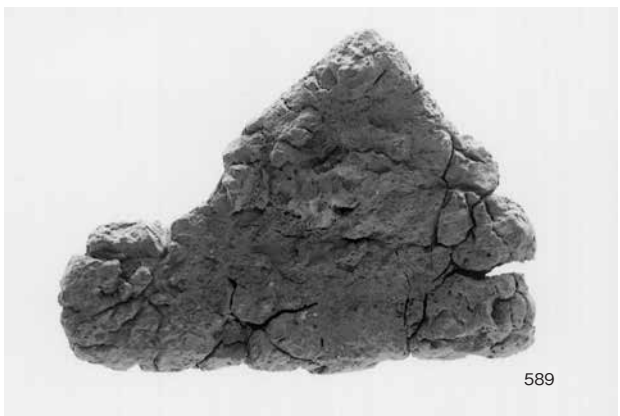
605

606


608


496

549


589

遺物　496・549・558・589・597・601・605・606・608

報　告　書　抄　録

ふりがな	のぞえおおつじいせき（だいいちじ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	野添大辻遺跡（第１次）発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	353
編 著 者 名	櫻井拓馬・星野浩行・伊藤裕偉・小原雄也
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川 503　TEL 0596 (52) 1732
発行年月日	2014（平成26）年 ３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぞえ おおつじ いせき 野添大辻遺跡	わたらいぐんたいきちょうのぞえ 度会郡大紀町野添	24471	a 45	34度 25分 2秒	136度 29分 19秒	20120508 ～ 20120925	997㎡	主要地方道 伊勢大宮線 （野添工区） 地方特定道 路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野添大辻遺跡	集落跡	縄文早期 中世 近世	竪穴住居 煙道付炉穴 土坑 井戸 石組遺構	押型文土器 石器 土師器・陶磁器	

要約

当遺跡は、平成23年度に実施した分布調査で新規発見された遺跡で、宮川中流域右岸の段丘上に立地する。道路建設予定地のうち、3地区の発掘調査を行った（中垣戸・中道A・中道B地区）。

縄文時代早期の遺構・遺物は、主に中垣戸地区で確認された。遺構は竪穴住居6棟、煙道付炉穴11基、その他の炉穴3基などを確認した。当該期の主要な遺構は、直径約40mの範囲に集中する。

出土した押型文土器は、大鼻式や神宮寺式以後を含まず、大川式のみで構成される。なかでもSF60出土深鉢は、上半がほぼ完形で、南勢地域の地域色（文様構成）をよく示す好資料である。石器は、石鏃等の剥片石器は僅少で、礫器や磨石・石皿等の礫石器が主体となる。また、礫器の製作に関連する不定形な剥片が多くみられた。

これらの遺構・遺物は、宮川水系における押型文期の遺跡様相や、近畿～東海地方西部における大川式の地域性を知る上で重要である。なお、煙道付炉穴より採取した炭化材や、土器に付着した炭化物の年代測定を実施しているが、この成果については機会を改めて報告したい。

中～近世の遺構は、井戸、土坑、石組遺構や柱穴などがある。その多くは室町時代のものであるが、平安時代末～鎌倉時代の遺物も一定量出土していることから、当地には、中～近世を通じて小規模な集落が存在したと推測される。

三重県埋蔵文化財調査報告353

野添大辻遺跡（第１次）発掘調査報告

2014（平成26）年３月20日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　　㈲ミフジ印刷